

脱国際社会におけるパーソナルリンクージ構築の あり方と今後の展望に関する研究報告書

平成 3 年 3 月



財団法人 日本情報処理開発協会

この報告書は、日本自転車振興会から競輪収入の一部である機械工業振興資金の補助を受けて平成2年度に実施した「脱国際社会におけるパーソナルリンクーノ構築のあり方と今後の展望に関する研究」の成果をとりまとめたものであります。

は じ め に

この調査研究報告書は、財団法人日本情報処理開発協会かノシステムス アナリスト
ソサエティに調査委託した「脱国際社会におけるパーソナルリンケージ構築のあり
方と今後の展望に関する研究」の成果を取りまとめたものである。

今後の社会において、市民生活を取りまく環境は複雑多岐にわたる。例えば、家庭
の問題を考えると、家庭のきすな、教育、余暇のつかいかたなどである。これら問題
の解決には同じ悩みをもつあるいは経験をもつひととのコミュニケーションが最も効果的
である。同じ問題意識、同じ目的をもった市民が共に行動を起こせは達成できること
は無尽蔵である。これは日本内に限らない。世界の人々とも連帯して行動できれば、
一国の企業、政府のみならず多くの国々の企業、政府をも草の根レベルから動かしう
る。これらの行動をしかけるネットワークがパーソナルリンケージである。

パーソナルリンケージとは、情報活動において市民が世界の人々と自由のアイデア
を検証し、仲間を集め、信頼できる情報を入手できるネットワークである。パーソナ
ルリンケージが普及していくことにより、市民の要求がさまざまに展開され、一方で
新たな社会規範のルールが形成され、世界レベルでの市民社会が到来するものと思わ
れる。パーソナルリンケージは、問題解決志向型であり、コストミニマムであり、し
かも個人が主体であり、参加者が楽しめることか必要であろう。どのようなコミュニ
ケーションチャンネルが市民生活において必要であり、その構築および運用はいかに
あるべきか。

以上のような観点から、昭和63年度よりノシステムス アナリスト・ソサエティにお
いてこの問題に取り組むこととした。本年度は、特に国際化の進展とパーソナルリン
ケージ構築のあり方およびこれらを支えるコミュニケーションチャンネルの形成につい
て、調査 研究を進めてきた。ここに、ご協力を頂いた委員および関係各位ならびに
快くインタビュー取材に応じたいいた方々に厚く感謝するとともに、あわせて本
研究成果が、何らかの意味において新たな局面での情報処理技術の発展に役立ち得れ
は幸いに存する次第である。

平成 3 年 3 月

〈調査研究・作業業務者〉

浅野貞泰 清水建設（株）技術開発部企画部
市村修一 エイホノ プロテクノ（株）ダイレクトマーケティング本部
内田和義 通商産業省通商産業研究所政策情報システム部
大場泰博 （株）東京国際研究所地域研究開発室
黒田英一 （社）日本リサーチ総合研究所社会経済研究室
小泉幸一 （財）テータヘース振興センター
柴田郁夫 （株）P I サポート研究所代表
中野孝幸 （株）日本総合研究所サイエンス事業部
中村秀生 （有）ハイテクノス代表
中村雅一 総合警備保障（株）技術業務本部技術部
日高敏充 三井物産（株）機械経理第一部
樋渡克巳 （株）キョクトーインターナショナル第2開発部
藤野幸嗣 梅林建設（株）東京支店営業部
山口法丸 第一生命保険相互会社企画部

（五十音順）

目 次

第Ⅰ部 理念編

第1章 情報化社会の新たな地平	3
1 情報化社会の検証	3
2 個人の時代と情報武装	5
3 パーソナル・リンクの必要性	6
第2章 パーソナル・リンクの背景	
—グローバルネットワーク化の時代—	8
1 情報化と企業社会	8
2 民族の自立によるホータレス化	10
3 草の根レベルのグローバル化	10
4 「パワーノフト＝知」による歴史の転換	12
第3章 パーソナル・リンク構築に向けて	13
1 パーソナル・リンクの定義	13
2 パーソナル・リンク構築に向けて	14
(参考) 明治維新前夜の西洋体験	15
第4章 ハイパーネットワークによる創造する個の重視	19
1 個人における創造性をいかにつくりあげるか	19
2 情報創造とは何か?	19
3 組織における情報流通の変化	20
4 パーソナル・リンクからハイパーネットワークへ	22

第Ⅱ部 事例編

小さな町の国際化への大きな挑戦「第2部」

—秋田県雄和町のミネソタ州立大学機構秋田校開校後の地域の人々—	27
1 ミネソタ大学の開校と雄和町	27
2 開校後の雄和町での人々の印象	36
3 まとめ—今後の課題と展望	61

（補論）外国大学誘地の地域振興効果について	65
（補論）大学のマーケティング戦略	68
日本の地方産業の将来	
—長野県坂城町に見る発展の経緯と展望	74
1 地域の活性化要因の3要素	74
2 坂城町における機械工業の発展	76
3 事例に見る地方産業の将来	84
（補論）大都市製造業の生残り策	
—東京都大田区の事例—	86
「パソコン通信による国際交流」コアラ・コリアトーク会議の状況について	91
1 韓国ネットワークの父ユー・キョン ヒー	91
2 柳京熙氏の書いたコアラの印象より（1987年3月）	92
3 韓国におけるパソコン通信の歩み	93
4 韓国パソコン通信ノンボンウム1989の開催と韓国のパソコンの状況	96
5 よなよなコアラに出現する韓国学生たち	97
6 コアラ「コリアトーク会議」開始！国際問題に答えるCOARA メンバー	100
7 韓国パソコン通信ノンボンウム1990	101
職場の国際交流	
—結核予防会での体験—	102
家庭におけるパーソナル・リンケージ	
1 我が家を取り巻く国際化その後	104
2 家庭におけるパーソナル・リンケージの活性化と深化	106

第 I 部 理念編

第1章 情報化社会の新たな地平

1 情報化社会の検証

情報に関する考察といえはすでに1960年代から行われており、決して新しいものではない。その先鞭は梅棹忠夫氏が1962年に著した『情報産業論』によって着けられたといってもよいであろう。梅棹氏は放送と情報とのかかわり合い、あるいは産業としての情報を論じたのであった。

それ以来、様々な態様で論しられる情報は、放送というマスを対象としたものから、徐々に個人相互を結合して、意志の疎通を図る手段へと移行してきたわけである。すなわち、電話というメディアがその代表格である。ラジオ、テレビというマスを対象とした情報を運搬する手段から個人的な情報を交換する電話への移行である。家庭への浸透もラジオ、テレビから電話へと移っていったのである。

勿論、現在でもテレビという、映像をそのまま家庭へ送り届ける手段が忘れ去られたわけではない。国際政治学者の舛添要一氏は、テレビの持つ影響力を事あることに強調している一人である。しかし、舛添氏が訴えるテレビは60年代のテレビと同じものではない。60年代のテレビが家庭へ伝えることのできるのは、時間的、空間的にきわめて限られたものであったことはいうまでもない。伝えるべきニュースの発生は電話、テレックスなどの手段で放送局に集められるか、それはニュース発生現場で取材した記者の原稿が伝わるのみで、家庭に飛んてくるのは記者からの伝聞でしかなかった。

新聞のように1日2回しか伝達の手続きが与えられないメディアと比べれば、発生時刻との遅れはたしかに少ない。しかし、その速度を生かせるメディアとしては未完成であった。ところが、中国で勃発した天安門広場での民主化を要求した民衆を、人民解放軍が武力鎮圧した様子、先のイラクのクウェート侵攻によって発生した多国軍対イラク軍の戦闘などか、通信衛星を介して家庭に送られてくると、国民一人一人かは時間遅れのない新鮮な情報を目の当りにてくる。したかつて、伝え手としての記者は存在するものの、記者を介して報道と映像がそのまま伝わる放送とは、その効果は比較にならないのである。こうしてテレビの威力はその本来持つ能力を十分に発揮することかてくるようになったのである。1991年の世界にはこの

ような強力なメディアが完成しつつある。しかし、このテレビの報道は必ずしもフェアなものではないことに対しては、改めて警戒を必要とするのである。それは地球上で生じたことを全て平等に報道していないからである。少なくとも番組を制作するサイトの情報選択操作が必ず内在しているからである。制作サイトの操作かすてに内在しているものを我々は見せられている。制作サイトは当然画像として見栄えのする材料を選択するという本質的な性格を持っているので、ややもするとイラク紛争と同時に進行しつつあるソ連邦の民族問題の推移や、同等の大きな事件が生しても、取材の容易な方を選択しかちてある。

たとえば、同じ中国では天安門前広場で起こった出来事のみがセンセーショナルに伝えられたか、チベットで起こった暴動に関しては、ほとんど伝えられることはなかったのである。この点に関しては、テレビはあくまでマスを対象としたメディアであり、依然としてその域を出ていないのである。

そのテレビの持つ映像伝送という特徴を、電話という個人間の情報伝送手段に導入したものかテレビ電話であったか、異なる対象を目的としたメディアの結合は、多くの人々の支持を得るまでには至っていない。これまでマスを対象としたメディアとして受入れてきたために、その利用に馴染むことかできないのである。

テレビ電話のパブリック・アクセタンスは未だに低いまであるか、マスを対象とした片方向の情報メディアは放送と呼ばれている。一方、電話は電気通信手段の典型例である。近年、この放送と通信が融合しつつある。89年にわが国で初めて日本通信衛星か民間の通信衛星を打上げて、現在実用に供されている。これはその名の通り、通信を目的とした人工衛星である。したがって、郵政省はこの通信衛星からの電波を受信する直接衛星放送を制限していたか、89年の電波法、放送法の改正で、通信衛星の放送への転用を認めるようになり、91年秋には音楽放送に利用され、92年には直接衛星放送か通信衛星によって実用化される運びである。

メディアはこれまで技術主導で用途開発が行われてきたか、技術の進歩によってティンタル化、大容量化か進み、用途に依存しないメディアか登場するようになってきた。地上系のティンタルサービス統合網（ISDN）はその際たる例であるか、ようやくメディアを利用する側かその生殺与奪の権利を握り始めたのである。湾岸危機をテレビの前の視聴者か目の当りにてきたのは、実はこの衛星通信というメ

ティアのおかげであった。国際通信衛星を手掛ける企業には、いずれも大幅な回線需要があり、湾岸危機ではインテルサット社は、160件の予約が400に急増したと報いられている。衛星通信というメティアは、1963年にケネディ大統領の暗殺という大事件の映像をノコンム衛星が日本人に見せてくれて以来、長足の進歩を遂げて、次第にその本来の威力を発揮しつつある。

2 個人の時代と情報武装

利用者側にメティアの利用が委ねられてくると、必然的に利用者側の情報選択能力が問われることとなる。情報の利用に個人の主体性が求められるのである。メティアがパーソナル化すると、個人が情報を消化、消費する能力が格段に向上する。15年前には存在しなかったパーソナルコンピュータはノート大の大きさに小型化されているか、その情報処理能力はかつての大型コンピュータに匹敵する。

情報処理だけではない。自動車電話から携帯電話、テレターミナル、MCA、テレポイントなど、移動しなからでも従来の電話網に接続し、場所と時を問わない通信手段が登場してきた。これらは個人の情報交換、情報伝達を促進し、個人の情報環境を大きく変えつつある。情報と通信の両方をミックスしたパノコン通信も実用化され、情報化社会に大きなインパクトを与えている。まさに、情報通信手段のパーソナル化に加速がついてきた。すでに既成手段の活用の成否か、企業の消長を決定するように、パーソナル用途の情報通信手段の活用が個人の成否を決定する。これが情報化社会に求められる個人の基本的な能力になるのであろう。

放送分野でのパーソナル化も進んでいる。既成の空中波によるテレビ放送に飽き足りない視聴者にとって、ケーブルテレビ（CATV）はその欲求を吸収する新しいメティアであった。米国CNNのオーナーであるテット・タナーは衛星の特徴を生かして、各地のケーブルテレビに大量の情報を配給すること一躍放送界の寵児となり、三大ネットワークを脅かすチャンネルを築き上げたのである。これも、放送のパーソナル化といえよう。ケーブルテレビは従来の空中波のテレビ放送と比較すれば、ケーブルを敷設するという物理的特性からマス・メティアたり得ない。しかし、タナーはそれに衛星を取入れたことと結合し、時間を問わない放送供給体制を整備すると共に、モアチャンネル化、チャンネルの専門化というパーソナル指向に

よって、成功を収めたのである。

一橋大学の今井賢一教授は、情報化社会ではネットワーク、とりわけ人的ネットワークと情報通信ネットワークを利用する能力が重要であることを強調している。この人的ネットワークも情報通信ネットワークも共に、国境や文化の枠を容易に超越することか可能であるし、情報通信ネットワークの能力はコミュニケーションの最大の障壁である言語の違いをも克服する可能性を秘めている。

3 パーソナル・リンケージの必要性

われわれか3ケ年にわたって取組んできたパーソナル・リンケージ・プロジェクトは、『国際化』かすてに個人のレベルで避けて通ることのできない課題でありながら、それを克服する手段や環境という側面での遅れと障害を憂慮に端を発している。換言すれば、企業の国際化はすてにかなりの程度進められているにもかかわらず、日本という国家による様々な制約か個人レベルの国際化を妨けているのではないかという疑問である。

ここ数年のわが国の『国際化』は、従来とは異質の国際化であったことは誰もか認めるところであろう。ベトナム難民の漂着、急増する外国人労働者、米国の大学日本校の誘致合戦など枚挙に暇かない。このいずれも日本人か海外へ進出したり、観光旅行にてかける従来の流出型の国際化とは異質である。もちろん、日本人の海外流出も個人レベルで簡単に外国へ赴くことかできるようになり、おひたしい数の日本人か海外へてかけるという点では従来とは規模の点で違いかある。しかし、ここてとらえる国際化は、文化、言語、民族の異なる外国人と仕事を共に、生活を共にするというレベルでの国際化を問題にしている。

折しも92年には欧州でECが統合される。欧州での国際化はそれぞれたけではない。社会主義諸国の政治体制の崩壊によって、EC統合そのものかこれまでの歩みをさらに一歩進めなければならないほとに現実の世界の変化か先行しているのである。文化、言語、民族か異なる欧州では、すてにその統合の過程で計り知れない試練を経ている一方で、わが国はほとんどその意味での国際化の先礼を受けていない。

先般の湾岸危機ではわが国政府の外交に、国内においても評判か集中していた。しかし、外交は政治家や外交官のみか行うものではない。彼等は我々日本人の文化、

言語、民族を背景にして対応したのであり、決して特殊な日本人ではない。彼等への批判はそのまま日本人一人一人に向けられたものである。個人としての日本人が欧米のように、文化、言語、民族の違いを克服するのに血を流した経験を持たないために、きわめて未熟な対応しかてきなかったのである。

初年度の報告書でも触れたように、カネ、モノはすでにホーターレス化しており、わか国はそれによって大いに恩恵を享受してきた。ところか、ヒトの国際化だけは進まなかった。しかし、ここ数年現実が先行して、制度的にも情情的にも従来の対応を改めるべき時期が来たことを思い知らされたのであった。

その人的な国際化の第一ステップとして、われわれは従来の国際化を超越する『脱国際』を前提としたパラタイムノフトの必要性を感じたのである。そこでのパーソナルリネーションには、昨年の報告書で、「精神とテクノロジーの統合」と述べている通り、脱国際社会でのクローハルな文明を創造するためには、統一性と多様性の二つの側面が必要なのである。統一性とは共有、類似性、協力、コミュニティ、クローハルなものの全体で、多様性とは独自性、人間、文化の違い、競争、個性、個人個人の全体である。

パーソナル指向のテクノロジーと、異文化、異民族との共生という課題が個人レベルで目の前に突付けられている現在、この異質なものを結び付けていくことで新たな創造性、すなわちパーソナルリネーションの構築が必要となってきたのである。

《参考文献》

- 1 「脱国際社会におけるパーソナルリネーション構築のあり方と今後の展望に関する研究報告書」ノシステムス・アナリスト ソサエティ平成元年3月
- 2 同、同平成2年3月
- 3 梅棹忠夫「情報の文明学」中公叢書昭和63年6月
- 4 タナ・L・トーマス（常盤新平訳）「アメリカ マスコミ事情」TBSフリタニカ1982年9月

第2章 パーソナル・リンケージの背景 —グローバルネットワーク化の時代—

1. 情報化と企業社会

昨今の産業界や企業活動の変化を見れば、情報メディアの進展の影響をつぶさに
見ることかできる。情報メディアは、企業経営や日常の企業活動を大きく変えよう
としている。情報技術か最も早くそして多様に取り込まれている企業内の活動を分
析することから、情報メディアか近い将来我々の日常生活の場面てどのような影響
を与えようとしているかか導きたせる。

もはや金融関連企業では、ホタノひとつを押すことによってリアルタイムで多額
の資金か売り買いされる。POSノシステムを導入した大手のコノヒエノス スト
アーかメーカーとの力関係を変化させた。情報を征することか企業間の力関係を大
きく変えてしまうはとの可能性かあることを証明している。さらに、情報ノシステム
を張りめぐらすことによって宅配便事業という新しい産業か生まれ、生活者に対し
て新しいサービスを提供し始めている。企業内の日常的な活動の中でも情報メディ
アは多様に取り込まれている。企業内のLANノシステムを構築することによって、
今まで書棚に積まれていた多くの資料かテータヘース化され、誰もか必要なときに
検索てきるしくみか普及し始めている。外部のテータヘースにアクセスし必要な情
報をオンラインて入手することも日常的な活動のひとつになろうとしている。検索
されたテータを加工し新たな価値を生み出す情報を作りたすことによってライハル
企業への差別化を図ろうとしている。情報メディアか企業活動のさまざまな場面に
取り込まれることによって、情報ノシステムか企業の日常的活動の効率化を志向して
いた階段から企業経営そのものに影響を与える段階へとノフトしていることか指摘
てきる。企業内の個々の情報メディアかネットワーク化されていくことによってさ
らに情報メディアの影響か大きくなっていくてあろう。

情報化の進展が及ぼす企業への影響は、企業内部の力関係においても徐々に変化
を与えることか考えられる。情報ノシステムの進展によりリアルタイムの情報て扱う
機会か多くなるにつれ、意思決定においても迅速て対応しなければならぬ状態か
生しるからてある。時間かライハル企業との勝敗て決定する要因となる場面か多く

存在すると考えられる。このような場面では社内調整に手間取っていることは許されず、企業内の意思決定の方法を見直しすることが必要になる。ファントマノーナーと称される人達がその端的な例であろう。彼らは、ホタノひとつで一日100億円単位の仕事を消化している。しかも自分自信の判断に基づき行動している。彼らは、意思決定の判断材料となる情報を収集し、自らの判断によって決断する責任と権限を与えられている。少なからずこのような仕事のやり方が今後多くの企業活動の中で発生してくるであろう。しかしながら、多くの企業では情報を集める人、資料を整理する人、上司に報告する人、判断する人といったように多段階的に組織形態が分業されている。このような状況を打開するためには、もはや前述の例のように企業の中で特定の個人に責任と権限を与えざるを得ないことを意味している。言うなれば、従来の企業組織の特徴である多段階的な意思決定のしくみを見直し、個人のスキルを最大限に発揮できるしくみ作りが極めて重要になっていることを物語っている。情報化の進展は、従来の企業内の価値観やしくみの中で“個人の価値”を相対的に高めていくであろう。

次に情報化の進展によってデータとして扱えない生の情報に対する価値が相対的に高まる傾向が強くなることである。データを容易に収集し、加工することから日常的になれば非公開情報をいかに入手するか重要になるからである。信用情報やアイティアなどかその類である。企業の中でも、人の知らない情報をいかに集めるかが仕事の上で大きな武器になる。しかし、非公開情報を入手する手段は人との会話から直接得るしかない。このような状況では、個人レベルの情報ネットワークが効力を持ち、今後非公開ネットワークが今まで以上に普及していくことが予想される。情報メディアの発達には、このような非公開ネットワークの形成を容易にする手段としてますます利用される機会が増えるであろう。

情報化が企業社会に及ぼした影響は、ソフトに対する価値観を定着させたという点においても注目されるべきである。日本の企業環境風土の中では、具体的なものとしてのハードに対する支払いは抵抗ないものの、ソフトはただという認識が定着してきた。昨今の情報化の進展によって「情報の価値」という言葉が広く社会的に使われるようになってきたが、知恵やノウハウに対する価値が徐々に理解されるようになってきたことも情報化の進展の恩恵であるといえる。

2 民族の自立によるボーダレス化

東欧の民主化が始まってから一昨年には東西ドイツが統一され、この数年間に歴史的な民主化の動きがあった。一方、米ソの歩み寄りにより緊張緩和が進むなかで、民族紛争とも言える地域紛争が世界中で起こっている。イラクのクウェート侵攻やソ連のアルメニア、アセルハイジャク、クルディスタン地域における独立運動がその代表である。その中でも、イラクのフセイン大統領が世界中のアラブ人の湾岸戦争への支援を呼びかけている場面では、民族による繋がりをはるかに越え、リアルタイムで世界の隅々まで到着することを知らされた。世界の政治や経済に直に影響を与えるほどの力を持つことを思い知らされた。

これらの事実から我々が学ぶことのひとつとして、ネットワークの規模が膨大になると世界の政治や経済に大きな影響を与える力が構築されるということが挙げられる。個人ひとりの力には自ずと限界があるが、多くの人の結びつきが一端構築されたならば社会の中で大きな発言権を持ち得ることを提示している。と同時に重要なことは、その手段として最も効果的な情報メディアがすでに我われの生活の中に築かれつつあるということである。また、良好な世界経済や国際政治を維持するための秩序も“民族”という個人のレベルの繋がりには限界のあることを知らされた。世界経済や国際政治には、協調という言葉はあっても民族紛争にはその言葉を探すことさえ難しい。経済や政治の分野ではすでに国を越えたボーダレス化が進んでいるか、今後個人レベルでのボーダレス化が進展する背景には個人を結びつける強力な問題意識や目標を個人自らが持つことが求められる。民族や宗教による繋がりには、その最も強固な例として考えることができる。

3 草の根レベルでのグローバル化

今後、非公式ネットワークの構築があらゆる場面で増していくことが予想される。こうしたネットワークは、これまでも多くあったであろう。しかしながら、非公式ネットワークが増加するにしたがい社会の中でその存在を軽視することや実質上できない状況が近づいていると考えられる。その理由のひとつとして、さまざまな情報メディアの発達によって場所や時間に制約を受けないコミュニケーションが可能になりつつあることや誰にでも簡単に操作の可能なシステムが構築されることに

よって、情報を発信しようとする人ひとにとって極めて有効なシステムが誕生するからである。一端形成されたネットワークは口コミを介して広がり、誰もかシステムにアクセスできるようになればさらにそのネットワークが細胞分裂を起こし多数のネットワークが形成されていくであろう。このように非公式ネットワークが細胞分裂を繰り返し一般化することによって社会の中の組織における合意形成や価値観に大きな影響をもたらすであろう。最近、社会福祉やボランティア活動に対して関心が高まっているか、どのように参加したらよいかといった声をよく聞くことがある。知りたい情報があるときこれまでは新聞や雑誌などで関連の記事をタイムリーに見つけて情報を得なければならなかったか、自分の情報を登録しておくことで必要なメッセージを可能なときに入手することかてきえるようになれば同じ意思は目的を持つ仲間かすくにてきえるようになっていく。これらのネットワークが我われの生活の場面で展開されるようになれば社会的なコミュニケーション手段が飛躍的に変化していくであろう。

さらに、非公式ネットワークは、現代の社会的な要請として新たな役割を担っていくことか予測される。情報化の進展、高齢化社会の到来、そして価値観の多様化といった社会トレンドに対して、伝統的な社会的制度や従来の行政・産業のしくみでは十分に対応できないという問題が発生している。異種な情報の組み合わせやタイムリーな情報入手は社会的な無理・無駄という諸現象の緩和に貢献する。これらのコミュニケーションが国際的な分野を横繋ぎし、上下のコミュニケーションを廃止し均一的なヒエラルキーのコミュニケーションを活性化させることか望まれる。これらの影響によりタテ割り社会の中て欠落する様々な情報や問題を横繋ぎする機能は、生活者の意見を直接行政や関連機関に反映させる絶好のツールとなるであろう。

これらのことは企業の中て個人の価値が高まっていくのと同様に、生活者が社会の主役として台頭する可能性を伺わせる。情報がひとりの人間ても容易に集約できるしくみか強まると、その人はさまざまな情報を収集・分析しやすくなり、自分の非公式なネットワークを通して信用調査を行い自主的な行動を起こしやすくなる。目的に応じた情報が得やすい状態では、自らの可能性を閉ざすことなく前向きに行動が起こせるようになるであろうし、また新しい新鮮な情報を得ることによって自

らを自己開発できる機会も増加するであろう。このような社会では、個人の欲求や価値観をいかに達成するという視点が重要になってくる。換言すれば、個人の意思やアイデンティティを確立することか個人の最も基本的な要件であるということを認識しなくてはならない。

4 「パワーシフト＝知」による歴史の転換

アルビン・トフラーは、「パワースhift」の中で、これまでの権力構造のすべてが崩れつつある瞬間に我々は生きていると述べている。そして、力の構造の変化の中でも暴力・富・知識の比重が変わってきた、としている。トフラーは、知識の比重の大きさに注目している。

我々は先に個人の価値が高まっていくと、情報を収集・分析する能力を持つ個人が不可欠であると述べた。パワースhift＝知による歴史の転換は、こうした情報武装した個人の時代の到来であることを他方では意味しているといえよう。

《参考文献》 「パワースhift」 アルビン・トフラー
徳山二郎訳 フンテレヒ出版 1991年

第3章 パーソナル・リンケージ構築に向けて

1 パーソナルリンケージの定義

21世紀に向う私達にとって、好むと好まざるとにかかわらず、一人一人が国境の壁を越えてネットワークを取り結ぶ時代を迎えている。本報告書第Ⅱ部「事例編」で見たように、草の根レベルでの結びつきが始まっていた。秋田県雄和町では、アメリカの大学が開校し、秋田の小さな町にアメリカ人スタッフ、留学生などが数多くやってきた。町のあちこちで交流が少しずつ始まっていた。また、長野県坂城町では、あるアメリカ人の文化人類学者が住みついて、あちこちで交流の小さな渦が生まれつつあった。地域はかりではない。職場でも、家庭でも、国境の壁を越えたネットワークが生れていた。

私達の考えるパーソナルリンケージは、こうした動きを背景に生まれてきたものである。

昨年度（平成元年度）の報告書「脱国際社会におけるパーソナルリンケージ構築のあり方と今後の展望に関する研究報告書」において、私達はパーソナルリンケージを次のように定義している。

「草の根レベルでの市民生活の情報活動において、市民が、世界の人々と自由に自分のアイデアを検証し、仲間を集め、信頼できる情報を入手できるネットワークのことを、パーソナルリンケージと呼ぶ」

世界の人々と、問題意識を共有し、目的をわかちあい、行動を共にするためには、まずパーソナルリンケージが不可欠である。

しかしながら、今回の湾岸戦争にみるまでもなく、日本は世界への貢献、ハーテノ・ノフェアリンクについては、これまで不得手であった。しかしよく指摘される、島国たから、単一民族たから、という理由だけではとおらない状況に至っているのは事実である。たからこそ、地道な草の根レベルでの、パーソナルリンケージによって、世界の人々の共感を得ると期待されるのである。

パーソナルリンケージが普及していくことによって、市民の欲求がさまざまに展開され、一方で新たな社会規範のルールが形成され、世界レベルでの市民社会が到来するものと思われるのである。

2 パーソナルリンケージ構築に向けて

パーソナルリンケージの構築に際して、障害が多数存在するのも前年度の報告書で指摘したところである。法的、政治的、経済的、文化的な壁である。これだけではなく、最近のソ連邦の少数民族の動き、イラクのイスラム教宗派の反政府運動をみることから、民族の壁、宗教の壁は依然として根強いものがある。小さくなる地球であるにもかかわらず、人々の意識はまた民族や宗教や国家の枠の中にとまっている。パーソナルリンケージの構築が困難をきわめるのもうなすけるところであろう。

そこで、私達は草の根レベルでの、普段着での付き合いが重要であると指摘しておきたいのである。草の根レベルでの、肩ひしならぬリラックスした付き合いのなかから、民族や宗教、国の違いを越えた、人間同士の交流が生れる、というのは楽観的であろうか。たしかに国際政治は、国と国とかむきたしの力と力でふつかりあう。民族対立も、血で血を洗う抗争に結びつく。宗教対立もそうである。しかしながら、無駄な抗争の中から、人類の英知か生み出したものは尊重されるべきである。西洋史において、宗教の自由は、中世の宗教戦争という長い戦争のあと人類の英知か生み出したものである。第一大戦後生れた国際連盟も、国と国との何度にわたる戦争を経験した結果、誕生したものである。いろいろ違う人々が互いに隣り合って生きている、何かと共存していく道を探ろう、という理想主義的な試みてあったといえる。私達もパーソナルリンケージ構築のために、ことさら構えたりせず、気楽に付き合う必要があるようだ。自然体のコミュニケーションとてもいえる。そうした事例を、第Ⅱ部「事例編」の秋田県雄和町のところてみることにしてきた。

そんな時代に今至ったといえる。

(参考) 明治維新前夜の西洋体験

1 日本人の西洋体験

年間1000万人もの人々が海外渡航する現在からはおよそ理解できないことがある。それはわずか130年ほど前の日本は、鎖国のままて、海外とのパイプは長崎出島のオランダ商館からの情報、対馬藩の朝鮮との交流からもたらされる情報など、数は限られていたことである。支那の遠くに国があり、そのまた向うに世界があるとは知られていなかったのてある。

そんな日本人か、ペリーの黒船によって開国し(1853)、急激な国際化の波にほんろうされる。そして、1860(万延元年)日米修好通商条約批准書交換のため77人の使節団が太平洋を渡った。翌1861年(文久元年)には、竹内下野守らの遣欧使節37人かヨーロッパに向った。1863年(文久3年)には、遣仏使節、1865年(慶応元年)には遣仏使節、1866年(慶応2年)には遣露使節、1867年(慶応3年)には遣仏使節と続いている。また、文久2年から慶応3年にわたって、オランダ、ロシア、イギリス、フランスへと留学生が送り込まれた。開国後、総数170人余が大半して外国に渡っていった。驚くべきことに、彼らはとん欲に西洋の文物を見たり、聞たりして吸収していった。

ここては、1860年に日米修好通商条約批准書交換のために太平洋をわたった例と、1861年の遣欧使節の例をとりあげて、彼らの西洋体験かどんなものであったか考察してみたい。

2 万延元年のアメリカ体験

1860年(万延元年)、幕府のサムライ使節団か、アメリカに向った。このとき有名なのか護衛艦「威臨丸」であるか、アメリカ艦「パウアタノ号」には遣米使節77人か乗り、サンフランシスコに向った。彼らの目的は、日米通商条約の批准書の交換である。ハワイを経由してサンフランシスコに上陸した使節団一行は、ここて威臨丸と別れて、パナマに向う。パナマからは汽車で大西洋岸に出て、「ロアノーク号」に乗り換えて、ワシントンに向った。ワシントンには、さらに川を遡行して到着した。この間約4ヶ月である。

ワシントンでの日本使節団は黒の紋服に、野袴、大小を腰にさした、チョノマケサムライの姿そのままである。ワシントンでは、ホワイトハウスに行き、フキナン大統領に会い、晩餐会に出席する。その間、造船所、天文台、病院、博物館などを見てまわった。

ところで、アメリカ人にとっても刀をさしたサムライ、日本人は珍しく、連日宿舎のホテルに人々が押しよせてきたという。当時の新聞ははじめてみる日本人を、「ほとんどがほっそりとして背が低い、前頭部は剃っていて、頭の両側の毛は生やしたままである。浅黒い肌で、目は褐色である」とその異様な風貌か、移民としてすてにいた中国人にそっくりたと言う者もいたという。

帰国に際しては、ワシントンからニューヨークを経て、ニューヨークから「ナイアカラ号」で日本に向っている。希望峰をまわってジャカルタ、香港と立ち寄って日本に帰ってきた。帰国したのは十二月であったから、約一年近くの大旅行であった。

日本人最初のアメリカ体験であった彼らにとって、西洋文明にはたまた驚くばかりであったようだ。しかし、詳細にみると洋学をかしっていた者だけか、自分の自然科学や軍事の知識を深めたばかりで、アメリカの政治制度や社会経済については理解できなかった、というのが実情であるようだ。多くの使節団の人々には、洋学の知識もなかったから肌で触れてもただ単に驚くしかなかったものと思われる。

事実、帰国した後の使節団の人々の動向をみると、維新後名をあげたのは威臨丸の勝海舟、福沢諭吉で、パウアタン号の77人は何の活躍のないまま維新の動乱で殺されたり、病死したり、維新後は官僚となっている。

3 文久2年のヨーロッパ体験

アメリカから戻った福沢諭吉か翌1861年（文久2年）再び海外に旅立った。今度は、竹内下野守を正使とする遣欧使節団である。使節一行37人（福沢は通訳の1人）は、1861年12月品川を出て、香港、ノカポール、スエズを経てヨーロッパに向った。目的は、開港の延期の交渉と、日本とロシアの国境線確定の交渉であった。

スエズからマルセイユに入った一行は、フランスをはじめとして、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルの6カ国を訪問した。フランスでは、ナポ

レオン3世と会い、オランダでは国王、プロシアはウィルヘルム1世、ロシアではアレクサンドル2世に拝謁している。行く先々では、動植物園、病院、博物館、博覧会、学校などを見学している。途中、汽車にも乗っている。しかし、西洋文明の科学技術の成果には目を見張っても、議会、選挙政党政治などについては理解できなかったと福沢諭吉はのちに述べている。

他方、当時のヨーロッパの人々は、はるか東洋から来たサムライをとのように見ていたか。オランダのある新聞は、「背が低い、茶色かった顔している。野袴をして、白足袋をはき、草履をはいて、刀をさしている」とその不思議な姿におどろいてる。日本の深々としたお辞儀も珍しかったようである。珍しかった日本人をひと目見ようと、ホテルに多くの人々が押しかけたのは、アメリカで体験と同じである。

「君は日本人を見たか？」

かオランダでは当時のあいさつかわりだったという。

帰国は、ポルトガルのリスボンから地中海を経て、スエス、ノボカポールと、渡欧したコースを逆に日本に向った。1862年12月に、帰国し、約1年の大旅行もようやく終わった。

しかしながら、19世紀のヨーロッパにおける日本人の体験は、アメリカでの体験同様にすぐ生かされたわけではなかった。やはり、好奇心ではじめて西洋の文物にふれたたけである。事実、使節団一行のうち、福沢諭吉をのぞけば、多くの維新後活躍した人は数少ない。なかには、せっかく帰国しても海外事情を話すへからすと幕府から禁止され、外遊で得た新知識はすぐにかされぬままであった。

4 現在の西洋体験

わずか2つの事例を見るまでもなく、日本人の最初の西洋体験は、すぐにはいかされなかった。維新後に活躍した人々によって、ようやくいかされたというへきたろう。幕末下の動乱のなかでは、条件が整わなかったというへきかもしれない。

しかしながら、この2つの事例から130年以上たったにもかかわらず、日本人の西洋体験は、少しも違ってない点も多い。欧米人の好奇でみる日本人への関心は多少は減ったかもしれない。しかし、米としょう油を必ずもっていき、ほとんどしゃへれぬままお辞儀をくり返す仕事は当時とそのまま同じであるだろう。また、

技術は理解てきても、社会制度や文化は理解てきないのも同してあろう。

明治維新後の急激な近代化をとげた日本ではあるものの、欧米に対する接し方、理解の仕方というのはこの130年変化しなかったといえる。

(参考文献)

- 「万延元年のアメリカ報告」(宮永孝 新潮選書1990年)
- 「文久2年のヨーロッパ報告」(宮永孝 新潮選書1989年)

第4章 ハイパーネットワーキングによる創造する個の重視

1 個人における創造性をいかにつくりあげるか

いま、21世紀に向けて世の中かどのような方向に進んで行くかについては様々な意見があるか、その中で共通に認識されていることは情報化の進展か知の新たなスターンへ向かっていることであろう。これまで端的に情報化は情報機器の普及と即一的なものとみられてきたか、こういったノール偏重の見方をあらため、機器に隠されてきた情報の発信源である人間同士か効率的にコミュニケーションを行うだけでなく、新しい情報や知識をいかに創造していくか、つまり情報は単に処理するものではなく、情報を創造するプロセスに目を向け、その目的に向けていかに対処していくかということかいままさに問われているのである。

2 情報創造とは何か？

情報の二面性についていえは、情報には量的な面に重きをおく場合と質的な面に重きをおく場合があることかよく知られている、基本的な情報創造プロセスはこの二つの情報の相互交換によって表現されよう。今井賢一—橋大学教授はすでに「ネットワーク社会」（岩波新書1984）において「情報A」として「形式的情報」を、また「情報B」として「意味的情報」のふたつに情報を分類し、「情報A」つまり量的な面に比重かおかれた情報か情報通信技術の発展によって有力な補助手段として出現し、そのことかふたつの情報の相互依存関係に変換をもたらした状況全般を情報ネットワーク社会の到来として指摘している。

	形 式 情 報	意 味 情 報
新 奇 性	驚きはない 既存の概念の反復	おとろきかあり、何かか見えてくる 新しい概念の創造
変 動 性	固定化し一般性か高い	場に特殊てあり動的に変化する
方 法 論	演繹的、分析的、還元的	帰納的、発想的

	冗長度を避ける 人間的相互的作用を必要としない コンピュータ・ネットワーク	冗長度やゆらぎ・カスオが必要 人間的相互作用を必要とする ヒューマン・ネットワーク
--	---	---

『創造する組織の研究』野中郁次郎 講談社より

我々が過去3年間行ってきたパーソナルリネーションのプロジェクトは地域や組織といった社会システムまでも広く情報メディアとして認識し、個人がそのような情報ノールやメディアを有効に用いることによって、これまで個人レベルではなしえなかった大量の情報のハントリンクや、遠隔地の人々との国境を越えたコミュニケーションを可能にしようとした試みてあったといえるであろう。このことはおおむね1980年代の情報化パラタイムに沿ったものであり、意味的情報はむしろフェーストッフェースによる旧来のコミュニケーション手段において用いられものとしてとらえられてきた一たとえば上記今井論文では「オン・サ・サポート」の情報に着目していることなどこれは形式情報のコミュニケーションにおける情報機器の進展に着目してそこに積極的な位置づけを行おうとした試みてあったものであったといえよう。

「道具は日々の生活の中にほとんど無意識のうちに入り込んでくる、わたしたちは無意識のうちに道具の支配を受けているということだ。そうした道具と私達との間に新たな関係を切り結ぶことは可能だろうか。まずは道具に接近していくほか現在のところなさそうだ」『道具の政治学』 柏木 博 未来社より

情報化のさらなる進展はこのような方法論的な段階から、1990年においては異なるステーションを迎えようとしている。このことを二つの側面から見てみよう。ひとつは情報交換の場としての組織そのものの変化、それに情報技術の進展かもたらした電子空間における意味情報の交換の可能性である。

3 組織における情報流通の変化

組織を情報の流通という側面からみると、それは形式的情報の集積された場（＝

ファイルの集積)という面と、意味的情報の相互交換の場(=職場)という二つの側面がある。とくにわが国における組織内情報の流れには、定型化された文書による形式情報のやりとりと、暗黙の了解に基づいて行われる「根回し」とよばれる「意味情報」の二つの複雑な絡み合いによって行われているものといえるであろう。

おおむね、組織をとりまく情報の流れは牧歌的な1970年代の初頭にかけては画一的で単方向的なもので機能していた。ところか、情報化の進展は必然的に情報の過多をもたらした。あふれんばかりの情報の洪水時代の到来である。都会で働くヒンノスマンは文字や数字だけで1日あたり平均10メガバイト以上の情報を処理しているというデータもある。

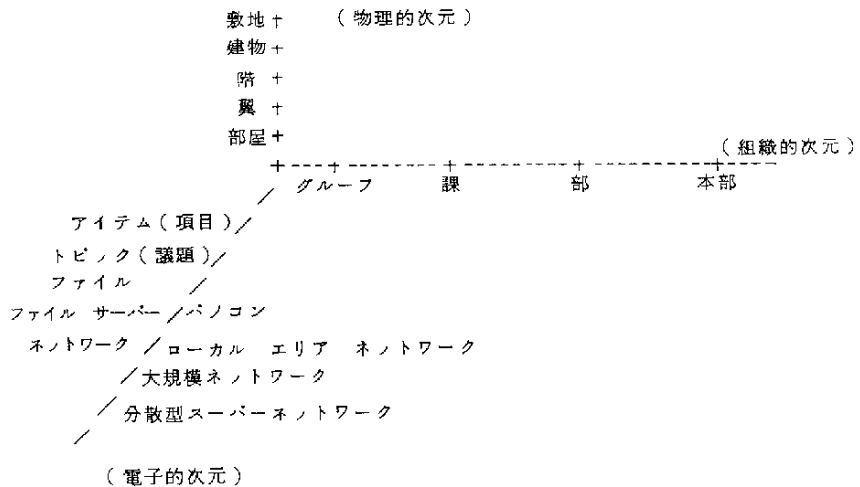
1980年代 発信 →多数の受信者 情報発信に多大のエネルギー
(マスコミの肥大化)

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

1990年代 多数の発信者→受信者 受信(情報選択)に多大のエネルギー

このような受信に多大のエネルギーを必要とする時代にあらわれてきた数々のノール郡を統合していくものか「ハイパーメディア」という概念なのであろう。ハイパーメディアの特徴として、電子情報であって、個別化された情報を、企画化されない内容でハントリンクするものとまずは定義できる。

【図】 コテクノロジーの基盤となる3つの次元



【情報空間】

コンピュータの3つの機能

パーソナル	通信	大型
(イメージ処理)	(ネットワーク)	(データ蓄積)
思考のための道具	相互の伝達	情報環境を形成
パーソナル データベース		巨大データベース
ワープロ		ハイパーテキスト=Xanadu
数値処理		環境シミュレーション
イメージ処理		人間シミュレーション

4. パーソナルリンケージからハイパーネットワーキングへ

電子場における暗黙知の相互交換による意味創造過程の解明は次のキーワードがポイントとなる。

- ・技術原理と環境原理のイメージによる統合
- ・技術原理＝還元論
- ・環境原理＝全体論
- ・イメージ原理によるブレークスルーの可能性
- ・テレプレゼンス
- ・バーチャル・リアリティ
- ・ホロニック・パス

90年代は精神的充実の時代の前触れである。21世紀は精神の世紀でもある。このように組織をとりまく情報環境の変化が加速し、コマンド駆動型からオブジェクト志向型の（日経コンピュータ坪田副編集長による）時代になるであろう。

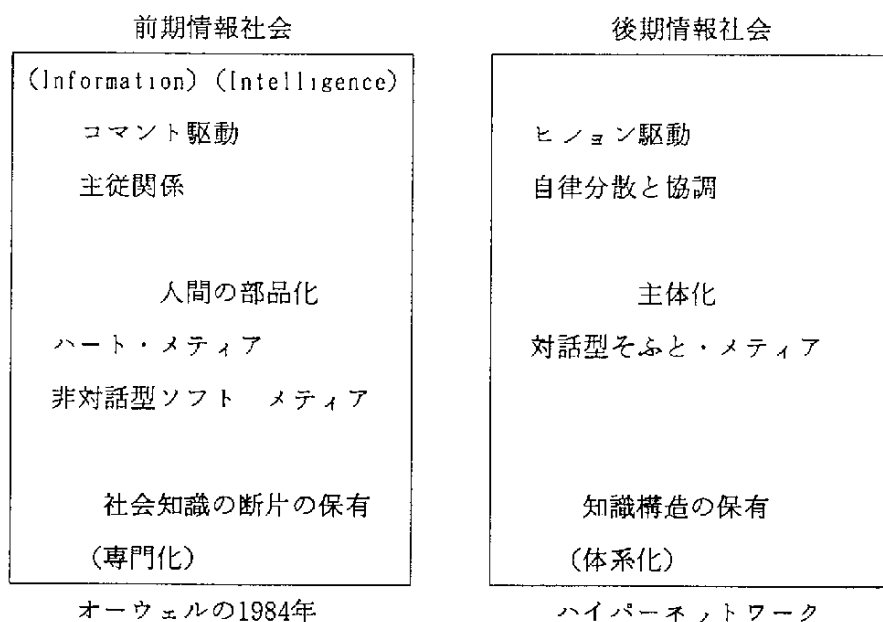
およそ人間には何物にも束縛されない自由な個でありたいという欲望と、その逆

にある組織に帰属して安定したいという二律背反があって、そのハラノスを保っている。

しかし、現在のような情報環境でそのようなことが可能であろうか？

一方で情報過多があり、他方で生活に必要な情報は手に入らないし、メティアのものの行方もよくわからない。人間の処理できる情報は限られているか、情報空間の利用により、多少はよくなるものかもしれない。（もっと悪くなる可能性も当然ある。）そういった生活情報空間の活動は、どこにむけられるのであろうか？ 図てみるように次元が異なるので中立なのかもしれない。中立でないかもしれない。

（H スティーフンス）たしかに、これまでのモノや情報の製造技術は遠くの非日常空間を近づけたか、近い地域や近隣との交換を遠ざけた。いやもっと基本的なインターフェースそのものの感覚すら失ったのかもしれない。工業化時代に期待された人間像があったとすれば、知的社会に期待される人間像はどのようなものなのかはきちんと把握する必要がある。



以上のような知的インフラの整備、編集能力の向上を通して、私たちは現在の「消費の個性化」のレベルから、情報の受発信、意思決定（政治）への参加、知的創造物の幅広い頒布などかてきる歴史のステーションを獲得することかてきるのである。

第Ⅱ部 事例編

小さな町の国際化への大きな挑戦「第2部」 —秋田県雄和町のミネソタ州立大学機構秋田校の開校後の地域の人々—

都区内から大学町がまた一つ消えた。都下の近郊に広大なキャンパスを求めたため。周辺の住民が、「地域の文化がまた一つ消える」といって惜しんでいるそうである。そういった地域の文化が消えるところか一方にあれば、他方で、本州の北端の地秋田でアメリカの大学が日本の地域に根をおろした大学を開校した。それは、ミネソタ州立大学機構秋田校である。

ミネソタ州立大学機構秋田校は平成2年5月15日、雄和町に開校した。誘致活動をはじめてからわずか2年2ヶ月の開校である。また、自治体誘致としては、新潟県中条町の南イリノイ大学新潟校に次ぎ2番目の開校である。開校後1年かたとうとしている今、地域振興や活性化への期待が大きいなかで、雄和町の人々は大学の開校をとのよう受け止め、他方で大学は地域をとのよう見ているか、そしてさらに大学と地域の人々が互いにどのような関わりを持ちはしめているか、そういったことについて見てみることにしたい。

1 ミネソタ大学の開校と雄和町

ミネソタ州立大学機構秋田校が平成2年5月15日、雄和町に開校した。秋田校の開学 入学式は同日、秋田県営トレーニングセンターで行われ、日米両国の関係者や秋田校の教職員、学生とその父兄など約900人が出席した。ロット サール同大学機構理事長が開学を宣言して、新たな国際コミュニティソーンの誕生となった。

(1) ミネソタ州立大学機構秋田校の開校

開学式には、日本側から佐々木喜久秋田県知事、工藤清一郎町長、二階堂進日米貿易拡大推進委員会名誉会長、林義郎同日本側委員長など開学に携わった関係者が出席した。アメリカ側からは、マーリーノ ノーノノ ミネソタ州副知事、デービッド・スピア 同州貿易経済省長官など財政界関係者、そしてロット サール理事長、ロハート カロサース総長など大学機構関係者が出席した。

開学式は、米国の式典にならない、大学機構関係者か、学位を示すカウノをま

い、厳粛な雰囲気の中で始まった。工藤町長の式辞の後、R サール理事長が開学宣言を行った。佐々木知事は祝辞のなかで、秋田校の地域の国際化への貢献と地域活性化への期待を表明した。また、アメリカのフンジュ大統領からも「質の高い国際教育で、日米の商業、貿易、文化の促進に努めてほしい」というメッセージが寄せられた。

この後、学長就任式に移り、R サール理事長から、学長であることを示す銀色のメタリオンが諸星裕学長の首にかけられた。諸星学長は就任演説のなかで「無知の恐怖と、知ることの勇気を身につけてください。秋田校はわれわれが伝統であり、開拓者です」と新入生を激励した。

入学式では、諸星学長が日本・韓国人学生256名を、チャールス クラハム同大学機構副総長が米国人学生60名を一人一人紹介した。米国人学生を代表してM ヘトーさんが「日本で日本の皆さんと勉強することを楽しみにしています」と流暢な日本語で宣誓した。これに応じて、日本人学生を代表した佐藤邦明さんが英語で「日米の生活習慣や学問の仕方の違いを、ここでの経験で克服して国際理解に役立てたい」と述べた。

なお、開学式・入学式の模様や秋田キャンパスの様子を、ミネソタ川の放送局から依頼を受けたAKT秋田テレビの協力で、衛星放送によりミネソタ川の各家庭に生中継された。

(2) 開校後の大学の概況

秋田校キャンパスは豊かな自然と近代的なスポーツ施設が立地する通称「椿台地区」に設けられた。白い建物群が周囲の環境にマッチしながら威容を誇っている。320人収容の学生寮、学び舎となる語学棟など施設の充実ぶりには目を見張るものがある。ここで、国際色豊かなキャンパスライフが展開されている。米国のカリキュラムで、授業はもちろんすべて英語。米国人学生なども来町し、全寮制で英語の語学力の向上をはかるという徹底ぶりである。これは、共同生活の中から、相互理解を深め、国際感覚を身につけようというものである。以下は、開校から約1年のミネソタ州立大学秋田校の概況である。

① カリキュラム

イ 入学状況

秋田校の第一期生となる学生は、韓国からの留学生2人を含め、定員より6人多い256人。全国各地から入学しているか、県内出身者か最も多く51人、次いで東京都45人、神奈川県28人となっており、九州や四国からの入学者もいる。また男女別では、男子193人、女子63人で女子の比率が4分の1と予想以上に高くなっているのが特徴だ。

ロ 講師陣

秋田校での修業年限は3年間。最初の1年間は集中英語課題で、学生の英語における語学力に応じて三段のレベルに分かれている。しかも、一クラス15人から20人という徹底した小人数授業で、きめ細かな英語指導が行われている。2年目と3年目は、政治学や経済学を学ぶ総合教養課程。4年目以降はミネソタ州立大学機構の7大学のいずれかに進級し、2年間の専門課程を履修することになる。学士号取得のための必要単位数は192単位だが、秋田校で半分の96単位、残りの単位を米国で取得して来年卒業ということになる。

開学初年度の今年は、22人の教員が学生の指導に当たっている。このうち集中英語課程は16人が担当。講師陣はいずれも、外国人に対する英語指導のエキスパートだ。また、外国人や日本人の帰国子女を教えた経験をもつ総合教養課程の担当や日本語教育の担当など、充実したスタッフとなっている。さらに、学生のためのカウンセラー1人が常駐し、将来の進路指導にも万全体制が敷かれている。

② ライフ

米国の大学には最低在籍年限がない。つまり、成績が優秀で、卒業に必要な単位を取得すれば卒業の時期が早まるということだ。もちろん秋田校でも、早く語学力を高め必要なカリキュラム修了すれば、その分だけ早く進級できることになる。単位を取得できなければ、卒業も遅れることは当然だ。ここでは、すべて本人の能力と努力にかかわってくる。

しかし、秋田校では、語学力を高めるためにユニークな手法を取り入れている。秋田校の新入生は全員が1年間の寮生活を送っている。寮には、米国人学生60人（2年目90人、3年目以降120人）が入り、日本人学生と一緒に寮生活を送り、1年間総合教養課程を学んでいる。授業はすべて英語、寮生活も米国人

学生が一緒。コミュニケーションの手段は、英語しかない。秋田校では、学生をこのような環境の中で、私生活でも必然的に英語を使うような配慮がされている。

③ キャンパス

秋田校のキャンパスは、本町椿台地区の町有地12ヘクタールに建設された。サイクリンクターミナルや県立中央公園スポーツゾーンに囲まれた白を基調とした建物群が、周囲の木々の緑に映え、みことなコントラストを浮かび上らせている。

正面からキャンパスを見ると、カラス張りのモダンなレストランが目に飛び込んてくる。200席を持つこのレストランは、内装を白で統一し、高い天井と合わせて清潔感を漂わせている。レストランの背後には、集中英語課程の授業に使われる語学棟が配置されている。語学棟は鉄筋コンクリート3階建て、22の普通教室と教職員室が設置されている。教職員室は、学生に対するカウンセリングや個別指導も行われることから、すべて個室になっているのが特徴だ。

そして正面左側、円形の入口を持つ学生寮が位置している。学生寮は鉄筋コンクリート4階建て、160室（320人収容）という立派なもの。

このほか、県から譲り受けた森林学習展示館もすでに改修工事が終わり、コンピューター教室やLL教室として使用されることになっている。

建物工事は3ヶ年計画で行われ、2年目の平成2年度は管理棟として県林業センターの改修工事を行っているほか、語学棟と管理棟の間に鉄筋コンクリート3階建ての総合教養棟を建設することになっている。さらに最終年度の平成3年度は、レストランの右側に図書館を建設し、秋田キャンパスの全容があらわれることになる。

④ 波及効果

秋田校の開学は、世界にははたく人材育成の場づくりを基本理念にしている。しかし、それにとまらず、学生と町民が一体となった国際交流を通して、将来に向けた町づくりと地域振興への起爆剤にしたいとしている。

平成2年度だけでも、60人の米国人学生が来町している。そのほか、教員やその家族を合わせると100人近い米国人が雄和町に居住している。これからは

さまざまな形での交流が予想される。既に、教員の子弟も川添小学校に編入し、子供たちの間ではほほ笑ましい交流が開始されている。

町でも、学生のホームステイや高校在学生との交流会の開催。地域における交流会には「講師代」を助成するなど、町民と米国人の触れ合いを積極的に支援していく考えた。

⑤ 在学生の印象

イ 日本人男子学生 Wさん

立派なスポーツ施設がすぐ近くにあるし、寮生活も楽しくみんなてわいわいやっている。もちろん授業はすべて英語だが、聞きもらしたり、分からないことなどはみんなて話し合うなど、とても活気に溢れている。買い物などは友達の手で出かけているか、近くにお店がないのか残念だ。

ロ アメリカ人女子学生 Rさん

父がセントクラウド大学でアノアのことを教えているので、日本には以前から興味を持っていた。ルームメイトは年も同してすし、趣味も共通している。異文化と触れ合うことかてきて毎日かとても新鮮だ。よく秋田市でショッピングするので、交通の便がよくなったら最高ね。

ハ アメリカ人男子学生 Sさん

最初は環境の違いに少しとまとった。でも今では、アメリカと同じように生活している。語学を勉強しているので秋田にやってきた。語学は、現地にいないと上達しないからね。日本人のルームメイトはとてもいいやつだ。お互いの国の言葉がよくわからないので、宿題を教え合ったりして、コミュニケーションをはかっている。

ニ 日本人女子学生 Iさん

1週間かとても長く感じられた。授業もハートたし、宿題もたくさん出されている。辞書を引きなからたから大変だ。この間なんかは6時間もかかった。寮生活も快適だし、友達もたくさんてきた。語学力を高めるには最高の環境だと思う。私にも英語で夢を見る日かくるんたろうな。

(3) 大学開校後の雄和町役場の動き

過去2回にわたり実施した大学開校直前の雄和町でのヒアリング調査では、期

待と不安が交錯している状況であった。そういったなかで、自治体の外国大学誘致としては全国で2番目の開校にこきつけ、経験と実績を重ねつつある雄和町役場とか、その苦労たるや並大抵のものではなかったはずである。それどころか、開校してからも、処理しなければいけない問題が山積し、試行錯誤の連続であったという。以下は、役場での直接の担当者にインタビューして伺った、開校後の約1年を振り返った印象の概要である。

イ 日本の住文化をテーマに日帰りホームスティを企画

実際に大学ができてみると、大学のキャンパスそのものか、町のはしっこにあることや、交通の不便さなどかあって、町役場側かあえて企画しなければ、大学の学生と外国人学生や教職員と間にはあまり交流はなかったようだ。大学で、日本の文化、風俗、地理などを学ぶにしても、体験したりするにしても、私共の宣伝不足のせいもあって、町外に出てしまいかちである。町内でも可能なたけれども、規模が小さいために、どうしてもそうなる。

今年の小正月に行ったり日帰りホームスティというのは、日本の住文化というのかテーマだ。畳屋さんとか、建具屋さん、かしやさん、豆腐屋さんとかを実際に愛でて見て、体験してもらおうというものである。大学の企画する先生のほうでも、来年からは、このような企画をもっと取り入れてやって行きたいといっている。役場のほうでも、大学の立ち上りの時期で、あれもこれもということと、忙しさを言い訳に学生達に町への目の向かせ方の努力が足らなかったのではないか。これからは、以上のような伝統的な事はかりでなく、むしろ日常的な生活の週間、風習といったものを中心に進めて行きたいと思っている。

ロ 外国人には農作業ひとつとっても異文化体験

例えば、こんな話がある。農家の人々が稲刈り後に、病害虫の予防や施肥のためにワラを焼いていると、外国人学生かなせワラを焼くのか尋ねる。その理由を説明してもなかなか理解できない。このように、農作業をひとつとっても、彼らには、一つ一つが驚きである。それに、例えば、アメリカの米つくりと日本のそれは違うわけだ。その違いを、身近な地元で実際に見て、体験して、理解してもらおう。このような日常的なところからの体験が必要ではないの

か。こういったことか、外国人学生にとってのカルチャーショックであろう。

ハ 子供たちには学校がカルチャーショックの体験場

雄和町の人々や子供たちにとってカルチャーショックを一番受ける場所は、大学の教職員の子弟が通っている町内の学校ではないか。保育所は言うまでもなく、例えば、川添小学校の毎日の生活の中でいろいろな形で体験するカルチャーショックだろう。児童生徒は言うまでもなく、先生にとっても、父兄にとっても、いろいろな意味で、異文化体験となっているようだ。学校が終われば、互いに家庭を訪問しあったりしている。子供同士だと、遊びから入れるところがある。

ニ いろいろな体験が育む子供たちの可能性

大学の教職員の子女で一人だけ、県立秋田南高校へいっている女子生徒がいる。彼女は、教職員住宅から、普通の路線バスで他の生徒と同じように通っている。バスのなかには、いろいろな中学・高校学校の生徒とかか乗っているのて、バスの中は、一つの触れ合いの場となっている。そういった意味では、このような異文化体験や文化交流は、これから雄和町やその他の社会を支えていくような大人に成長するうえで、かなりの影響とか効果があるのではないか。また、これらの子供達が雄和で新しいものをつくり上げてくれるのではないか。そんなことを、期待している。

当初、私共は、大学誘致の経済効果などの試算書等をつくりはしましたが、金でかえないいろいろなものかててくることを期待している。

ホ アクセスの悪さを改善しようと、往復バスを運行中

はじめにもいったように、交通の便が悪いことと周囲に買い物などをする商店街がない事とか特徴的な欠点だ。そのことは、大学の周囲の環境を絶賛する一方で、学生の父兄からも不満としててている。町としても、可能な限り、その状況を改善しようと、例えば、町役場、和田駅と大学との間を8往復のバスを運行している。

秋田県はもともと大学進学率の低いところ、それは高等教育機関が少なかったことも一つの原因である。ミネソタ大学の開校を通して、県内外の各地からたくさんの若者が集まって来てくれれば、それこそよいことはない。そのため

にも、アクセスを改善して魅力ある町づくりをしていく必要がある。

ヘ 中条町の経験は雄和町にもよい教訓

ところで、中条町と雄和町はよく比較されるか、あちらは自治体としては全国で初の大学誘致。すへてか最初なので、いろいろと苦勞も多いと思う。例えば、中条町は雄和町の約3倍の人口のある町。それでも、週末には、町外の新発田市とか新潟市へてていってしまっているとき。当地でも、同ような問題がある。こみ処理の問題や騒音の問題などは、全寮制なので今は未だ問題か生していないか、学生寮から学生か今年、寮を出ることになれば、とうなるか分らない。先日、大学のカルローサが学長と町長か対談を行った。その中で、学長は、解決しなければならぬ問題はこれからたくさんあるか、この2年間に成し遂げて来たことは、実に偉大なことであると述べてくれた。

ト 地方での生活を通して本当の日本を理解

外国人学生の日本研究コースは1年で終わるか、この1年で日本を理解してもらうことは、難しい面もある。それだけに、可能な限り、この町の人々やその生活を通して日本を理解してもらおうと努力している。学生の中にはもう少しいたいという人もいるそう。この田舎か気に入ったという外国人も少なくないそう。よく東京は外国たといわれる。そういう意味で彼らは秋田という地方を通して本当の日本を理解できるのは、幸せたと思う。今年の4月には、その日本研究コースの評価もてよう。

チ 外国人でも一人歩きかてくる環境づくり

役場なとても、当初は、外国人か物珍しかったか、最近では、訪れる外国人に対して構えたりする雰囲気はなくなっているよう。役場内も企画課のPlanning Sectionをはしめとして部所名を英文標記するようにした。また、ある外国人学生から、国道は名称かあるのに、県道、町道にはなせ名称かないのか、といった素朴な疑問か出た。

こういった疑問か応えるように、努めて町内の通りにも名称を表示するようになっている。英文併記のタウンマップの作成にしても、その一環である。つまり、外国人でも、独り歩きかてくるような環境づくりである。た、大学とか外国人学生を優先しているように取られるむきもすくなくない。そのため、行

政的公平さを欠くことのないように充分、配慮して対応に努めている。

リ 入管法の改正で、日本コースの学生に思わぬ懸念も

ところで、学生を含む大学関係者の住民登録とか健康保険料の納付については、特に外国人については、当初、52人の学生が登録をしていた。そのうち、10名ほどの学生は、単位を取得したために、帰国した。そのうち、数人の人が保険料の納付を忘れたということだ。来年度からはそういうことのないようにして行きたい。保険料の納付の際に、為替レートの変動を考慮しなければならないこともあった。

それから外国人学生に関して、大きな問題があった。それは、昨年（平成2年）の入国管理法の改正である。この改正によって、文部省の管轄外の専修学校でも、日本語を学ぶための学生でなければ学生とは認められない、ということになってしまった。日本研究コースはミネソタ大学秋田校の看板だ。新聞などでも報道され、外国人学生達はみな心配した。結論からいえば、これまでの実績が考慮されて、法務大臣の上陸特別許可条項の適用で認められることになった。まかり間違えば、国際問題にもなりかねなかった。

ヌ 学生の生活支援に試行錯誤

医療面については、大学には、医者はいないか、保健婦さんがいる。狭い意味の保険衛生ということではなく、生活全般を管理する保健婦さんの役割は大きいようだ。その利用状況について調べたデータがある。日米と男女間で、保険相談件数、内容に多少違いが見られる。しかし、全寮制ということもあって、全体的に相談件数が多いようだ。そして、薬投したり、病院紹介や病院同行なども行っているようだ。

食へ物についてはどうか。当初は、「ますい」とか、「夕食や夕食に出るようなものか朝食にでる」、「揚げ物が朝から出る」、「生野菜が少ない」といった意見か、日本人米国人を問わず、学生の間から出たそうだ。大学とか育英会では、秋田市内の一流ホテルで調理人として働いていた人をスカウトして対応したつもりだったか、充分ニーズがつかみ切れなかったようだ。

ル 食事にしても多様な国だと、国際理解の必要性を再認識している担当課長

こ飯やそばなどはよく食っているようだ。しかし、こ飯などは食へ方が少し

違うようだ。例えば、ある米国人学生は、ご飯を食べてしまっておかずを食へる。マレーノア系アメリカ人は、おかずを全部ご飯にかけてしまっておかずを食へている。アメリカ人の中では、実にいろいろな食へ方があるのたと、驚いたり、感心したりしている。アメリカという国は、食へ方ひとつ取っても、そういう国なのたということを痛感した。

役場としても、大学を誘致してから、やりたいことはいくつもある。しかし、その前にやらなければならないことがあまりにも多い。我々は、町報などを通して町民に国際交流への理解を深めるべくやって来たが、アメリカのこととか、国際社会のことをもっと理解しなければならないのは、むしろ我々のほうではなかったのかと考えるようになっている。

2 開校後の雄和町での人々の印象

以上か、ミネソタ大学開校にともなう大学自身の動きや、誘致主体たる雄和町役場の動きの概要である。つきに、雄和町の人々か大学の開校をとの用に受け止め、他方で大学は地域や人々をとのように見ているか。そしてさらに大学と地域の人々か互いにどのような関わりを持ちはしめているか、そういったことについて見てみたい。以下は、雄和町の人々や外国人の大学関係者か、どのような印象をもったかをうかがったインタビューの概要である。

(1) 開校後の地域の人々の意識や行動の変化など

平成元年10月、同2年2月に、ミネソタ大学開校直前の雄和町で大学関係者、地域の人々に、開校されつつ大学そして地域の人々ならび地域振興との関わりについてインタビューを試みた。その結果の概要については、前年度報告書を参照されたい。

今回は、昨年度のインタビュー調査を参考に、開校前と開校後とは雄和町の人々の意識や行動の変化などについて見てみたい。そのため今回は、可能な限り昨年インタビューに応してくれた人々に再びインタビューを試みた。その結果、大半の方がその再インタビューに答えてくれた。以下は、直接、その再インタビューに答えてくれた人々や、役場や大学などを通して行われたインタビューの概要である。

① 新しい消費者ニーズの対応を模索—商工会事務局長Hさん

共同店舗かやっと軌道に乗りはしめて一安心しなからも、「雄和町商業の再構築にかけて課題は山積みしている」と、事務局長さんは雄和町商業の現状を以下のように語ってくれた。

雄和町商工会有志の出資でおこした雄和産業株式会社か、大学の近くに開設した共同店舗のテナント経営はなんとか順調のようだ。その共同店舗「スイカ21」には、6つほどテナント業者が入った。しかし、スイカ21を含めて雄和町の商店で大学関係者の生活上の消費ニーズをすべて満たすには限界があるようだ。お店としては何でも揃えたい。ても、売る側の商店はある程度の採算を考えねはならない。大学からは河辺町の方かより近いということもあって、そちらの方へ学生などの買い物客か流れやすいのか実情た。

校舎や教職員住宅建設などの建設業関連の派生需要か生していることは、肌身て感している。問題は、町全体の商業小売りのほうてある。昼間人口も少ないことかあってほとんど閑古鳥の状態た。そんなわけて、今のところ、外部資本の流入はない。学生たちは、生鮮食品（生野菜、鮮魚）の不足を感じているようだ。新しい消費者の注文は広がる一方た。これらの消費者ニーズにとのように対応したらよいのか模索している状況た。

② 会社社長Kさん（元農協組合長）

昨年のインタビューの時点ては農協の組合長をつとめ、現在は本業の会社社長をつとめるKさんは、新たな視点から以下のように語ってくれた。

イ 理工系の人材育成も望む

ここまでは良かったんてはないか。大学生の数は集落かてきたことと同じことたから、地域経済に及ぼす影響は除々に出てくるのてはないか。たた、なにかにつけ、いろいろな人とあっても、また、私自身も、やはり理工系の大学か来て欲しかった。秋田の産業振興にはせひ必要たと思う。会社を経営していても、最後は人材か成長のカキた、というのかよくわかる。企業はとくにメーカーは、販売力と商品開発力てある。商品開発力は、技術者かいないとためた。その開発する人か足りない。

秋田県は、昔から農業関係と鉱業関係の学校たけ。たからハイテク関連の

人材がいない。その産業的な基盤がない。それだけに、なかなか生産物に付加価値をつけることかてきない。工員さんはいても中間技術者の不足。だから、企業が工場進出をしてきても、それなりの技術をもった要員がいなくて、困っているという。困るから、本社などから技術者を連れてくる。すると、このような集積かないところでは仕事にならない、住みたくないということになるそうた。

ミネソタ大学については、地域そして地域産業との連携をとれるような地域の大学であってほしい。いまは地域と大学がお互いにももの珍しく、いうなれはお見合いをしている段階であると思う。本当に地域と大学が結婚をする段階というのは、またまた4、5年はかかるのではないか。だから、なにかを生みたそうとすれば、また遠い先のことたと思う。

ロ 異文化を学べる機会か出来た

しかし、大学かてきてよかったと思っていることかある。それは、精神的な効果というものた。例えば、最近、町てもホームスティをやったらということたか、もっと外国人学生を町に下宿をさせたら良いと思っている。もちろん、私自身も言葉なと良く分からないから、やっかいたとか、面倒たとか、そういうことかあるかも知れない。しかし、わたしにも幼稚園に通う孫かいるか、この孫か大きくなる頃は外国人かこの地域にもいるのか当たり前になる時代かくるのはないたろうか。

だから、私は、1年くらい自分の家に下宿においてもいいと思っている。うちの会社の若いものにもそうすへきたといっている。単に言葉たけでなく、文化というか、考え方の相違を学ふには良い機会たと思っている。最近の湾岸危機を見るにつけても、アメリカとイラクの考え方たって違う、東洋人とたって違う。つくつく、互いの文化とか考え方を理解し合わねはならないと思っている。国際化時代というけれど、言葉の問題てはないと思う。人々か育った環境に根ついているところの文化風土、考え方そういったものをまなはなければならぬ。

- ③ 外国人等との出会いか生活の見直しのきっかけにも一青年会会長Sさん（農協職員）

開校直前まで期待と不安が交差していたSさんか、いまの彼のなかには新たな期待でいっぱい。彼は以下のように語ってくれた。

1月にミネソタ大学に行く機会があった。青年会会長をしている関係で育英会の評議員として懇談会に出席した。地元においても、なかなか行く機会なかったのて、久しぶりにいってよかった。ちょうど昼食時だったのて、なかなか大学の雰囲気を感じられて、大学が出来てよかったと思った。外国人を含めて大学の人たちはいろいろと町の人々と交流しているようだ。県立スポーツソンのチームで私自身も秋の運動会には参加して、学生や先生たちと交流した。また、彼らは集落ことの運動会にも参加しているようだ。夏の花火大会には外国人学生が見学してくれた。

こういった機会がたんたん増えたり、学生たちも町のアパートに住んだり、下宿するようになると、外国人とふれあう機会はますます多くなる。英語かうまく話せないか、外国人学生に日本の文化などについて聞かれることもある。自分たちにとって当たり前のことと思っていることも、相手にとっては珍しいことはかり。こういったことをきっかけに自分たちの文化とか生活を見直さきっかけになっている。今年、保育園にあかる子かいるか、将来は小学校なとて外国人の友達かたくさんてきるようになるかも知れない。

④ 地域に根ざした学ひ舎に—主婦Kさん

昨年のインタビューては、「諸星学長の言葉に感動し、それ以来、大学に親近感をおほえるようになった」というKさんは、大学開校後の印象を以下のように語っている。

いろいろな報道かされていたのて、学生か集まるのか心配していた。順調に開学してホッとしている。開学式に出席させていたたいか、厳肅な式典に胸か熱くなつた。人生の中て二度とない経験をしたような気かする。諸星学長か学生のみなさんに贈つた「無知の恐怖と知ることの勇氣を持って」という言葉に感銘をうけた。

秋田校の開学は、町民の私たちにとつても有意義なもの。これからは、単なる傍観者としてではなく、積極的に触れ合いを求めていくことか大切たと思う。ホームスティなどの計画もあるし、積極的に取り組んで国際理解を深めたいと

思う。秋田校か地域に根差した学び舎になることを期待する。

⑤ 親身になって接したい—商店主Iさん

キャンパス近くのテナントに出店している。雄和の地に集う若者たちか、充実したキャンパスライフをおくれるようお手伝いしたいと思っている。この周辺は商業や都市機能の集積がまた少なく、学生達もたいふ不便を感じているようだ。河辺町まで買い物に出掛ける学生も多いようだし、私のところにも自転車などの大きいものから、ほうきやちりとりのような生活用品まで買いに来ている。もちろん全部は揃わないので、今のところは私が町内を回って調達してくるようにしている。学生の息抜きにと、イベントなどの開催も考えてはいるか、私一人ではとうにもならなくて。

親元を離れて、知らない土地での生活になるのだから、学生達の不安も多いのたろう。そのためにも私たち町の人間か、親身になって接してあげることか大切なことだと思う。こうして学生と接することかてきたのだから、若者のエネルギーを少しでも吸収したいものかと思っている。

⑥ 有意義な学生生活を一商店主Sさん

たった2年でのスピート開校に、最初は建物工事は間に合うのたろうか、学生は集まるのかといった不安も大きかった。しかし、今こうして、若者か集うすばらしいコミュニティゾーンか誕生したことを誇りに思っている。

先日私の店に米国人学生か買い物にきてくれた。1,300円の買い物で、差し出したお金は20,000円。2,000円のつもりなのたろう。10,000円はそのままお返し、残りの10,000円から料金をいたいた。当たり前のことか、学生はそのことに感激したらしく、2日後「こんにちは」と遊びに来てくれた。コミュニケーションは言葉ではなくハートなんだとつくつく感しさせられた。学生には有意義な学生生活を送ってもらいたい。私もそのための環境整備への応援は、惜しまないつもりた。

⑦ 周囲の環境づくりか必要—主婦Sさん

開学したあとにキャンパスを見学した。緑に囲まれたモダンな建物と、その周辺で学生たちがスポーツをしたりして、明るく華やいた雰囲気たった。外国人と会った時とうすれはよいのか不安もあったか、学生さんの方から「こ

んにちは」と気軽に声を掛けてくれた。

周囲にお店が少なく、学生は不便なんじゃないかな。来年以降も新しい学生が入ってくるわけだから、生活しやすいような環境づくりが必要だと思う。明るい学生さん達のようなですから、地域との交流会なんかもあっていいと思う。町に大学があるというだけでなく、町民と秋田校が密接なつながりを持つていくことが大切だと思う。

(2) ホームステイ受入れ家族や地区住民などの印象

小正月行事を通して、地域住民とミネソタ州立大学機構秋田校の外国人学生との交流を深めようと平成3年1月15日、雄和町内の5集落で日帰りでのホームステイが行われた。参加したのは、同校の教員や学生約20人で、3、4人ずつに分かれ、本田、銅屋、平尾島、左手子、新波の5集落を訪問した。各集落ことに趣向を凝らした企画で、大学関係者、住民ともに小正月を楽しんだという。との集落でも、かたことの英語や日本語で会話する光景が見られ、お互いにすっかりとけこんでいる様子だったという。

以下は、まず、日帰りホームステイを受け入れた家族や行事に参加した地区住民、関係者か、その時どのような印象をもったかを伺ったインタビューの概要である。

① 外国人交える雪中田植えて、中学の息子に英語の自信—Kさん宅で

ミネソタ大学のT先生夫婦や女子学生などから来訪。父親が地区の役員をしているので、引き受けた。地区の人々と小正月の行事をやった。おもな行事は雪中田植えの行事。

これは、病害虫の予防を予防して、豊作を祈願するもの。言葉はわからなくても、身振り手振り、何とか通じるものと思った。95歳の祖父のを頭に中学生の息子と10人家族、3世代の大家族に、「これか全部の家族か」と言って驚いたようだった。祖父に対しては、「とうしたら、そんなに長生きかてきるのか」と尋ねていた。

祖父母は耳も遠く、言葉もわからないか、外国人の身振り、手振りを見ていて、何かうれしそうだった。ある先生は、日本の典型的な大家族を体験できて幸運ですと、喜んでくれた。かやふきの屋根にも感動していた。この日は日帰

りたったからよかったか、宿泊になると、容易ではなかったかも知れない。トイレのこととか、風呂のことを考えねはならないからた。

ところで、中学の息子が自分の通訳でなんとか通したという経験は、息子自身にとって大きな効果があったようだ。「俺の英語もなんとか通じるものだな」と少々自信かめはえた様子で、前よりも英語の勉強をするようになった。息子にとっても、いい経験になったようだ。

② 娘のアメリカ体験のお礼に日本の家庭の雰囲気を一Sさん宅で（左手子）

我が家の家族構成は3世代（8人家族）。長命家族の典型で、92歳の祖父を筆頭に祖父、父母、自分たち夫婦、高校一年と小学6年の女の子がいる。昨年の夏に小学6年の女の子が、町で主催したミネソタ州への親善旅行（町が旅行費を半額補助）に参加した。その時、「ホテルよりホームステイの方がいろいろな経験かてきて、すこく楽しかった、一番思い出に残った」という娘の経験を聞いていた。そのため、お返しかてきるチャンスかあれば、是非してあげたいと思っていた。今回はそれかて来ていたたいた。家庭から遠く離れているので、家庭的な雰囲気を味あわせてあげたいと思った。

アメリカ人女子学生Cさんは日本語か堪能。うちては、秋田名物のきりたんぽとそはをつくった。Cさんはこはんの方は弱かったようたか、魚類はよく食べた。

Cさんは、来日前から日本語を学んてきたようた。寮ては日本人の学生とも一緒らしい。長期の休みのときはアメリカに帰らず、国内の日本人の学生の家に何軒かホームステイしてきた。そんなことを通して日本語かますます上手になったそうた。しかし、我が家ては、標準語かあまりうまく語れない。たからCさんにはよく伝わらなかつたようた。

ところで、小学6年の娘の渡米した件たか、娘自らか小学校て資料を先生からもらてきて、行きたいといった。町をあげて国際交流にとりくみはしめているので、将来は子供たちにも外国に行かせてあげたいと思っていた。そこへ、町主催て小学生を対象にしたミネソタ州への親善旅行の募集かあつた。行かせてあげるなら、早いうちかいいと思った。そこで早速、応募させた。行かせてよかったと思っている。ます何よりも、目の輝きか違てきた。もともと消極

的な性格のほうだったけれども、最近では、何にても積極的に向かうようになっている。この経験か、この子どもの将来に役立てはよいと思っている。

③ 青年会OBのIさん（町観光協議会議員）

今回は、青少年育成協議会の役員として町の小正月の行事などに協力 参加した。このホームステイは町民の自分自身の生活を見直すうえでも役立っているようだ。

イ 湾岸戦争が身近な問題で、平和な生活を見直すきっかけ

小正月の行われたのは1月15日。折しもアメリカがイラクに最後通告をつきつけて湾岸戦争に突入せむとしているときだ。あるアメリカ人女子学生の父親の職業を聞いたら、表情をくもらせて、「軍人です」と答えた。聞けば、その学生の父親は例の湾岸戦争でサウジアラビアに行っているという。本当に戦争がおこったらとうしようと、毎日、夜も安心して眠れないという。通訳を通して彼女の話しを聞いていた集落の住民たちには、彼女の肉親がテレビに写るあの戦場にいることを知って、それまで遠い国のことではなかった話が、かなり身近な問題として写ったようだ。同時に、このような経験は自分たちの現在の平和な生活を見直すきっかけになったそう。

ロ 世界が身近になり、言葉の理解の必要性を痛感

また若い人たちの間では、外国人学生の存在をきっかけに国際情勢や国際問題に関心を持つようになった。しかし、ミネソタ大学に今後、米国本校を通していろいろな国の学生が入ってくると、今回は同盟国であったからよいけれど、かたちの上では敵国となったイラク系の外国人であったなら、また事情は別であろう。そのような訳で、世界といっても実に狭いものたということを感じた。もう一つ感じたことは、いなかでは英語の会話などかてき人かつくつく少ないなということを感じた。「言葉よりも」という考え方もあるか、しかし、肝心な事がわからなくては話しにならない。時間かたては、経験などによって相手か何を感じているか、言いたかっているか、少しはわかるようになるかも知れない。

ハ まちおこし倶楽部を結成し、多彩な活動で町の活性化を

青年会のほうも、後継者不足とか活動そのもののマンネリ化などの停滞化

傾向に対してなんとか対策を講じてきた。このたび青年会有志が中心となり、青年会とは別組織の「Y U W A まちおこし倶楽部」を平成2年4月につくり、組織した。大学の動きとは直接関係はないか、町をあけての国際交流の動きに対応して、町全体の活性化をはかろうというものだ。理念とか目標はともかく、言い出しっぺが先頭きって新しいことをやってみようということて始まった。スキーノア―をこの冬に企画したら雄和町の青年はいうまでもなく、ミネソタ大学の外国人学生3名が参加してくれた。言葉の問題などは、会員の中に、英会話かてきて、スキーもてきるTさんかいて助かった。

いまの雄和町の生活に飽きたらない人たちが、あるいは、なんらかの理由引込みしゃんたった人か、なんらかの新しい行動を起こすことか大切たと思う。昨年の夏も雄物川でいかた下りのイヘントをやった。その時はミネソタ大学のほうからは3チームほと参加してくれた。その参加者は全員外国人学生てあった。このようなイヘントには、日本人学生は反応か鈍い。諸星学長さんの方も理解をよくしめしてくれて、学生たちの参加を促す形て協力、支援してくれている。

ニ 子供たちにも興味を持たせようと英語塾通いを

わたし自身は英語かてきないから、ミネソタ大学か開校すると聞いた時は、子ともも将来こういう学校に入るかも知れないし、またわたし自身も英語に関心を持とうと、この町てはおなしみの「M英語塾」のM先生に、うちの子ともと近所の子供たちを(4~5人)集めて出張塾を開いてもらっている。このM先生と、カナタから帰国したばかりのSさん(役場職員)を結びつけたのは、実はSさんの同級生てもある、このわたしなのた。4月頃に紹介したら9月には結婚にコールインした。このこ兩人ともに海外生活体験者た。かれらの結婚は、新しい雄和町の門出に印象的なてきことたったと思う。

④ Nさん宅(本田)

ホームスティをしたのは4人の訪問。本田地区ては「親の会」(子とも会育成会)かおもに受け入れ団体となってくれた。この集落の公民館や神社の境内て主な行事か行われた。

イ なまはげや餅つきの体験後、小正月料理に舌鼓

境内の作業場で実際に藁をなえてなまはげを作るところをみてもらった。それから餅つきをやった。なまはげ回りをやった後、小正月の料理を作ったり、食へたりした。とくに当地では「おつゆ餅」といわれる雑煮が好評であった。公民館でも、各班が用意した郷土料理をふるまった。

最初、私の方で、外国人たからパンとか肉とか特別用意しなければならないたろうと役場の人にいったら、何でも食へるのでまったく気を使わないでくださいという。通訳には親の会の世話人で県庁に勤めるNさんにおねがいした。ても、この地区にきた人たちは比較的日本語が話せる人たちで、「方言ではわからないが、標準語を使ってくれればわかる」いわれて、努めて標準語で話したらなんとか通じた。話しか通じたから皆は気をよくして、なごやかな雰囲気の中に写真をとったり、和気あいあいと歓談した。

ロ 外国人に肌身でふれあう良い体験

神道についての質問への説明には苦勞した。しかしそれでも、なまはげのお払いのときは、ちゃんとひさを折り、正座をして、神妙におはらいを受けた。役場から打診をされたとき、親の会の役員会を開いた。受け入れる前は心配したか、案するより生むがやすして、実際やってみると人慣っこい、ざっくばらんな人たちはかりて楽しかった。肌身で感ずるよい経験をしたと思っている。

ところで、外国人学生が商店に立ち寄ったときのことだ。そこに2、3人の少年がいた。学生が「コノニチワ」と片言の日本語で話しかけると、少年たちは恥ずかしそうにうなずいたか、今度はなんとか英語で話しかけようとしていて、その光景かなんともほほえましかった。

なお、小正月から約1週間後、本田地区の役員宛に以下のような礼状が届いた。

資 料

S Y 様

謹啓

過日、小正月の行事にお招き頂きまして心から感謝申し上げます。

本当に楽しく、しかも貴重な体験が出来まして、私の娘のE、そして、S、B共々重ねて感謝申し上げます。

本田の皆様のご協力により、なまはげ行事を知る機会ができました。又、わらくつを作るチャンスにもめぐまれました。

Sさんの奥様には大変ご協力をいただきました。テンプラ、茶碗蒸し、そして焼鳥などの料理を おしえて頂きました。数日前に、私達はテンプラを上手に作る事かてきました。これも、Sさんの奥様のおかげです。とうそよろしくお伝え下さい。

農業を営んでいるIさんや、部落会長さんて神社の神主さんてあります、Nさんにも大変お世話になりました。又、別のNさん夫婦にも素晴らしいお家を見学する機会を与えて頂きました。そして又、I家族には夕食をこちそうになりました。

本田の皆様には本当にお世話になりました。生涯忘れられぬ思い出といたします。

敬具

平成3年1月22日

ミネソタ州立大学機構秋田校

M L

⑤ Sさん宅でSさんとHさん（銅屋地区）

イ 五里霧中で暗中模索の受入れ準備

最初、役場から受入れの打診を受けたとき、とこの地区でもなかなか受け入れてくれないらしい。それならば、「やってやらねはなるまい」と役員を招集して受入れを決めた。事前に役場で5集落を対象に打合せがあった後で、地域ごとに協力団体（青少年育成会、子ども会育成会）と何回か打合せをして、やっとスケジュールかてきた。このように受入れ準備は五里霧中の状況で、暗中模索の連続だった。ホームスティをするクループのなかに、日本の伝統文化などを研究しているM先生が入っていた。そのため、ホームスティ先にはとくに茅葺きの屋根で土間を始め伝統的な建築様式が残っている我が家か選はれたそうた。銅屋地区でのホームスティのおもな行事の様子は以下の資料を見ていたかくことにして、我が家とかHさんの印象は以下の通りである。

ハ 送り手の段取りの悪さに閉口したが、訪問客には総動員で歓待

当初、5名くらいの参加者の予定だったそうた。たから、それなりに段取りをした。ところか、人数の変更か何度もあった。あとて考えれば、大学側も期末テストなとていろいろと忙しかったり、人数のやりくり、あるいは役場などの連絡の手違いかあったのかも知れない。しかし、その時はこう考えた。アメリカという国は個人主義か進みすぎて、利己的になって、自分のペースで何でもものを考えるものかなと、少々腹かたった。期末テストにしてもあらかしめ分かっていることたろうし、無理てあれば、なせ、もっと前にちゃんと段取つけてやらなかったのたろうかと。

しかし、人数が3名に確定したと連絡かあったときは、急ぎょ、地区の関係者を招集して総動員をかけた。この日の参加を心待ちにしていた人もいるはずである。たって、3人くらいてこんな古い家に来たって、言葉も分からないのに心細いたろう。それなら、地区のみんなを出来るたけ呼んで、歓待してやろうと思った。たから、昼にとろろまま（とろろめし）を皆て食へるときには、この部屋に20人近くの人か集まって壮観だった。その頃には、最初の腹たたしさはすっかり忘れていた。

ニ ちょっと様子の違ったなまはげに、有意義だった国際交流

我が家にも小学生の孫がいて、その子は英語はあまり分からなくても、身振り手振りて、なんとか通し合ったという。なかには、ラオス系のアメリカ人学生Pさんが比較的上手な日本語を話したそうた。自分の家てしかに外国人と接することかてきて、かなりよい体験になったという。また、このPさんは自ら「なまはげ」を着て集落を回り歩いたという。付近の幼児たちには、「英語をしゃへる、ちょっと様子のちかったなまはげ」と写ったようた。雄和町でもあまり見られなくなった小正月の伝統的行事を、外国人たちがかいま見ることができて良かったと思う。わずか3人ても、国際交流の意義はおおいにあった。「迷っていないて、まず、行動してみるこことな」と思った。そういった意味ては、秋田県の閉鎖的な県民性を打破するうえても、今回の大学の開校は大いに意義あるものたと思う。

ホ ホームスティは地域と大学を結ぶコミュニケーション手段

当初、役場なとか開校前から考えていたのは、日本人の学生を含む1泊くらいの文字通りの「ホームスティ」てあった。それか、いろいろな事情て、以上の日帰りホームスティに変わった。それはそれで、それなりの効果をもたらししているようた。役場にしても、大学にしても、はしめての経験てあるかも知れない。ましてや、一般住民はこのはしめての経験てあったのたから、役場とか大学は反省会を開いて、今後のよりよいホームスティに向けての検討を行うへきてはないのか。集落か各地に点在する雄和町にあっては、とくにホームスティは地域住民と大学を結びつける一つの効果的な手段てあると、考えるからてある。

資 料

銅屋地区 小正月ホームスティスケジュール表

- 9. 30 青年会、育成会等の関係者集合。 (銅屋会館)
- 9. 45 米秋田校の先生、学生到着する。

1 0 0 0 歓迎のあいさつを兼ねて自己紹介。

銅屋部落の概要説明 (部落関係者)

なまはげの由来、歴史の説明 (青年会)

ホームスティの方へ佐々木家についてお話をする。

(部落と佐々木金一氏)

1 1 0 0 相川神明社参拝、お神酒を頂きながら宮司から神明社の歴史等について説明をねがう。

(先生、学生に参拝記念に何かを差し上げたい)

1 2 0 0 S家到着、炭火のいろりを囲みながら関係者全員で「とろろまま」を食べる。

1 3 0 0 S家の小正月の飾付けをはしめる。

掛軸をさげる、もちつきを始める、出来たもちを農具等に供える。子ともたちが育成会の協力を得ながら、たこ上げ、こま回し、はこ板遊びをする。

1 5 0 0 学生と先生からも、なまはげに使う「けさ」を作ってもらう。

1 5 3 0 小正月の「もち」を食へて少し腹こしらえをする。

1 6 0 0 青年会のなまはげ関係者、それに学生がなまはげの仮装を始める。

1 6 3 0 なまはげが神明社に参って御祓いをうけ身体を清める。御祓いか終わり次第、なまはげが巡回を始める。

1 8 0 0 学生のなまはげを佐々木家に帰してもらって、全員で小正月料理を食へながら懇親会を開く。

2 0 0 0 解散

(注) おみやげに、なまはげのめん、けさ、小正月料理の一部とわらくつを、お持ち帰りをねかう。

(3) 町の職人さんたちの国際交流の印象

ところで、雄和町役場では、今回企画した日帰りホームステイ事業の一環として、日本の日常的な生活文化を理解してもらうと、町内で営んでいる豆腐屋さん、畳屋さん、建具屋さん、鍛冶屋さんなどの職人芸を見学して回った。

以下は、外国人学生たちの見学の訪問を受けた職人さんたちか、その時とんな印象をもったか伺ったインタビューの概要である。

① 外国人の注目か、職人芸の再評価のきっかけになれば—S畳店て（新波地区）

今年の小正月の2、3日前のことだ。数人の外国人学生が役場の職員に引率されてやってきた。通訳には、Tさんがあたってくれた。実際に針を使って畳表をとりつけてみたりして、積極的に作業に挑戦する学生とそうでない学生といろいろいるなと感じた。とくに印象的だったのは、何でも見てやろう、やってやろう式の好奇心の旺盛な外国人の女子学生がいたことだ。好奇心においては外国人とか日本人とかの違いはないなと思った。帰りに、畳表で出来ている敷物をおみやげに贈った。外国人が注目するような職人芸というか、職人のわざを、日本人学生も再評価してくれるきっかけになればとも思う。

② あんなに喜んでくれるなら、何度でも来訪を歓迎—S豆腐店て（新波地区）

予定の時間を少し遅れて訪れた。お湯を煮たてていたのて、やきもきしていた。訪問者は7人（男4、女3）だった。豆をゆてたり、豆腐の型に入れるところなど、興味深く見ていてくれた。ああやって見てくれてありがたいなと思った。普通の日には、毎朝早朝に仕込むか、その日は見学者に合わせた。通訳は、新波の場合、Tさんが全部やってくれた。なかには片言の日本語を使ってくれる外国人の女子学生もいた。

案外、時間のかかる作業だし、手伝ってもらうにも熱湯を扱い危険だし、年季がいたりて、豆腐かてきるまでは見学だけにしてもらった。水の中て型からぬいて取り出すところを見せてやったら喜んで見ていた。アメリカでも豆腐はダイエットフード、健康食品しても食生活の中にも溶けこんでいるそうた。出来上がったものを食べていいかというと、友達にも食べさせたいといって、持ち帰った。あんなに喜んでくれるのなら、何度でも見せてあげたい。

③ 言葉が全世界で通したら戦争なんておこらないだろう—S鍛冶店て（新波地区）

うちで扱っているものは、野鍛冶といっているいろいろなものがある。草刈り鎌、皮はき鎌、くわ、なたなどを造っているか、今回の見学は時間がなくて全工程はお見せてきず、「鍛造」しているところをお見せした。女子学生たったので、火花が散る仕事場にはこわがっていたようだ。「冬はいいでしょうが、夏はたいへんしょう」と学生が通訳を通していったから、「そんなことは慣れっこになっている」と答えた。

くわが珍しいから部屋のインテリアにしたいと、くわを買っていった先生もいた。その先生はとってもほがらかな人で、何度かうちに足を運び、お茶を出す。「わたし、日本茶とっても好き」と、片言の日本語で話しかけてくる。たんたん親しくなって、先日もうちの家内に「おはさん、わたしは結婚していない。日本人のお嫁さんもらいたいな」といって笑わせていた。つくつく、言葉が全世界で通したら戦争なんておきないんじゃないかと思った。

夜になって公民館でなまはげなとて交流会をやるから来いというので行った。遅くなるからといって他の外国人たちは先にかえってしまったが、ただ一人の外国人女子学生が残っていたのが印象的であった。その子は、ひさが折れないので、あくらをかいていたか、よほとなまはげに興味かあって、見たかったのたろう。

④ 障子の組立て、かんな、のこきりに興味深げ—S建具店て（新波）

外国人女子学生たちに障子を作るところを見せてあげた。もう少し前に連絡をくれていれば、充分準備できたのに少々残念だった。短い時間であったので、障子のほねを作って、実際に組み立てるところを見せた。その後、皆に組立てを体験させたら、喜んでくれた。かんな、のこきりにしても、アメリカなどの道具と違うわけだから、興味深かそうだった。いまは、穴掘り、面とり、仕上げなどの機械があるものだから、何でもよくてきてしまう。たからもっと、体験させてやりたかった。

⑤ 商店主兼通訳のTさん（新波地区）

今回の雄和町ての一連のインタビュー取材のなかで、いろいろなところで耳

にしたのか「草の根の通訳」であるTさんの存在だ。一昨年、昨年いずれの取材時でもTさんにお会いできなかった。今年こそTさんに会おう。雄和町青年会会長の紹介で、SAS東京取材班は彼の所在をつきとめることかてきた。彼の本業は洋品店主である。伺ったときは、雪下ろしの真最中であった。申し訳ないかといって、彼は屋根の上からインタビューに応してくれた。屋根の上と軒下との間の前代未聞のインタビュー調査となった。以下は、雄和町の国際交流の陰の立て役者Tさんへのインタビューの概要である。

イ 構えず、草の根通訳を实践

通訳なんておこましいか、たまたま東京の大学で英語を学んだので、時間か許せは、手伝っているという感じ。特別に構えて、地域の国際化のためとか、活性化のためとかというのはない。ふたん着の生活のなかでというか、草の根の人々のつき合いがある。それかたまたま外国人で、言葉かわからないから手伝ってくれと頼まれれば、何とかしようということだ。

うちの商売の一つにインテリア内装工事があり、教員住宅にカーテンをつけにいった。そしたら、そこの先生かM先生といい、陶芸の趣味かあって意気投合した。車かなくて不便がっていたので、車に乗せてゆったりしているうちに友達になった。その先生から、「雄和町にきて国際化という話しを何百回ときいた。いったい、国際化というのは何ですか」と逆に聞かれた。私は、「先生か私とこうして友達になっていることか国際化なんてしょう」と答えておいた。また、先生かいうには、タウンタウンに遠すぎるともいっている。何をやるにしても、車か必要だ。日本の学生は金持ちだから車を持てるけど、アメリカ人学生はそういうわけにはいかないそうた。

ロ 子どもにとって外国人との出会いはカルチャーショック

子どもにとっては、そのほとんどか外国人をこれまでは実際に見たことなかったから、突然ある日、道で出会ったり、家のなかにはいつてくるわけた。そりゃすこいインパクトかありますよ。テレビと同じ人かいる訳たから、カルチャーショックですよ。あれ、この外人はおとうさんの友達た。おとうさん、英語でしゃへっている。また自分たちは、英語を習っていないけど、英語なんかを習うのは、たいしな／＼た／＼なと思いはしめているようた。こういっ

たようなことか、ミネソタ大学かきたことの効用なんじゃないかな。

例の小正月行事の時も、小学生かたくさん集まったか、みんな始めのうちは、動物園で動物を見るように遠まきにして見ているか、したいにふさけたり、しゃれあったりして触れ合っていくうちに、友達になっていく。「なんだ、自分たちと同じなんじゃないか」と、子ともなりにわかるんじゃないのかな。

(4) 外国人の大学関係者から見た地域の人々

ミネソタ大学には、約260名の日本人学生と、セントクラウド校の日本研究コースの外国人学生の60名以上がこの秋田校に在籍している。しかも、雄和町には大学関係者だけでも約100名の外国人が生活している。これは、秋田校全体の3割をしめる人口である。そのため、外国人たちの雄和町の物心両面に与える影響は少なくない。そこで今回は、とくに前述のホームスティに参加した外国人の大学関係者から見た雄和町の人々などへの印象を座談会形式で語ってもらった。この座談会形式のインタビューは、平成3年2月7日午後、秋田校にて3人の大学関係者が参加して行われた。司会・進行はSAS東京会員Oが担当した。

小正月の日帰りホームスティの印象について

- O まず、先月のホームスティの印象についてお伺いします。Eさん、いかでしたか。
- E とても楽しかった。日本文化について学んだ。伝統的でおいしい和食を食へたし作り方も学んで作った。実際、私たちはてんぷらを作った。
- O おもちはとうたった。
- E もちつきも手伝った。楽しかったし、その日は、日本文化についてたくさん学んだ。地元の人たちは、とても寛大だった。神道の儀式は興味深かった。私の日本語はあまりよくないので、よくわからなかったけど、概要は何となくわかった。とても楽しかった。
- O あなたの名前は、G。とこてホームスティをやったの。
- G 町の名前はよくわからない。ても、Sさん宅に滞在した。
- T Sさんという家は、1軒以上あるんたよ。
- O 君は、Sさんの所へ滞在したの。

- T 私の妻か。
- E Sさんは、2軒あります。新波ではないですね。
- O 5つの地区かあるのですね。銅屋、左手子、平尾島、本田、新波、たふん、銅屋か平尾島ですね。
- G わからないわ。
- O 発音か日本人でも難しいからね。ところで、君の今回の田舎の伝統儀式の経験についての感想は。
- T こういう事が行われていると知らなかったのが驚いた。めずらしかった。私のホームステイで、とても面白い経験のひとつで楽しかった。他の人にも言ったけど、私は、9月以来、妻と一緒に日本に住んでいるけど、その日の経験は、その中でもいちばん良い、面白い体験だった。私は、Kさんの家に滞在した。彼らは、とても親切で良いホストだった。それで、私は彼らに手紙を書くと言って、住所をきくのをおすすめした。Oさん、その人の住所をきいて、僕に教えて欲しい。私は彼らに、サノキューレーターを書きたい。
- T のりとは面白かった。日本人の家族は、英語かほとんど話せなかった。私はその家に行く時、たふんコミュニケーションノに苦労するだろうと思っていた。
- O しかし、彼らは、ホテールランゲーンなどを使って、努力して話そうとしてくれたんですね。
- T そう、とても努力して話そうとしてくれました。それで、実際上の問題は全くありませんでした。彼らと一緒に過ごした時間は、予想していたより、はるかに楽しかったです。私は本心から、いつかは彼らにアメリカに来て、僕の家滞在中に欲しいと思います。それはウソではありません。僕は、それを彼らに言うつもりです。手紙の中に書くつもり。
- O 日本へ来たのは初めて。あなたの専門はなに。
- T 僕は、地理の学位を持っています。また、英語教育の学位を持っています。
- O 大学では、英語を教えているのですね。ところで、今度は、あなたの経験について、感想をきかせてください。
- G 私もTさんと同じで、とても良い経験をしました。特に午後、日本人の家族と一緒に過ごせたのが良かった。そして、伝統的な古い家、いろいろあって、その

まわりに座ふとんか敷いてあって、そこに人が座っていて、まん中に、大きなやかんかふらさげてあるのを見るのは、おもしろかった。とても伝統的で、家族の雰囲気か伝わって、子供の頃を思い出すような感じ。郷愁的で、とてもよかった。言葉の問題は、あまりなかった。心を開き合ったので、言葉は全く問題なかった。

- T 日本人の家族は、とても暖かかった。私たちは、人々かこんなに親切で、開放的たとは予側もしなかった。これは、田舎の人たちの特徴たと思う。とても有意義な経験で、満足している。私の妻は、農家の生まれて、私も、親せきか田舎にいる。それで、田舎に長く住んだこともある。田舎暮らしは、とてもイーノーで、田舎の人たちは、一緒にいてここちよい。
- E 夜は、なまはげを見た。私は、なまはげの暴君的なところは嫌い。それは必要ないと思った。ても、面白かった。色んな人たちの家へ行って、中を見えるというのか。私たちは普通、色んな人の家の中へ入って見ることもないから。家族の人たちや、その家の中を見るのは、興味深かった。
- O あなたの方は、なまはげを見た。
- G 私は、くつ、スカート、ノョール（けさ）、お面などを作るのを見た。それは面白かった。私たちは、ある家族の家にした時、なまはげか入って来るのを見ていた。子供たちは、位かないで、たた、目をまるくして少し笑った。子供か泣くのは、見なかった。ても、この儀式はとても面白かった。
- O 茶わんむし、天ぶらは、とうたった。茶わんむし（エノクプティノク）は、とうたった。
- G ええ、それを作るのを手伝ったわ。それと、お肉の ノノカハフとは言わないみたいたけど、日本名は 。
- O やきとり。
- G そう、やきとり。それもたくさん食へた。4回も。帰るころまでには、お腹か一杯になった。一日中、おいしいもの一杯食へた。
- O 日本は初めて。
- G はい。
- O あなたは。

- E 3回目。
- O ても、田舎は初めて。
- E いえ、以前、西舞鶴へ行ったことがある。
- O ああ、京都の近くの 。そこでは。
- E 教師をしていました。週の半分京都で、半分は西舞鶴で。だから、田舎に行った経験はあるけど、こういうのは初めて。
- O 人口10,000人位のところは初めて 。過疎地ですね。
- E なまはげについては、知らなかった。これは秋田特有のもですね。
- O ホストの人たちは、方言（秋田弁）を使うので、君たちに伝わるかどうか、心配していたようたか 。
- E ても、私たちのほとんどは、日本語の標準語もわからないのだから 標準語も秋田弁もわからないのよ。
- G 私の場合、グループ4人のうち、2人は日本語が話せるので、彼らが通訳してくれたけど、秋田弁もほとんどわかったみたい。
- O それは、男の人。それとも女の人。
- G Mさんと、彼の娘、だから男と女よ。2人とも日本語を話せるわ。
- O その娘さんは、県立秋田南高校へ行っているのて、日本語を話せるんたね。
- G そう、彼女は、秋田弁はわかるかどうか知らないけど、日本語は、ほとんどたいたいわかるわ。
- O あなたと、R。あなた方は、銅屋へ行っていたんたね。それとも、左手子でしたか。
- T 私の妻、Gは、どこに行ったてしょうか。
- O 左手子、銅屋、本田 。
- T 私たちは、ホームスティのあと、左手子のコミュニティーセンターへ行った。それも良い経験だった。そこでは、討論や質疑応答をした。おおせい子供もいた。
- O ホームスティ先のK氏は、皆か通訳を通して、質問するのは難しいと思っていた。たとえば、秋田の米について 。
- T おもしろいのは、ミネソタ川か、大豆の産地であること。もし、日本か米の市場開放すると、ミネソタ州の農民は、日本人か大豆を育てるようになるんじゃない

か、と心配している。日本は、ミネソタの大豆を、たくさん買っているから。

今後のホームスティについて

- 今回の日帰りホームスティは、とうてした。
- T よかった。僕のホスト家族は、開放的で親切だったのて、2～3日滞在してもいいと思ったけど、それが可能かどうか、わからない。ある人たちは、ホスト家族との関係か、それほとよくない場合は、2～3日の滞在は、いやかもしれない。でも、その日、2～3時間だけ、その家族と過ごすことか前もってわかっていたのて、気楽に行けてよかった。
- 日帰りホームスティと、もっと長期のホームスティと、どちらかいいと思う。
- E 今回は、休日だったのて、短い日帰りホームスティは、よかった。でも、3月には、5週間の休暇があるので、そういう時は、2日間くらい滞在するのもいいと思う。でも、私たちは日本語が話せないのて、日本人の家族にプレッシャーをかけると思う。私たちも変な感しかするし、日本人の家族も変な感しかしている。だから、初めて会う時は、こういう2～3時間かいいと思う。たとえば、私のホスト家族は、私にまた来るように言ってくれた。だから、今度行く時は、慣れている。だから、もし、もう少し長く滞在するよう招いてくれればいいと思う。
- あなたの場合、今回は短い滞在中、次回は、もっと長く滞在したいと。
- T 今回のような、わずか2～3時間、ある一日の午後のホームスティは、よいアプローチだと思う。もし、ホスト家族とゲストがうまくいくと、次回はもっと長いホームスティにするといい。
- だから、ゆっくり彼らに、あなたたちか、慣れてもらおうと。
- G それと、私たちも、日本のホスト家族にゆっくり慣れるといい。
- 田舎の人は、異文化を受け入れるのが難しいけど、皆、それを受け入れようと努力していましたね。
- G 今回は、とてもいい日だったけど、そのようないい日にするように、田舎の人たちみんな、大変努力してくれました。私たちはまた、慣れ始めたところですが、今回の一日旅行に、とても感謝しています。でも、週末旅行にするのは、もっと大変かどうかは、わかりません。

- O 田舎の人は、普通、異文化に対して保守的なので、大変努力しています。
- T もし、今度、田舎で2～3日のホームステイを受け入れるなら、今度は、ワーキング ホームステイにすべきだと思う。僕は、農家の人と一緒に、仕事をしてみたい。1～2日、2～4～6～時間働いていた方が、ただ座って、食へて、話しているより気持ちいい。
- E 私たちもそう思う。それだと、自分か負担をかけてり、しゃまになっていると思わなくてすむ。そして、家族の一員として、そこにいられる。そして、自分も役に立つことかできるから。そして、日本の料理を学んだり、米の作り方を学べる。とてもいいアイデアだと思う。
- O なせあなたは、日本へ来たの。大学か秋田へ来たのはひとつたか、その他の理由は。
- T僕は、日本について好奇心かあった。日本文かや日本人について、日本ては何か起きているのか。アメリカては、日本の情報はあまりない。日本人か何を考え、どう生きているのか知りたかった。
- O 東京は、日本てはない。ニューヨークみたいに。だから、秋田は、あなた方にとっていい経験だと思う。
- G 特に、田舎についての情報は聞かない。アメリカのテレビは、円や交通、公害については放送するけど、秋田の人の生活については、ほとんどしない。絶対見られない。
- O 都会の人は、よそよそしい。たけと、地方の人は、あったかいとよくいわれる。あなたは、地理に興味をおもちたから、日本にきたんですね。ところでEさん、日本の学生は、とうてすか。学生の英語は。
- E 日本人の学生は、最も教えにくいと思う。特に日本ては。日本人の学生か、アメリカに来て、1つのクラスに1人か2人いる場合は、とても個性のある学生になって、皆、日本人の学生か好きになる。特徴かあって、よくしゃべる。ても、日本の高校で教えたけど、皆、とても静かだった。彼らに、思っていることを発表させたりするのは、難しい。また、日本人学生か、私たちに日本について教えてくれるようにするのは、難しいと思う。こういうプログラムで会った大人の人のなかには、私たちに日本について教えてくれた人もいる。ても、日本人学生は、

スキー、カラオケなんかの、個人的な、目の前の満足の方に興味がある。

T 僕も、Rと全く同意見だ。日本人学生は、時には、教えるのは難しい。でも、彼らは、一緒にいて楽しい。たとえば、学習はますかったり、覚えは悪かったとしても、僕は、彼らのそばにいるのが好きだ。驚いたのは、日本人は、ユーモアのセンスがあるってことだ。

O あなたは。

G 日本人に教えるのは好き。かわいい子もいれば、内気な子もいる。彼らが私に話しかけたり、私の方を見たりしてくれるようにするのは、大きな壁がある。でも、たいたいにおいては、日本人の学生が好き。別れる時は、つらいと思う。

O 草の根の国際交流のために、外国人の教師は、努めて町へ入っていこうとしている。しかし、学生たちは、週末になると、秋田市内に出かけていってしまうということだ。

T ある東京出身の学生は、自然や緑のうつくしさに感動したり、寮のハルコニーから、日没が見えることに感動している、と書いていた。夜の暗さにも。日本人学生は、この素晴らしいロケーションを、喜んでいると思う。しかし、今回のホームステイに、彼らが来なかったのは驚いた。たぶん、外国人向けのプログラムと思ったのだろう。彼らも来られることを、知らなかったんだろう。東京出身の学生は、この地域を楽しんでいると思う。同時に、町の小ささに苦情も言っているか。

O 若い人は、田舎から流出しているの、人口が減っている。一方、都会は、混雑している。若い人は、農業は嫌いだ。

G 他人の芝生は、よく見えるのよね。たぶん、彼らも、もっと年をとったら、田舎へ帰りたと思うんでしょうね。

T ほとんどの人は、田舎はたいくつたと思うんだ。

G でも、家庭を持って、もっと年をとったら、田舎へ帰りたと思うこともあると思う。

町の活性化について

O ミネソタ大学秋田校というのは、地域再活性化に役立っていると思うか。

G たふん、難しい質問ね。

T 誰にもわからない。可能性は大きい。しかし、希望していることが全く起こらない、ということも考えられる。

E 皆、たくさんの望みを持って、理想が高い。こんなプログラムを通して。理想が全部かなうとは限らないけど、その中のいくつかは、かなうでしょう。再活性化は、とうかしら。経済については、人口が増え、人が移住してくることを望んでいるらしいけど、何とも言えない。

T 地域社会か、大学に手をさしのへ続け、大学も、地域社会にもっと上手に手をさしのへるといい。より多くのプログラムを提供したり、交流を行って。大学が、より多くのプログラムを提供して、地域社会との交流の機会をつくらなかったら、大学は、孤立したものになる。大学は、お金をもたらずくと、それたけて、地域の社会面で活躍できないだろう。

O 再活性化は、精神面でもあると思いますか、人々の意識の変化とか。

G 私たちの学校には、きれいなホールがあったので、多くのコンサートや演劇団が来て、大勢の観客を集めたし、地域の人に参加してきた。

O 学習環境は、とてもいい。しかし、大学へのアクセスなどの問題もある。それに学生の質の維持かてきるだろうか。大学の敗政と学生の質とてトレードオフの関係には陥らないだろうか。

T 農業や林業の学生を、アメリカから来させたらいい。また、日本の都市からも、学生を呼んたらいい。特に、この大学は、この地域特有の活動に興味のあるアメリカ人学生を、来させるべきたということを言いたい。たとえば、地域経済、農業、林業、鉱業に興味のある学生を。

O 秋田大学は、鉱山学で有名た。ともかく、田舎てあれ、都会てあれ、大学の評価をするには、時間かかる。学生か、社会へ出て活躍しはしめてから、大学のよしあしか評価される。今日は、とうも有難うございました。

3、まとめ——今後の課題と展望

これまでミネソタ大学秋田校の開校の動きとか、それらをめくる町の人々の印象について概観してきた。ここては、それらの印象についてその概要をまとめ、そし

てその上で、雄和町と大学の地域進行に向けての共通の課題や将来探訪について述べてみたい。

(1) 雄和町における人々の印象のまとめ

① 異文化体験が生活の見直しのきっかけ

インタビューをした人々からうかかった印象や意見のなかで、最も多くてめったったのは、日本人、外国人、老若男女を問わず、いわゆる異文化体験やカルチャーショックといわれるものである。つまり、言葉、生活様式、文化など、違いに驚いたり、とまったりした時の体験や感動に関する印象や意見である。そして、ほとんどの方が、異口同音に身の回りのことや自分の生活、地域の文化などの見直しのきっかけになったということを述べている。興味深いのは、時節柄か、いわゆる湾岸戦争か、身近な外国人学生の父親を通して、毎日の平和な生活の見直しのきっかけになったという例である。

② 環境—素晴らしい環境と不便な環境

つきに多かったのは、大学とか雄和町全体の環境に関してである。それは、二つの評価にわかれ、その一つは、交通が不便、アクセスが悪い、近くの店は少なく不便、といったものである。もう一つは、インタビューをした外国人、都会出身者に多い評価であるか、素晴らしい自然 生活環境、学習 施設環境といったものである。興味深いのは、地元の人々か、「新しく雄和にやってきた人々か不便を感じている」ことを実感していて、生活しやすい環境づくりを訴えている点である。

③ 外国語の理解の必要性

三番目に多かったのは、外国語という言葉の理解の必要性を痛感した経験談である。これは、インタビューした日本人の年配者に多い。通訳を通して、なにかもとかしきがあるようだ。そのためか、外国人と交わした英会話、あるいは、英単語の一言で感動したという孫や子供たちの体験を通して、語学の必要性を訴えている点か印象的であった。

ちなみに、言葉に関していえば、他方では、「言葉は二の次、身振り手振りて案外通じるものた」という意見も比較的多かった。

(2) 国際化を通じた住民の意識改革から地域の活性化へ

さて次に、地域や教育の国際化を通して、住民の意識改革から地域の活性化へどのように結び付けていくか、といった課題である。実際、雄和町の町民たちは、一方ではまた外国人教員 学生との出会いを物珍しかっており、地域と大学がお見合い段階にあるといった感である。とはいえ、他方では、異文化の人々と出会うことで、逆に自分たちの生活を見直しはしめている人々の動きを感じ取ることかてきる。

いくつかの集落から成り立ちこの雄和町では、主な商店街というものは新波地区に一部あるだけで、メインストリートとか繁華街というものはほとんどない。それだけに、いろいろなところで、いろいろな人か、いろいろな形で出会いをもちしめている。こういったことを通して、町の人々が活気ついているのも事実である。

しかし、このように、一人一人か元気ついたり、活気ついたりしているか、それだけでは地域の活性化にはつなからない。個人の元気を地域の活性化に結びつけるもの——その媒介項は、ネットワークという仲間づくりである。人と人の結びつき、つまりパーソナルリネーションか友を呼び、またその友かパーソナルリネーションによる友を呼ぶ。このようなネットワークか、雄和町で行われていく必要があるように思える。

(3) 「人の誘致」と仲間づくり（ネットワーク）

そこで仲間づくりたか、交流、交際範囲あるいはコミュニケーションの範囲を、従来の血縁社会から地縁社会、情報縁社会にまで拡大し、その情報縁社会のなかで元気な仲間づくりをすることである。雄和町の場合は、大学縁という情報縁である。いろいろな人々や情報か大学を縁に雄和町を行き交うのである。これからいろいろな人々との出会いの機会か増えてこよう。

雄和町民、大学人双方にいえることたか、ただ眺めているだけでは、出会いは生まれない。大学人は日常生活のなかで集落に、雄和町民は日常生活のなかで大学に行き交ったり、なんらかの方法でコミュニケーションや交流をもって関わっていく必要がある。なにも行き交うたけかコミュニケーションの手段ではない。雄和町は確かに公共交通の不便なところで、車かなければ、大学と集落を行き交

うにも大変なところである。しかし、そういった地域的な条件を克服して、人々との出会いを増やし、そして仲間づくり—ネットワーク—をしていくことが必要である。そしてそれかてきるか否かは、地域と大学の知恵にかかっているのではなかろうか。

いつれにしても、なんらかの形でネットワークが行われていく場合、その際に重要なことか二つある。その一つは、いろいろな人たちと協力したり、連携してなにかをやる場合、対等の立場に立つことである。「対等の立場」といへは聞こえはいいか、簡単なことではないのである。工場誘致の際などの例に見られるように、ともすれば、進出者と地域の側とていすれかか従属関係に陥りやすい。そういった傾向を避けるためにも、各人か努めて対等の立場に立つこと、そのためには、各人か互角の実力をつけようと努めることである。

もう一つは、雄和町に限らず地方の人々に一般にいへることたか、よその知恵とかよその土地ての体験であるとか、よその人々を受け入れる寛容な地域社会の育成、環境づくりに努めることか必要である。

雄和町かめざしているものは、ミネソタ大学の誘致を通して、外国人の教員、学生そして日本人学生の「誘致」をおこない、外国の文化とか日本国内の他の地方の文化とかのいうなれば異文化を、雄和町いや秋田県地方の文化に融合させた「新しい文化の創造」である。また、大学もこのような動きにへきるべきであらう。これまでよく「大学はその地域、その国の文化である」といわれてきたか、地球的にものを考え、地域的に行動するクローカル時代をへて、近い将来のミネソタ大学秋田校には、「アメリカの大学でもない、日本の大学でもない」普遍性豊かなクローカル大学を期待したい。

(4) 大学と地域の新しい産業づくり（インダストリアライゼーション）

大学という教育機関に産業を結びつけるとは不謹慎と批判をうける向きもあるかも知れない。しかし、他方ては、雄和町の人々の中に地域の産業と大学の研究体制との産学協同を望む声も少なくないのである。しかも、クローカルな大学をめさすミネソタ大学秋田校とすれば、地域の産業を振興させたり、新しい産業をおこすきっかけを与えなくてはならない。秋田校は現在のところまた専門部をもたないか、近い将来は、大学かそういった方向を進めていくたろう。たた、いす

れにしても、地域の側で、従来からの地域産業を振興させようとか、新しい産業を生み出していこうとする主体的な努力が不可欠であることはいうまでもない。

そこで一つの選択肢としての提案がある。ミネソタ大学秋田校では東北地区や県内の企業関係者を対象にして国際ヒノネススクールを開講、開設したりする。雄和町の側では大学のある国際コミュニティゾーンの一角にリゾートオフィスといった類いのサテライトオフィスを創設して、ヒノネススクール開講中はヒノネスマンノ受講生の滞在先にあてる。滞在中は課題学習、仕事もてきて、余暇も楽しめるというわけである。閉講中は、一般ユーザーに開放する。サービスソフトの充実など容易ではないか、例えばこのようなことも考えられるということである。

なるとなれば、今回の大学誘致は、従来の工場誘致に見られるハート産業の誘致ではなく、一面では、ソフト産業の開発 誘致の性格をもつものと考ええるからである。そして、前者は将来の卒業生の就職斡旋という意味で大学と企業双方に、後者は地元経済への波及効果という意味で雄和町に、それぞれなんらかの恩恵をもたらしていくのではないだろうか。

最後にあたり、昭和63年よりこの4年の間に、自治体の外国大学誘致ケースとしては初めての新潟県北蒲原郡中条町、そして2番目の秋田県川辺郡雄和町を訪れ、それぞれ現地での実態調査を行ってきたか、その間にそれらの地域の人々をはしめ、お世話になってきた方々は多い。この場をかりて、その皆様方にお礼申し上げたい。

《補論》

外国大学誘致の地域振興効果について

ここで述べる外国大学誘致の効果とは、必ずしも雄和町でもたらされている効果ではない。ここでは、中条町、雄和町での事例調査をふまえながら、一地域の大学誘致、とくに外国大学の誘致にともなう効果というものについて簡単にまとめておきたい。

外国大学の誘致の効果というものは、経済効果と精神効果に分けられる。それらはそれぞれ短期的なものと、長期的なものに分けられる。

1 短期的経済効果

まず、短期的な経済効果とは、大学建設にともなう経済効果、それから派生する需要、消費購買力が増加する効果である。学生とか大学関連の消費かもたらす経済効果は長期的にも持続するだろう。誘致関連の人々の出入り、そしてイベントや催事を通しての経済効果も無視できない。しかし、これらの効果はどちらかといえは、「棚からぼた餅」で、受け身的な効果である。自分たち自らか生み出そうとした効果ではない。しかも、これらは地域の経済を持続的に活性化させるか否かは、地域にとれたけの魅力があるかに掛かっている。ここていう地域の魅力とは、自然、町並みとか施設、歴史、文化たけてはない。自然が豊かで豊かな恵みにあふれているとか、なんらかの産業が盛んで経済的にも活気あふれているとか、そういうことをいうのである。そればかりか、地域の自然とか文化に人々かどのような関わりをもって暮らしているか、生きているか。そのような人々の魅力も大切である。

2 長期的経済効果

ここていう長期的な経済効果とは、地域の経済を構造的に変えていく効果をいう。つまり、大学や企業等から行われる地域の地場産業や地域の産業の担い手たちへの技術移転、それによる地場産業や新たな産業づくりなとである。これらは主体的な努力が必要とされる。したがって、精神的な効果と密接な関わりをもつ。

3 短期的精神効果

つぎに精神的効果であるが、これも短期的なものと長期的なものに分けられる。短期的な精神効果というのは、やはりホームスティとか交流会などのイベント、催事を通して地域の人々の活性化をもたらすのである。したいに、地域の人々、例えば商店の人々が簡単な英会話を習うようになったりする。また、少したつと、地域の人々と外国人の間で、互いに行き来したり、言葉を教え合うようになる。

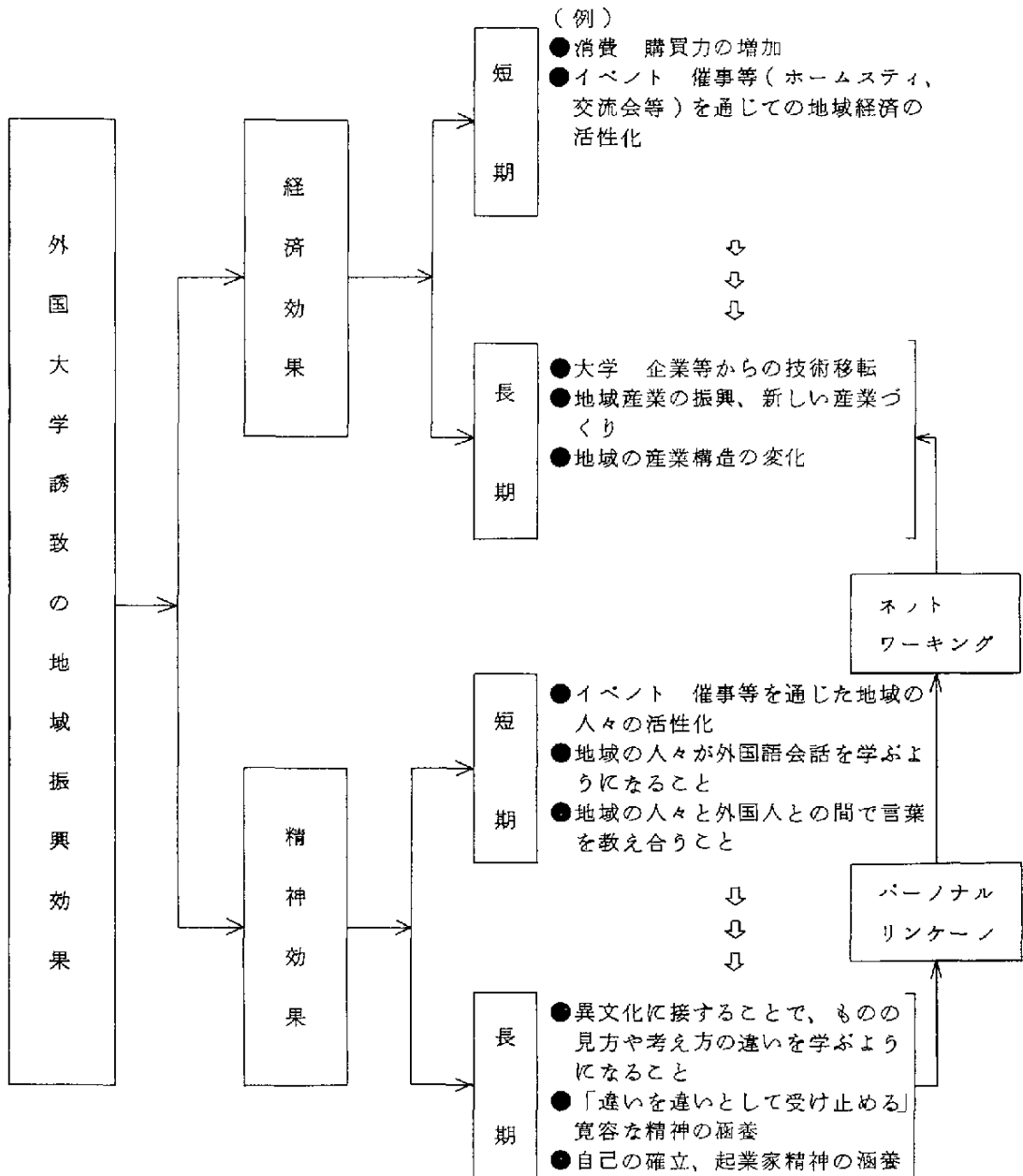
4 長期的精神効果

たいふたった頃、それまでの異文化に接してきたことで、ものの見方や考え方の違いを実感として学ぶようになる。自分たちの生活や文化を見直したりするのも、この頃である。この段階になると、長期的な効果がもたらされてきたと考えてよからう。そして、そういった異文化体験をへて、「違いを違いとして受け止める寛容な精神」を自らが涵養することで、自己を確立する段階にいたること。これか、ここという長期的な精神効果である。

5 まとめ

前述の長期的な経済的效果は以上の長期的な精神的効果と大に関わっている。つまり、長期的な経済的效果がもたらされるようになるためには、長期的な精神効果が地域の人々にもたらされることが必要最低条件となる。そうして、それらの人々のなかから、企（起）業家精神のあふれる人々や新たな産業の担い手たちが輩出したり、また、よその地域からそういった人々が集まってきて、それぞれにさまざまな形で、出会い、ふれあい、結びつき、つまりパーソナルリンケージが行われる。今度は、またそれぞれのパーソナルリンケージがそれぞれに友を呼び、というようにして仲間づくり（ネットワーキング）が行われていく。このような過程のなかで大学、企業等から技術移転を受けたり、技術を習得するためのいろいろな機会を求める人々—産業の担い手たち—があらわれてくる。こういった段階になると、その地域の産業が活性化していたり、振興していたり、また、新たな産業づくりが起こっていたりするのである（これらの過程については、後節の「日本の地方産業の将来」を参照されたい）。

参考までに、以上述へてきたことを図示したが、事例調査地たる中条町、雄和町で大学誘致の効果が発揮されるか否かは、地域振興の担い手たる両町の町民、自治体としての中条町、雄和町、学生を含む大学関係者などの主体的な努力の如何にかかっていることはいうまでもない。



(補論)

大学のマーケティング戦略 ——神戸溝田グループの試み——

1 はじめに

1994年3月をピークに、18歳人口の減少が始まる。いわは市場の縮小という危機的な変化が大学にもたらされる、という点は多くの論者が指摘しているところである。ところか大学側の対応をみると、女子大学を共学にしたり、大学の名称を変更したり、学部を新設したり、などの対応を除けば、環境変化への取り組みは遅々として進まないようである。

こうしたなかにあって、学生を徹底して「顧客」としてとらえ、売り物は「楽しい2年間」でキャンパスのなかにワンルーム・マンション、ゴルフ練習場、自動車教習所、ショッピングセンター、遊園地などをそなえたのか、溝田グループ（本社神戸）の姫路学院女子短期大学である。積極的なマーケティング戦略の展開を図っているのである。

この姫路学院女子短大。今では企業的ヒノセスセンスで市場を切り拓いたとして、いろいろなマスコミからとりあげられるまでになった。それまで知名度も低く、学生を集めるのに苦労したのか、今では定員をオーバーし、全国から学生が集まるまでになった。

溝田グループは、短大の他に高校、米国の大学まで創設して、事業分野を広げている。この章では、溝田グループをとりあけて、大学におけるマーケティング戦略について述べることにする。

2 溝田グループの概要

溝田グループは、昭和5年5月神戸市長田区久保町に、「溝田旗店」として店を開いたのか始まりである。創設者は、溝田利松氏（昭和59年没）である。創業以来、数人の職人をつかって、旗幕をつくっていた。戦後も、一早く設備の新鋭化を図り、神戸ではトップシェアを誇る旗類メーカーとして成長した。

現社長の溝田博利氏（昭和は6年生まれ）は、59年に父親の跡を継いで社長に就

任した。溝田氏は、これより前昭和42年36歳で神戸市議員に当選し、神戸市長田区を地盤として6期連続議員を勤めている。

溝田氏は、58年神戸弘陵高校を開校した。もともと教師になりたかった溝田氏は、家業のために夢を断念したか、のちになって学校経営者として夢を実現してきたわけである。神戸弘陵高校は男子校で、「奮闘努力」、「質実剛健」、「尊敬慈愛」の3つを建学の精神としている。「文理コース」(有名大学への進学が目的)、「体育コース」(野球、サッカーなど5種目の特待生のコース)、「標準コース」の3つのコースが設けられ、私学の特性をいかしたユニークなカリキュラムによる学習指導が行われている。

昭和61年、経営危機に陥っていた姫路学院女子短期大学(昭和48年の開学)の経営を引き継ぎ、同短大を建て直したことは先にも述べたところである。日経ヒノネス(1991年1月28日号)よれば、この5年間の総投資額は200億円近くにものほり、2～3年以内に単年度黒字になる見込みといわれる。溝田グループの支援をうけて積極的な投資によって、競争力ある「新商品」として短大がよみかえつた。短大の北隣りは、「ひめかくキャンパスラノト」といわれ、ハノファー植物園、ハイオカーテノなどの自然をいかした諸施設が整備されている。レストランも中にあり、「レストランひめかく」ではステーキレストラン、カフェラウンジ、VIPルームなどに分かれている。キャンパスライフかすへてここで楽しめのか、この「ひめかく」の特徴である。

平成2年には、ワントントン州立エトモンス大学日本校を開校した。男子高校、女子短大に続いて3つめの教育機関である。

以上のように溝田グループは、旗類メーカーから出発して、学校経営へと事業を拡大してきた。溝田グループは、学校以外にも、特別養護老人ホームや保育園も経営しており、教育と福祉を見すえた展開を図ってきたといえる。

3 エドモンス大学日本校の概要

(1) 開学までの経緯

神戸市とワントントン州ノアトル市とは姉妹都市であり、市議員である溝田氏はワントントン州を訪問したことかこれまでかなりあった。溝田氏はその後、ワノ

ントン州立エトモンス大学（所在地リンウット市）のニールセン学長と知己になり、エトモンス大こそ理想の総合的大学であることを発見した。「国際化社会で活躍できる人材を育てたい。そのためには日本の制度よりもアメリカの教育システムのほうが最適である。アメリカの大学を日本に開校してはどうか」と、話しか持ち上り、1989年11月訪米してワシントン州知事と会い、12月にはエトモンス大と（株）エトモンス大日本校との間で開学の契約書にサインかなされた。

エトモンス大学は、公立の短期大学で、コミュニティカレッジと呼ばれる大学である。大学課程コースと職業コースの2つがある。前者は4年制大学編入のためのコースである。後者は、50以上の専門職コースに分かれている。

エトモンス大学は、「教育における新しい試み、新しい創造」として、日本校開校に踏み切った。アメリカ教育を日本で行うだけでなく、アメリカ文化と日本文化の異なる文化の中から、高いレベルの教育が可能となり、学生の視野を広げることができると期待された。

1990年4月に開校するまではスムーズであった。ワシントン州政府、ワシントン州上下院、リンウット市、リンウット市議会などの全面的な支援を受けることができた。また日本でも数社の大手企業が開校にあたってのメッセージを寄せた。

(2) プログラム

エトモンス大学日本校のプログラムは、大きく分けると、1年次の英語集中課程と、2～3年次の専門課程に分かれる。まず入学後、英語集中課程で英語を学びTOEFL500点以上をめざす。アメリカの大学で学習かてきるレベルまで5段階のクラスに分けて、集中的に学ばせてある。

専門課程は、留学学科（アメリカの大学への3年次編入が目的）、ホテル管理学科、国際経営学科、国際情報管理学科の4つに分かれる。職業コースの学科はいずれもエトモンス大学本校のカリキュラムをベースにしている。

所定の単位を修めると、エトモンス大学の準学士号が与えられる。

以上のように、プログラムの内容は、エトモンス大学本校のコミュニティカレッジの内容とほぼ同しており、4年制大学への編入コースと専門職業コースの2本立となっている。なお、日本校での職業コースでは、企業での実習が予定されており、すぐ使える実践力を養成する点にも力か入れられている。

(3) 開校後

昨年4月には300人定員のところに600人が応募し、450人が入学した。大半が兵庫、大阪、京都の出身である。なかには、30代、40代の学生もいるという。

キャンパスには、エトモンス大本校から50人の留学生がやってきて、日本学科に学んでいる。日本人学生のみならず、本校からの留学生が混しること、日本人学生の異文化体験を図っているといえる。

また、エトモンス大日本校の地域社会への貢献策として、エトモンス インターナショナル カルチャー・クラブを設立して、神戸市民の生涯教育の支援も行っている。これは、英会話、歌 ダンス、世界事情 文化などのコースを受講できるもので、週2回、約2ヶ月授業が行われる。第1回目では、受講者は40人であったが、その後180人に増えている。いずれにしても、地域社会との融和の点で興味深い試みである。

4 溝田グループのマーケティング戦略

溝田グループの学校経営をこれまでにみてきたか、同グループのマーケティング戦略上の特徴をまとめておこう。

① 着実な成長戦略であること

はじめから大規模化は避け、高校―短大―大学と着実な拡大を図ってきたことがあげられる。学校経営もヒノネスである限りは、投資に対する効果を考慮にないれざるをえず、むやみと大きい投資はリスクが大きすぎる。その点同グループの地道な成長戦略は、堅実である。

② 相互効果をもたらす戦略であること

男子高校、女子短大と一見すると何の脈絡もない学校経営であるか、アメリカの大学の日本校を開校したことにより、学生 生徒の進学・進路の新商品が生みだされ、高校から大学日本校、短大から大学日本校へというコースも用意できることになった（事実、姫路学院女子短大からエトモンス大日本校への希望者もあるという）。溝田グループにとっては、学校経営を3つ行うことで相互効果が生まれ、消費者である学生・生徒や保護者には商品の厚みと幅の拡大効果が生まれた。

③ 商品のリニューアル戦略を行っていること

しかも、各3つの学校を詳細に分析すると、各学校それぞれ商品の競争力を持ち、たえずリニューアルにつとめている点が目される。短期大学は徹底した「顧客」志向で、大学のキャンパスライフの楽しさを売りにしていた。これまでの投資も200億円にのぼるといわれる。

エトモンス大日本校は、国際人養成、留学希望者の増加という時代の波をうまくとらえ、「日本で学べるアメリカの大学教育」を売り物にした。留学も日本で準備が可能になるシステムをつくり、たとえ留学できなくても職業専門教育を日本で学べる点が特徴となっている。日本では実務教育、実践教育が軽視されてきただけに、同大日本校のもつ商品としての価値は高い。しかも、今後は同大日本校の教育内容をコミュニティーカレッジからさらにハイレヘルまでの教育にひきあげていくために、他のアメリカの大学を含めて、相互協力を図る考えてある。

しかしながら、他方でマーケティング上の課題が多いのも事実であろう。

まず、顧客のとらえ方がやはり高校、大学とも中卒、高卒の若者をターゲットにしている点である。生涯学習、生涯教育といわれるまでもなく、教育というヒンネスのターゲットは社会人、主婦、老人まで幅広い。この層へ取り組みとして、「エトモンス・インターナショナル・カルチャー・クラブ」の設立がみられるものの、本格化していない。今後は、ヒンネスマン・ヒンネスマンのための専門教育機関という新しい商品、主婦のカルチャースクール、老人の生きかひのための学校という新しい商品を開発する必要であろう。そうすることにより始めて、消費者のライフサイクルすべての面にわたって、ヒンネスチャンスを拡大することか可能になる。

次に、溝田グループの中にある旗類メーカー「溝田旗工業」の存在である。同グループの発祥のもととなった企業であるにもかかわらず、教育、福祉という異業種の分野に事実を拡大した同グループにとって、事業領域（トメイン）の再編成が今後は必要になるものと思われる。同グループの生きかひ、異業種を積極的にとり込むコンクロマリット的方向に踏み出すのか、注目されるところである。

以上の課題はあるものの、3つのマーケティングの特徴をみると、なぜ溝田グループか、厳しい環境化にあっても学校経営をうまく成功させてきたかが理解できるものと思われる。18歳人口が減少していくのはもう3年後に迫っている。安閑として何らの手を打っていない大学は、3年後にはもう手遅れになることを、溝田グループの事例は物語っているものと思われる。大学の淘汰の時代が確実にくれば、ビジネスマインド、企業家精神を持った大学のみが生き残るのは、自明のことなのだから。

日本の地方産業の将来

——長野県坂城町に見る発展の経緯と展望——

1 地域（産業）の活性化要因の三要素

ここで、地域経済の活性化にとって必要不可欠な要素はパーソナル・アイデンティティ、ネットワーク（仲間づくり）、インタストリアライゼーション（産業づくり）の3つであることを提起したい。そこまです、それらの3要素を以下、順を追って定義したい。

(1) パーソナル・アイデンティティとは

パーソナル・アイデンティティとは（とくに断わらないかぎり、以下P Iと称す）とは、自己認識から自己発見、自己現実といった3段階のプロセスをへて自己を確立することをいう。これら3つのプロセスとは以下のように定義できる。

① 自己認識

自分っていったい何なのだろう、何かしたいのだろう、何かできるのだろうといった、いうなれば、自分探しの旅に出る段階である。

② 自己発見

自分にはこんなこと、あんなこともできるのかというように、新しい自分を発見する段階である。

③ 自己実現

自分はこうしたい、ああしたいという欲求かわいて、その実現をはかろうとする段階である。

以上の段階をへて、ひと（個人）は自己を確立し、自信をもち、元気になっていくのである。しかし、個人一人一人が元気なだけでは、地域（経済の）活性化には結びつかないのである。個人の元気を地域の活性化に結びつけるもの一媒介項はネットワークと呼ぶことにする仲間づくりである。

(2) ネットワークとは

つぎに、ネットワークという仲間づくりとは、交流範囲あるいはコミュニケーションの範囲を従来の血縁社会から地縁社会、情報縁社会にまで拡大し、そ

の情報縁社会のなかで元気な人の仲間づくりをすることである。以下、便宜的に血縁社会、地縁社会、情報縁社会の定義をしておきたい。

① 血縁社会

地縁社会とは、親子、兄弟・姉妹、親戚（親近者、遠縁など）などが集まっている社会をいう。

② 地縁社会とは、隣家、町内会、友人、知人などが集まっている社会をいう。

③ 情報縁社会とは、見たい縁、聞きたい縁、話したい縁、仕事縁、取引縁、出会い縁、奇縁といったような情報縁で、元気な人々が集いあったり、交流したり、またなんらかの情報通信手段で交信している世界をいう。

以上の各段階をへて元気な人がいっぱい集まってきて、それぞれに人と人との結びつき——パーソナルリンケージ——かてきる。そして、いろいろな形の仲間、グループか、いろいろな方法を通してかたちつくられる。こうして、ネットワークノクといわれる仲間づくりが行われるか、その際に重要なことか2つある。それは、④連携、提携するためには、各人か互角の実力をもつこと、⑤外ち導入、すなわち、よその知恵、よその土地での体験、よその人を受け入れる土壌の育成、環境づくりをすること、以上か大切である。

(3) インダストリアルライゼーションとは

インタストリアルライゼーションという産業づくりとは、企（起）業家精神あふれる元気な人たちが行う新しい産業づくりである。これも、以下の段階を経て、はしめて可能となるものである。

① 起（企）業家精神の涵養と起業家の存在

PIして元気ついた人たちが自ら企業家精神の涵養をはかることで、それらの人々の中から起業家精神の持ち主たちが生まれたり、またその中に「起業家のたまこ」が存在していることか必要である。

② インキューヘーション

このインキューヘーション（保育器）の段階において、企業家精神あふれる人々に対して育成したり、支援したりする環境づくり、元気な仲間たちの「起業家のたまこ」への物心両面にわたる支援か必要である。

③ 成長分野の発見

新しい産業づくりが可能となるためには、開拓をめざした産業あるいは事業の環境が潜在的に成長分野であることか不可欠である。逆にいえば、産業あるいは事業環境の潜在的な成長分野を発見すること、つねに消費者、生活者の立場にたったマーケティング的発想をしていくことか必要である。

以上の各段階をへて、元気な起業家たちが新しい地域産業づくりを始めていくのである。たまたその産業づくりも、①モノ（製品）づくりから売り方（商品）づくりを志向し、②地域産業の厚み（高付加価値化）と幅（多品種生産）の拡大に心かけることか重要である。

以上のへてきたことを全体的な流れとして図示すれば、図のようになるろう。

2 坂城町における機械工業の発展

これまで、地域経済の活性化にとって必要不可欠な要素は、パーソナルアイデンティティ、ネットワーク、インタストリアライセーションの3つであることを述べてきた。その具体的な事例として長野県埴科郡坂城町の工業発展を取り上げてみたい。

(1) なにゆえに坂城か

長野県埴科郡坂城（さかき）町は上田市の北に位置する人口17,000人の町である。坂城町は戦後、「世界の坂城」といわれるくらいに機械工業のメッカとして発展してきた町である。坂城町には大小400近い各種工場があり、製造品出荷額は1,500億円を越える（昭和63年）。しかもこれらの企業はほとんどか地元の人々がおこした「自前企業」で、人口一人当たりの出荷額では日本一の町である。

古く、北国街道は、佐渡鉾山からの金銀を江戸に運ぶ重要な街道であり、加賀の殿様か参勤交代する道筋、善光寺参りの参詣客の通る道であったという。この街道沿いの坂木宿が現在の坂城町である。千曲川の清流と山々の豊かな緑に抱かれた自然環境に恵まれてはいるか、農業だけでは生活か成り立たない。そういったことから早くから工業に目をつけ、とくに戦時中の軍需工場の誘致や、工場の疎開かきっかけとなり、現在までに成長したといわれる。

しかし、都市の工場などか戦争を契機に地方へ疎開していった事例は全国いたるところにある。長野県に限っても、例えば、諏訪市、岡谷市といわれるところは、精密機械工場の疎開先になり、精密機械のメッカとなったことはいうまでもないであろう。しかも、諏訪、岡谷は、当時、生糸の暴落によりあふれ出していた製糸工場の熟練工などの失業者も多く、坂城と比べて、立地条件、アクセスにも恵まれているところである。

ところが、坂城町の場合は、戦後になってから開花していく。立地条件も悪く、アクセスも良いほうではない。これといってなんの取り柄もない土地柄であった。町民の心になかにあったものは、ただ「なんにもないという危機感だけであった」という。

しかし、なにゆえに、現在ですら人口2万にも満たない坂城町に、これまでに360以上の事業所かてきて、疎開してきた人々と、おもに農家の二、三男の人々との間にいかなる交流や技術移転があったのか。こういった点をさくするために、以下、坂城町の資料などによって、坂城町の工業の発展の要因やその過程について概観してみたい。

(2) 工業誘致前の坂城町の経済的背景

昭和10年代、坂城町の工業進出前の産業は農業であった。農業立県であった長野県のなかて、坂城町は農業条件かきわめて悪かったといわれる。商品作物導入前の中心作物である稲作の比重かきわめて少なかった。坂城町の米の収量は年間必要量のわずか4分の1てあつた。水田面積は全耕地の25%（当時の長野県平均45%、全国平均55%）にすぎず、農家1戸あたり平均耕作面積は50 a （県平均69 a ）てあった。このように、典型的な零細農業地てあったかために、坂城の人々は農家経済たけては生活か苦しかったのてある。このため農業以外の産業部門へ進出しようとして離村する人々や、在村のまま打開策を試みる人々も少なくなかった。

昭和16年に宮野鑓（やすり）工場を誘致し、引き続いて大崎製作所、日本発条などの諸工場を誘致したのは、以上のような農業的背景のなかて、現代的な言葉ていへは、産業構造の高度化と雇用拡大、地域活性化をめさした一つのモデルケースといえよう。

(3) 坂城町の工業の発展過程

坂城町の工業の発展は、①東京からの疎開企業が立地し、地域の工業の中心となった時期（昭和20年代～35ころ）、② 外部からの誘致企業の立地と既存企業からのスピノ・オフを中心に工業が展開した時期（35～40年代）、③業種が多様化するとともに既存企業の中でハイテク化が進展し、高付加価値化が進行した時期（50年代）の3期にわけてとらえることかできる。

① 第Ⅰ期（昭和16年～昭和35年頃）の工業発展

本町に工業の灯かともされた期間であり、「工業のまち坂城」の基盤となった16社が創業した時期である。

本町の工業化は、昭和16年の榊宮野製作所（宮野ヤスリ）の工場誘致にさかのほる。続いて、18年に本発条機、19年に榊長野大崎製作所、20年に中島オールブリノノ機が立地する。これらの工場はいずれも疎開工場であり、航空機、通信機部品などの軍需生産を行っていた。敗戦後、これらの工場の多くは、家庭金物などの金属生産に転換した。

また、軍需工場から転換した金物工場などが生き詰まったことから、工場主を中心に、昭和22年に坂城工友会が発足し、優良工場の視察、技術研究会などの地域内交流を活発に行い、その後の工業振興に大きな役割を果たし、今日の発展の礎となっている。

特にミノン部品は、昭和20年代の機械工業の中心的生産品目であり、工友会を通して、会の中核的存在である中島オールミノンが、下請けに出すことにより中小企業の創設に寄与した。

また、中島オールミノン、宮野ヤスリ工場、長野大崎製作所等は、町内のリード企業として率先して仕事のあっ旋や資金援助、技術指導を行い、零細企業の立ち上かりを支援したと言われる。

現在は、これに相当する組織的な交流はないか、無尽講などの付き合いが多くあり、技術面等のアトハイスが受けられる環境はそろっている。

一般的に町民の気風として、「人の助けを借りることを好まず、相互に切磋琢磨する」という考え方が強いようである。

第Ⅰ期の特徴点は、次の諸点に集約される。

・本町工業の発展の基礎となった金属加工工業は、東京からの疎開工業が中心であった。

疎開工業の下請けとしての地元企業が発展した。

・疎開工業や地元有力企業を母体としてスピノ オフした小工場の展開が行われた。

なお、本町の工業の発展は、朝鮮戦争特需を背景に昭和25年ころから拡大傾向をみせ、急激に拡大したのは昭和30年半はから40年代にかけてである。

② 第Ⅱ期（昭和35～40年代）の工業発展

この時期は「工業誘致条例」による誘致企業と、町内の主要企業で技術を身につけた中堅社員がスピノ オフし、持ち前の自立心と企業家精神をもって企業を創業開始した時期である。

また、我が国の自動車産業の成長と軌を一つとしている坂城町の自動車部品工業が、この時期の町工業のけん引力となって発展した。このほか、昭和40年代半以降、プラスチック、電気機械の立地が増加し、坂城町工業の多様化が進行した。

更に、高度経済成長の恩恵もあって、急激な業務（量的）拡大をした時期である。地域内での取引から、広く関東方面や国内及び諸外国まで取引先を求めて、完成品メーカーに成長した企業が出ている。

こうしてスピノ オフした企業も含め、創業企業数は年間10社ほどあり、町内の潜在労働力を呼吸し続けたそのほか、昭和43年には東北6県へ企業者、町議会議員及び商工会役員を先頭に求人活動が行われた。

第Ⅱ期の特徴点は、次の諸点に集約される。

独立元企業とそこから独立した企業との交流（各種支援を含む）も盛んであり、新規の独立企業が成長した。

自動車部品関係を中心とする一極型の工業構造から他業種の立地により、工業構造の多極化が開始された。

第Ⅱ期の間に一段と工業化が進展したか、昭和48年の第一次石油危機を契機に、質的な転換を迫られるようになった。

③ 第Ⅲ期（昭和50～60年代）の工業発展

この時期の新しい動きは、高付加価値化への転換である。その一つは、時代のニーズに沿った付加価値の高い業種への事業転換が進んだことである。これはプラスチック、電気機械及び精密機械関連への進出企業が増加したことから明確である。

二つには、F A化などによる「省力化」が強力に推進され、既存産業の高付加価値化が進行したことである。これは、いずれもエレクトロニクス、メカトロニクス化に積極的に対応したものであり、MC N C等の数値制御機械のいち早い導入はその現れである。それとともに、「中小企業能力開発学院」が坂城町と町商工会の共催で昭和55年から開催し、広く高度技術修得の場として活用されている（N C等は、従業員が数人の零細企業に至るまで約600台導入されている）。

第Ⅲ期の特徴点は、次の諸点に集約される。

自動車部品工業から、他業種への構造転換が図られた。

- ・ F A機器の導入が広がり、既存工業の高付加価値化が進行した。
- ・ F A機器の導入に伴い電子工業が成長し、企業グループの形成が行われた。

④ 機械工業の発展の要因

以上の発展過程をへてきた坂城町の工業であるが、それは、昭和63年現在でも、事業所360、従業員6618人、製造品出荷額1,524億円で、製造品出荷額では県下12位という高いレベルにある。

さて、立地条件にさほど恵まれない千曲流域の町「さかき」が、多業種にわたる工業集積があり、にわかに「世界の坂城」と呼ばれるようになった過程には、過去40年間の永きにわたって、企業経営者をはじめ行政に携わる者 地域住民等々、関係各位の努力によるものであるといわれる。

今日までの工業発展の要因は、次の7点に列記されよう。

- ① 誘致企業及び疎開企業が完全に地域に定着し、本町の工業発展の源泉となった。
- ② 終戦直後の地元創業者が、一代にして成功を収めた人かいる。
- ③ これらのサクセス ストーリが刺激となり、企業からの分離独立者（スピノフ）が相次いだ。

- ④ 産業が産業を呼ぶという図式かてきた。
- ⑤ 自立心・独立心が強く、旺盛な企業家精神が育ちやすい風土がある。
- ⑥ 在来機械と新しい電気の技術の結合がうまくいっている。
- ⑦ 町の工業振興施策と熱意があった。

(4) アメリカ人文化人類学者と坂城町

さて、以上のように、坂城町の工業発展の過程と諸要因について概観してきたか、この町に魅せられた一人のアメリカ人学者がいる。その人の名は、C R キーナといい、日本名を「紀井奈栗守」と語る少壮の文化人類学者だ。以下はキーナ氏へのインタビューの概要である。

① 日本との出会いと坂城町の印象

キーナ氏はアメリカのフラウン大学を卒業後、それまで専攻してきたコンピュータサイエンスだけでなく、技術というものは人間にとって意味を持つのかをもっと考えたい、社会と技術の関連を知りたいと思い、社会科学の分野に転向した。技術の発展と社会と関連を知るには、文化人類学がよいと思い、カルフォルニア大学ハークレイ校の大学院に進んだ。幸いなことに、フルフライト奨学金をもらうことができたので、日本でフィールドサーベイをしようと思った。東京よりは地方がよいということて、長野県の坂城町を選んだという。

そもそも海軍だった父が朝鮮戦争の折に立寄った日本からお土産に買ってきたおもちゃが、最初の日本との出会ってあった。そのおもちゃを分解して興味を覚えた。その後、新聞配達をして貯めたカネで買ったテレビで、「コンラ」の映画を初めて見て、日本語への関心を深めた。フラウン大学に入学してコンピュータ科学を学ぶ傍ら、日本語を学習した。フラウン大学は、学生と教師とのコミュニケーションが活発で、ファーストネームで呼び合う、一種のコミュニティを形成している。専門は自分で作れというのかモットーで、何をやってもいい自由な雰囲気がある。大学は学生のヒノネスを支援し、教師が会社の株主になることもある。こうした雰囲気からアップル社とか生まれたという。

坂城町はりんご、ふとう、はらの栽培でも知られている。近くには上山田温泉、別所温泉もある。

1989年11月に坂城町に初めて来た。最初、チャールズ ティケノスの小説に出てくる英国の産業革命期のうす汚れた町を想像していたか、山あいの小さな町で景色が いい のに驚いた。法政大学の清成忠男先生の紹介で、同町の商工会の事務局にオフィスをもらい、事務局長のお宅に滞在するようになった。文化人類学は資料を調べるよりも人と話をすることか重要で、私自身も人と話すのが好きで、これ迄約1年間この町で過すことになった。この間に日本だけでなく、米国の社会・産業についても考えてみた。

坂城町は世界の坂城町の標語にも見られるように、機械工業のメッカとして戦後発展してきた。業種としては自動車部品、金属プレス、切削加工、金型などである。坂城駅を中心に発展した企業も国道沿いに企業が立並ぶようになってきた。事業所も400社達し、中小企業とはいえ下請けてはない独立した企業が多いのか特徴となっている。

② 坂城町の成功の要因と今後

坂城町に多くの企業かてき、地域産業の成功の事例として必ず取上げられるようになった。この理由を正確に分析することは難しい。時代の彼に乗った、たまたまうまくいったという偶然性によるところも大きい。坂城町の成功を二度と起こせるかという、これは二度とてきないだろう。成功した要因か次の成功の要因にならないからである。歴史的に見ると以下のようなことは指摘できる。

まず、戦前蚕と米で成立していた坂城町か1930年代の不況により経済的苦境に陥って、余剰労働者か発生してきた。必死でこの危機を脱する道を模索し始めた。

他方町外に出て、手に職を付けないと生きていけなかった農家の次男、三男達か川崎、東京などの京浜工業地帯の町工場て働いていた。このうちの4、5人か、1940年頃からの戦争で軍需工場の疎開先としてこの町に帰ってきて、納屋工場、鶏舎工場を始めた。余剰労働力かこれらに吸収されることとなった。坂城町は雨か少ないので金属か錆びにくいのも、工場の立地に有利な点であった。信州人の独立精神、自立性も他方では理由になるかも知れない。

しかし、帰ってきて工場を始めた人々は、当初、町の人からは「よその」

としてしか見られずにいた。町全体に機械工業が波及していったきっかけは、当時自転車屋をやっていた地元の人かメッキ工場（現在はハネの工場）を次にやり始め、少しずつ波及していった。また、台風が2年続いて来襲し、収穫前のりんごが落ちてしまい、農業がタメになったことも見逃せない。農家の人々か、工場から仕事をもらい、農家の納屋など下請仕事を始めた。このため今でも半農半工の農家が多く、農業収入もけっして無視できないウェイトを占めている。だから、例えば、広いりんご畑のまんなか農家の納屋工場があったりする。

これまで栄えてきた坂城町の機械工業も、最近、色々課題を抱えている。多くの企業が3Kといわれる業種だけに、イメージが悪く、人手不足をきたしている。高校を終えても町の会社に勤めるものは少なく、町外に就職している。このため、社員の平均年齢は中高年齢化してきた。量産品の製造ラインには、外国人労働者も多くなってきた。フランスの日系二世達で、外見は全く日本人と区別が付かない。

次に、山あいの町だけにまとまった土地が不足しており、規模を大きくしようとするか他の町に移転するケースが目立っている。実際、300人の企業が最近、1社、上田市に出ていった。この企業は新しくホテルのようなオフィスビルを建て、テニスコート、野球場、ゴルフ練習場、茶室、カルチャースクールなども完備しており、カリフォルニアのセロックスパークを思わせる。

また、石油多消費の自動車か今後とうなるかは分らない。自動車そのものの生産が難しくなることもあろう。

ところで、米国の産業発展の歴史を見ると、ヨーロッパから移民として難民たちかつきつきにやってきた。これらの人々か下層の仕事をして、上層に上かっていった。こうした再生産のメカニズムかうまく動いてきたのか発展の原因といえる。日本は米国に20年後れているとよくいわれるか、外国人労働者を見るとそうてはなくなりつつある。いすれにしても、時代の波にうまく乗り、偶然にも成功した坂城町の機械工業か、今後も大丈夫たということは誰にもいえないだろうという。

3 事例にみる地方産業の将来

これまで、坂城町の事例についてみてきたが、このケースから得られるいくつかのポイントをまとめ、今後の地方産業が抱えると考えられる課題や将来について展望したい。

(1) 個人の元気と企業家精神

まず、坂城町には、自己実現や自己の確立をはかろうとしたりする元気な企業家が存在してきたということである。例えば、それは、戦前 戦時中、都会の下町の町工場から信州の片田舎に疎開し、納屋の工場、鶏舎工場の創業者たち、あるいは技術移転を受けた地元の農家の人たちであったりする。さらに、戦後、納屋工場などから成功した会社や工場などから成功した会社や工場をやめて、独立して工場主になった人たちも、「元気な」企業家といえよう。

(2) 仲間の元気—仲間づくりとインキュベーション

もう一つは、仲間づくりとインキュベーションが存在してきたということである。地域内外のいろいろなところから、元気な企業家やその「たまこ」たちが坂城町にやって来て、それぞれに人と人の結びつき—パーソナル・リレーション—かてきてきた。それかまたそれぞれに友を呼び仲間づくりをおこなってきたのである。例えば、それは、工友会、無尽講といった集まりで、今よくいわれている異業種交流の原型であった。こういった仲間づくりのなかで、ある時は助け合い、励まし合い、ある時は競い合う中で、一種のインキュベーション—インキュベーション—というか、企業家の養成がおこなわれてきたのである。

ちなみに、C R キーナ氏がすんなり坂城町に受け入れられているのも、いろいろなところから人々が集まって仲間づくりとか、インキュベーションが行われてきた地域的な背景があるからであろう。

(3) 地域の元気—産業づくり

企業家の候補生（たまこ）たちが坂城という地域に根ついていくうちに、企業家として一人前になってきたのである。そういった人たちが二人、三人と増えていくことで、地域産業や地域経済・社会に活気かよみかえってきた。こうして、ミシン、自動車部品、タイプライナーなど戦後の輸出主導型成長産業の一翼を担

い、現在も各種機械製品や電子機器製品を中心に、工業の町「世界の坂城」をかたちつくってきたのである。

ところで、本稿では先に「産業づくり」のところで、成長分野の発見とか事業環境の成長性ということを述べたが、昭和25、6年前後の坂城町の工業の立ち上がり時期に、坂城町の産業づくりに対し、一種の追い風として、当時の朝鮮戦争の特需があったことも見逃せない事実ではなかろうか。

(4) 今後の課題と展望—地方企業と外国人労働者

以上か、地方産業の一つの成功事例における成功の主な要因と考えるか、これらの要因か揃えば、どのケースでもその成功か再現可能かという、それは非常に困難であるといわざるを得ないであろう。キーナ氏か、前節で、「坂城の成功を二度と起こせるか」という、これは二度と出来ないだろう。成功した要因か次の成功の要因にはならないからである。」と述べているように、産業の担い手をはしめとした生産要素の違いはいうまでもなく、時代環境とか、それによる事業環境などの違いによって、成功の要因というものは違ってくるからである。

ましてや世界の経済情勢が刻々と変わる現在においては、経済環境の変化にはめまぐるしいものかある。しかも、ヒト、モノ、カネ、情報の交流か国際間で双方向で盛んに行われるようになると、地域振興とか地域産業の将来の問題も、開放経済体系のなかで考えねはならなくなっている。

その象徴的な例の一つに、外国人労働者の増加かあげられる。最近、全国的に外国人労働者がさまざまな職場に雇用されるようになっている。前節でC R キーナ氏がふれているように、最近の坂城町でも、いくつかの工場で外国人労働者か雇われはしめているという。こういった傾向は、今後ますます増える傾向にあると思われる。

つまり、日本の地方産業はその大半か中小企業である。しかも、これらの企業は労働集約的産業である場合が多い。そこへきて、最近の人手不足である。労働者か不足すれば、これまで一般に考えられてきたのは機械化で合理化をはかるとか、女子、高齢者の潜在労働力を引き出すということであった。しかし、昨今の産業構造のサービス経済化で、より多くの労働者か3次産業へ移りつつある。これらを背景に、最近の若者を中心としたいわゆる「3K（きつい、きたない、き

けん)産業」への嫌業化傾向で、外国人労働者にそれらの産業を代替させようとする傾向にある。

そのため、製造、建設、サービスの各業界を中心にして、ほぼ全業種にわたる中小企業が外国人労働者を雇用している状況である。企業の当面のねらいとしては、人手不足の解消のためであることはいうまでもないが、なかには、人材の育成や強化のために積極的に乗り出している企業もある。例えば、コンピュータ関連の企業では優秀な外国人労働者を活用して研究開発に役立てているところも少なくない。また、地方企業は中央の大企業ほどゆとりがないためか、大きなねらいとして掲げているところは少ないが、外国人労働者の雇用を副次効果として職場や会社全体の活性化に役立っているところもある。

このように、外国人労働者をうまく活用している企業がある一方で、活用できないばかりか、日本人管理職・社員と外国人社員との職場生活上の軋轢などの問題が起こっている企業もある。その一つに、エスノストレス(異文化不応症)とても呼ぶ、日本人、外国人双方が互いに異文化に接するときに感ずる一種のストレスの発生があげられる。

実際に外国人を雇用している企業の現場に行き話をしてみると、言葉や民族性、文化、風土などの違いからくる(と考えられている)様々なエスノストレスが職場のなかで発生しているようだ。とくに管理者・サポーターの間で、外国人を雇用して管理することの経験不足などからくるエスノストレスが著しい。例えば、管理者が外国人労働者に対し日本流の価値観、労働慣行に取り込もうとするにもかかわらず、なかなか達成できず不満を感じ、やがてその外国人の民族性の問題に帰着させてしまう事が多い。勿論、勤務観、生活時間をはじめとした民族性の違いとか、経済発展の違いに依拠する場合も少なくない。しかし、単なる個人的な差異でしかない違いを、民族的、文化的違いに錯覚しかちてあることもまた事実である。

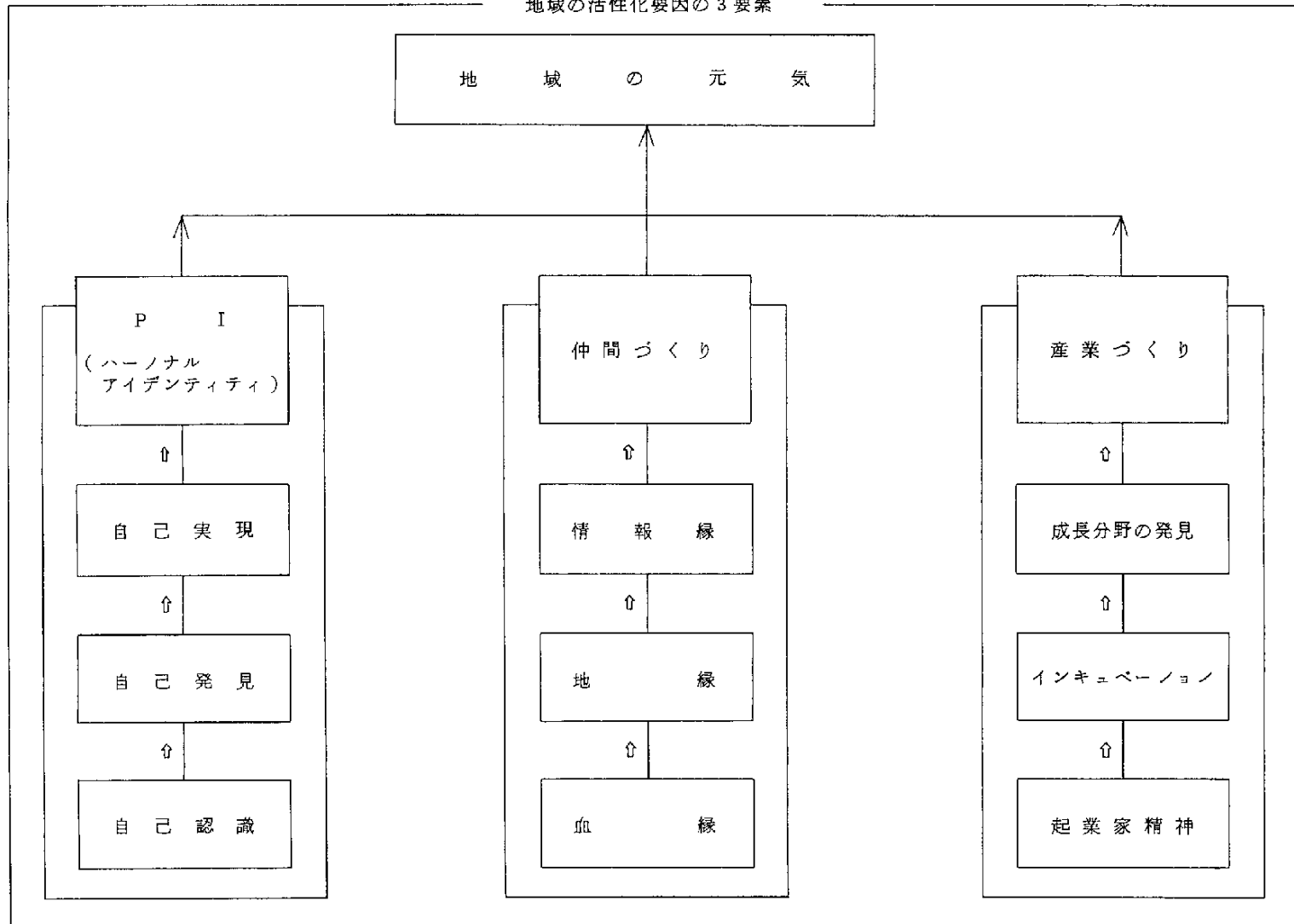
このように見てくると、C R キーナ氏が前述の坂城町の印象のなかで、日本での外国人労働者の雇用問題を比較的楽観的にとらえているか、アメリカほど多民族国家でない「島国日本」では、キーナさんの考えるほど容易な問題ではないのかもしれない。

さて、活用かうまくいっている企業にしても、その日本的経営や労働慣行に外国人を取り込むのに成功している場合と、外国人に柔軟に合わせたやり方で成功している場合とかある。このいずれかよいか、はたまた国際的な共通ルールをつくるべきなのか、意見の別れるところだ。

また、異文化の象徴として言葉の違いがよく引き合いに出されるか、企業人にとり言葉の理解は必要であっても、それだけでは充分ではない、さらに必要なことは、違いを違いとして受け止める寛容な姿勢を育むことである。そしてその上で、異質な価値観を持った人々とその価値観を認め合いながら協働していくことが必要である。

今後、海外進出などによっても、地方企業を含めた日本の企業かますます多くの外国人労働者を抱えることが予想され、それによる国内外での国際化した職場環境下で、異文化への適応能力の如何か、地方企業のみならず日本の企業全体の存続に大きく影響していくことは否めないであろう。

地域の活性化要因の3要素



《補論》

大都市製造業の生残り策—東京都大田区の事例—

東京都大田区は京浜工業地帯の中核として栄えてきた。昭和63年の工業統計調査では、大田区の工場数は8,151工場、これは東京都の9.6%を占めて依然として東京都の中でも重要な工業地帯であることに間違いはない。しかし、49年以降では工場数は、減少傾向からはほぼ横這いに推移した後、58年をピークに次第に減りつつあるようだ。従業員数も一貫して減少しており、大田区の工業にも変化が見られるようだ。

大田区の工業の特徴は、零細規模の工場が多数で、1～3人、4～9人の従業員規模の工場が8割を占めている。また、業種別では一般機械、金属、電機、精密機械などの業種である。多摩川沿いの矢口、下丸子、西六郷、本羽田、羽田それに大森、糀谷などに旋盤やNC工作機械を動かす小さな町工場が集中している。規模は小さいとはいえ、これらの町工場が専門の技術を持ち、大メーカーにとってなくてはならない存在になっている。図面をポノと渡せば、翌日には製品が出来上がるのも、この地区ならではの強みである。

しかしながら、土地の高騰、人手不足、後継者難などにより、大田区を脱出し地方に出ていく企業も目立ってきた。また、転業・廃業も見られ、町工場が集中する地区を歩けば工場の跡地がマノションに変わり、工場主の中にも不動産の管理に転じる人が見られる。一坪400万、500万の土地に数千万円もする機械を数台置き、高い人件費を払って、製造業を営むには余りにも収益性が低すぎるわけだ。東京を始めとする大都市の中での製造業は、いかにして土地生産性、労働生産性を上げるかのノヒアな課題を負っている。

こうしたなかで、最近目立ってきたのは、大田区の工場の中でも試作品を専業とするメーカーの動きである。これまでのように量産品をやっていたのでは、単価も安く、利益も薄いということと、付加価値の高い試作品に転じたわけである。試作品である、かかった日数に人件費をかけ、さらに一般管理費を加えるだけに、量産品より単価は高くなる。例えば、大田区の下丸子にあるN精機という試作品で有名な企業がある。社員はわずか50名程度だが、東芝、ニコン、キャノン、ヒクター、ノニーなど大メーカー50社を顧客先として、これらの研究開発部門から試作品だけを受注している。

図面かオンラインでN精機に送られると、同社ではCAD/CAMで各部品にはらして、部品毎の図面を描き、加工している。中には外注する部品もあり、これらが集められて、手作りの試作品かてき上かる。部品にはらすノウハウ、部品の加工技術が同社の強みといえそうた。売上19億円であるか毎年2億円の設備投資を行い、最新の機械を揃えている。同N社の社長の考えては、今の職人は機械プラス腕で、最新の機械か使いこなせないといけな。そのためには、大卒たろうか高卒たろうか、機械つまりコンピュータまで知っていなければならず、旋盤一つて何でも作れる古い型の職人ては駄目になりつつあるという。同社はまた100社にのほる協力企業のネットワークを抱え、この試作品ならこの加工か旨い、あの加工ならあそこと使い分けている。繰返し生産と違い、1個1個違う製品を作るたけてに、ファンローなネットワークを抱えていないと対応てきない訳た。100社ネットワークの中には、同社から独立した元社員か3人、また同社の指導て量産品から試作品へし転換した企業なとか含まれている。いい意味ての新陳代謝か行われている。こうした再生産のメカニスムかうまく働いていけは、大都市の製造業も明るいのたか、現実は厳しいようた。N精機も人手不足に悩まされ、人か採用てきないている。大きくなろうとすると工場拡張になるか、これも土地高騰て厳しいようた。このため同社も長野県佐久市への移転計画を進めている。

大都市の製造業にとって、これからの生残り策も、人と土地のホトルネツクを如何に解消するかにかかっているといえそうた。

「パソコン通信による国際交流」 コアラ・コリアトーク会議の状況について

個人で手軽にアクセスできる情報空間としてパソコン通信は順調に普及しているものといえるであろう。推計によれば、わが国におけるパソコン通信のユーザー数は50万人といわれ、大手の商用ネットワークサービスでは全員数20万人を越えるものまで現れてきた。パソコンかワープロと電話回線さえあれば、理論上は地球上のあらゆる国々との交流が家庭にいなからにして可能な時代になっている。しかし、実際にメッセージを気軽に交換するようになるには、その受け皿としてのシステムを作り上げるだけでなく、通信費や言語といった目に見えているハードをクリアすることに加えて、互いの存在を認知するための積極的な紹介者や熱心な推進役を果たす人達の果たす役割も重要である。

大分におけるローカルパソコン通信のホストであるCOARA（大分パソコン通信アマチュア研究協会）については、すでにこれまでの報告書によっていくつか紹介してきたが今回は大分県という地域でパソコン通信を楽しんでいる生活者たちかとのように国際交流の手段としてこのノールを活用しているかをレポートする。

1 韓国ネットワークの父ユー・キョン・ヒー

韓国と日本の草の根国際交流の最初の開拓者は、柳京熙（Kyon Hee YU）さんである。もともと原子力開発の技術者であった彼は1964年日本で始めてコンピュータの世界に足を踏み入れた。当時の韓国にはコンピュータという言葉すら存在せず、文字とおりのパイオニアとして、科学技術関連のデータベースの構築に全力を注いできた。そして1970年代の後半頃にはデータベースを活かすためにはどうしても通信ネットワークの整備が必要だと考えるようになり、大変な苦勞をして海外のオンラインデータベースにアクセスするようになった。当時の韓国からの国際電話は交換手経由であって、時間かたつと勝手に回線を切られていた、これではどうしようもない、テータ通信専用の回線が是非とも必要であると説いてまわって、ついに1982年には韓国で初のテータ通信を事業とする国策会社DACOMを設立し、事業本部長に就任した。

海外のデータベースの利用や、国内のデータベースを構築していくうちに、彼は次第にコミュニケーション主体のネットワーク作りに興味を傾斜させていくことになる。USAで活発なコミュニケーション主導のネットワークがあるように、韓国でも必ずユーザー同士が自由にコミュニケーションできるシステムが必要になるに違いないと考えた。韓国ではまさに政治情勢に民主化の嵐が吹き抜ける勢いで進んでいるさなかであった。1986年にはHメートルというシステムを始め、ここを核にしていろいろなパソコン通信のシステムが動き出すことになる。もっとも有名なものは「サランハン」という当時の副総理までもがメンバーとなったネットワークである。彼は日本のパソコン通信の現状を見るために1987年の春に日本を訪れた。当時日本では東京を中心とする、商用のパソコン通信もいくつか立ち上がっていたが、彼はそれらに目もくれずに、「情報化時代の村おこし」として地域ネットワークとして既にかなり有名になっていたコアラを見るために大分を訪れたのである。

2 柳 京熙氏の書いたコアラの印象より（1987年3月）

「日本の草の根運動の模範コアラ」

草の根運動（Grass Root）というのは、北米一帯での農民達間の情報交流網である。

私はこれをカナダのヒテオテックスのことだろうと考えていたが、わかってみるとカナダのヒテオテックスの一部が草の根であった。わか国に例えるとセマウル運動となるわけである。ところでわか国のセマウル運動では「情報交換」が問題となったことはなかったようである。ところか、大分県では、草の根運動として「コアラ」（Coala）」という名前の通信網が作られて、全国の模範となっている。しかし、実はコアラと名付けたのはとうも少し無理があるようである。こういうものは概して目的とする言葉の英語を使って無理をして作る事が多いか、このために英語の苦手な人々にはよりわからなく感じられる。

日本のKDDが運営するVenus-P（Very Efficient Network Utility System）の略語としてヒーナスをねらったにもかかわらず、人々はこれをVery Expensiveと解釈する。コアラの場合も同様である。この人達はCommunication of Oita Amateur Research Association即ち、大分県アマチュアコンピュータ通信研

究会という複雑で長い名前を縮めてコアラと呼ぶことにしていたのであった。オーストラリアのは乳動物コアラと混同される程度であったか、案内書に描かれた絵を見ると間違いなくコアラ熊を描いたものであった。

このように不自然に付けられた名前であるか、今、日本全国から関心を集めているコンピューター通信網である。さらに会長か知事であるため、会員募集には非常に恵まれている。私も大枚13,000円を支払って加入した。実のところ、今我々かしているラムクラブやサランハン会員たちと姉妹縁組みでも結んでいたらなあと思うほどである。

ここのシステムオペレーターである尾野徹という人は電気工事会社の専務でありながら、純粹にアマチュアとして自分の本業を差し置いてコアラの発展のために先頭に立っており、非常に感銘した。また私を自宅の書斎にまで案内してくれもした。

臨月の奥さんと二人の子供をわざわざお使いに行かせて、じっくり私との話かてきるように気遣ってくれた。その場から直接に暗号文をハンクル電子私書箱に送ったか、これか皆の端末機には、くすれた文字で表れたてであろう。しかし、そうたろうとしても送られたという事実は確認したことになる。これか日本の最も田舎から送ったということに意義かあるたろう。

発展の経過について詳しく聞いてみたか、この人たちは最初は「生活情報案内」テーターヘースに重点を置いていたか「電子メール」としてお互いか交信をするようになって、より興味を感じるようになったこと。そうするうちに送られてくるメールの量か多くなったので、これを「電子掲示板」に掲示するやり方か起こったこと。結局は、掲示板を通して「電子会議」をするようになって、いわゆる「SIG（特別関心者グループ）」か生まれたこと等か彼らの話であった。

3 韓国におけるパソコン通信の歩み

柳京熙氏へのインタビュー1990年3月

「ヘルリンのISOの会議に参席してから、帰る道に、1987年の3月23日、大分にきました。1日中、COARAの尾野さんと一緒に、何をなさっているのか、それを勉強しました。それで、すぐCOARAの会員に入ってから今まで、ちょうど3年になっています。それから今までトータルて使った時間てしたら、また3年間

て10時間もできていないくらいかと思いますけど、平均1ヶ月に2回くらいはCOARAを使っているかと思います。アクセスするとき、一番怖いのか、端末の種類を選択する機能でした。どうしてまたこんなに標準化してないのか、外から見ると、それか一番おかしいです。

ちょうどその前後に、そのときは2年前から僕自身、韓国でHメールという、UNIXヘースのメールで実験を、ハンクルのメールを実験をしていたところ、そのときまで約200~300名の加入者がありましたけど、加入者あてに毎日、何とかメッセージを送ることをずっとやってきました。それが1985年たと思いますけれども、エレクトロニック・メールについて全然知ってない人を10名くらい集めて、最初にやってみるということて、「サラノハン」というグループをつくりました。サラノハンというのは、韓国語で家の中で、外側にある男性用の部屋なんです。主にそれは情報交換用に使ったり、また賭博ですか、ああいうのに使ったりする部屋の名前がサラノハン・グループをつくってやった。それが非常に一般の関心を集めたところで、約200~300名くらい。それでCOARAの事情をよく知ってから帰って、新しい機能を持っているシステムを早くサービスするべきだと思って、そのときから開発をしました。それから、1987年の7月ころに、日本ではJISと言っていますけれども、韓国ではKSと言います。KSのハンクル・漢字コードがKSで発表されました。それが韓国でのPC通信のモーメントになったと思います、行政電算網の端末ステーションが全部、これをもとにして普及することになりました。

それと、実際、PC通信の可能性を実感したのは、「電子カフェ」の話です。それが偶然に電子カフェという小さいカフェに端末を置いて、知らない人はかりを集めた、10人くらいは来られるだろうと思っていたのに、100名近く集まった。それが一つの他のモーメントになったのではないかと思います。その後、おのおのか全部自分のBBSをつくるというて、今まで大体見ると、PC通信かてきる人の数は3万名くらいじゃないかと思います。それでBBS（電子掲示板システム）をやっている人、それを全部含めると、100カ所を超えるくらいの規模です。去年、1989年が韓国におけるPC通信の元年と見るのかいいじゃないかと思います。今のところは一番利用者の多いところは、「ケテル」の1万4000。「PCサーフ」と「セノリカン」合わせてみると約5000~6000の利用者。それから他のもの全部を含めて考えてみま

すと、約3万人くらいかてきるのはないかと思います、それで全部。これはBBSの可能性を初めて見つけたということ、今からとんとんその数が増加してくると思います。

私自身、今、KS情報処理部会の会長の役をやっていますけれど、主に今までPC通信を体験した結果は、文字の標準化をますするべきだと思います。日本でもその文字について、ほんとうに標準化しているのかについてはまた疑問がたくさんあります。もっと文字の標準化に努力しなければいけないと思います。最近、加入者たちの討論を見ると、今、ハノクルも韓国で使っている漢字のートも、それについてKSで発表されたハノクル 漢字コートについて批判的な意見もたくさんある段階であります。それで今後、もっと標準化について努力をしなければいけないと思います。

外て見た日本でのネットワークとしたら、まず、アクセスしにくい。選択をちょっと日本語で全部やらなければいけない。それで標準化が十分にきていないということ、日本語が少してきて、アクセスするのか大変。恥ずかしいことですが、私も今、COARAは英語版だけしかやってません。日本語端末を買おうとしても、何をかうかわかりません。いろいろなものがあります。これ何をかうか。それを選択するのにもう2、3カ月かかってしまって、忘れてしまいます。選択、簡単にできて、簡単にアクセスできるような方法が必要じゃないかと思います。

それと、もう一つ追加したいのは、4、5年前に私が東南アジアのネットワーク会議、ユネスコのネットワーク会議に出席したところ、ユネスコでのネットワークという意味は、ここで言っているフィンカル・ネットワークと別のものでした。あのとき東南アジアでのフィンカル ネットワークを直接ワートプロセッサとつないで使用しようという提案を出しましたけれども、結局、東南アジアではニューノラント、オーストラリア、マレーシア、その3カ国だけは参加しますと言っていましたけれど、ほかの国はまたデータ通信の事情がよくないということ、残念ながらそれで終わりました。けれども、アジア各国から見ても、日本の技術が早過ぎているのではないか。彼らたちの通信事情の発達のために何か援助をしながら、互いにコミュニケーションをしながら発達していかなければいけないんじゃないかと。主に私自身、ほかの国、東南アジアの人たちと話し合うときは何時もそういう

ことはかり聞いていますので、そのとき日本側からは、そういう話をとんな方が聞いているのか全然わからないもので、そういう要求が東南アジアでは非常に強いということを言いたいと思います。

今後も日本の国だけではなくて、それらの国とのコミュニケーションのための標準化なり、端末のこと、また文字のこと、それから言葉のこと、それについての交通性を高めるための努力をしてほしいと思います。」(談)

4 韓日パソコン通信シンポジウム1989の開催と韓国のパソコンの状況

熱心な柳京熙氏らの呼びかけに応じて、1989年の11月に第1回韓日パソコン通信シンポジウムがソウル市で行われ、日本からも八戸信昭東京都立科学技術大学教授を団長にコアメンバーを始め10数人が参加した。韓国では、そのとき草の根までを含めると50を超えるネットワークホストが既に存在していたが、24時間の運営をしている局は、10局あるかないか、大部分は24時から6時までというように、マニアが個人で「家人の寝たあと」開局を指定するという状態であった。

当時の韓国におけるパソコン周辺の状況を概括すると、パソコンの普及台数は30~40万台、販売価格は40万ウォンから10万ウォン(8万円から2万円)。政府では、西暦2000年までに、1000万台の普及を目標にしているということであるが、会場に出席した韓国のジャーナリストの一人は「この目標は、予定より早く達成されるだろう」と自信を発言していた。また韓国では1990年から1991年から、小学校のカリキュラムにパソコンの実習を取り入れることが既に決まっているということ、取り入れの是非はともかく、日本よりも着手が「早い」ことだけは確かである。またパソコン関係の雑誌が15誌発行されており、PC通信分野のものは6誌もある。「PCジャーナル」という雑誌が月刊で、25000部を発行している新聞でのPC通信の記事の頻出度は、業界(専門)誌で週2~3回、一般誌では科学関係の掲載が週2~3回とのことであった。当時の韓国におけるPC通信の大手は、DACOM社のPC Serveで、ID発行者数が5000人、これは無料で開放されている。ほかに、Ktelというターミナル中心のネットワークがあり、ターミナル利用で10000人、メールで2000人のIDが発行されているとのことであった。

日本側の関係者も、各自で受け取りかたは異なっていたか、2年前の日本という人や、あるいは5年前の日本と同じ状態にあるという人もいたようである。ただし、ネットワークにかける熱心さにおいてはかなりのものがあるとの感想は一致していた。

5 よなよなコアラに出現する韓国学生たち

前記のノンポノウムがきっかけとなり、コアラのチャットルームに毎夜韓国の学生達が顔を出すようになった。最初は互いに英語でたとえしくキーボードによる筆談を行っていたか、うまくつなかることがかわかると、韓国の方では日本語を理解できる学生を呼んできてローマ字による会話が始まることになった。彼らはIBM PCのクローン機を使用していたか、極めて卓越した優秀な技術を持っていて、ハングル文字を表示させるプログラムを自分達で作成し、標準ハングル文字フロントプロセッサとして普及させつつあった。またすぐに日本語の表示にも挑戦し、日本語のソフトJISコードと韓国におけるKSコードの変換に加えて独自のひらかな表示も作り上げてしまい、日本語でのコミュニケーションをたちまちのうちに可能にしまったのである。

※参考「コアラにおける海外チャットの模様」

—コアラ「グローバル」会議より転載—

発言0134(01084/松村 亮司 /弟テス) 90/04/11 03 20*0073回*レスポンス0
10個

最近、韓国の大学がよく chat ルームに入ってきます。

なかなか楽しい二人です。coara にも入会したいと言っておりました。

日本語もなかなか上手に使えます。

夜12時過ぎ、chatルームを覗いてみてください。

いつも、ほあしっこがお相手しています。

その部分です。

(I Chan)Ziya,bokukara mou ittido syouka: simasu

(I:matsumura)OK!

(I:Chan)Seogang Univ.2nd grade.

(I:Chan)majoring Chemical Engineering.

(I:Chan)Group sound de keyboard,.

ranさんがこのチャンネルに参加しました

(I:hoashi)when hi ran

(I:ran)A—dikurisita,.

(I:Chan)Korean—japan student association's chief

(I:ran)tarege.

(I:Chan)ore...

(I:Chan)finish..HiHiHI,,,

(I:ran)ha sodattanoka...

(I:ran)ore,immamade wakaranakkattan desu.

(I:Chan)Then,Let's hear about ran's profile..

(I:ran)what!

(I:ran)My real name is Shin Dong Hoon.

(I:ran)and,I live in SEoul,K0rea.

(I:ran)I'm university student.

(I:ran)2nd grade.

(I:ran)my major is law.

(I:ran)is there any question?

(I:ran)about me?

(I:ran)dh.I'm 19

(I:matsumura)Have you visited Japan yet?

(I:ran)yes.

(I:ran)chisaitokini..

(I:Chan)I'll visit Japan this summer for the first time in my life.

(I:ran)tokyo dake nandesukedo...

(I:matsumura)Oh,I have never been to Korea.

(I:hoashi)me too

(I:matsumura)Mr.Tommy,have you?

(I:TOMMY)yes,ihave

(I:TOMMY)two years ago to soul,

(I:Chan)(nihongodemo OK desukedo)

(I:ran)during the olympics?

(I:TOMMY)sono mae desu

(I:ran)ha.nanotamedesidaka?

(I:TOMMY)hajimaru mae no one month before.

(I:ran)nande sonnatokini...

(I:Chan)we can see kana or kanji

(I TOMMY)オリンピックのまえの韓国を視察に。ビジネスで。

(I:Chan)is there as

(I:ran)keisatsuni?nano business desidaka?

(I:ran)kansatu!

(I:ran)sumimasen...

(I:ran)I'm reading the book about oitta.

(I:ran)now..

(I:matsumura)では、私の自己紹介を

(I:TOMMY)oil business,oh no!"SHISATU=SIGHT FOR BUSINESS)

(I:ran)hai..

(I:matsumura)自動車のセールスマンをしています'

(I:TOMMY)松村さん どうぞ

(I:matsumura)1957年生まれ

(I:ran)watashi kondono nasu,betpun i kusumoridesu

(I:TOMMY)WELCOME'

(I:matsumura)是非、いらっしゃい

(I ran)1957 n e n ! 1

(I:hoashi)本と？

(l hoashi)ほんと？
 (l matsumura)あれ，1967てした
 (l ran)1967 n e n ?
 (l TOMMY)HAHAHA
 (l hoashi)さはよんた！
 (l Chan)haha,damasamete
 (l matsumura)年齢かほあしさんにはれてしきった
 (l ran)haha
 (l matsumura)しまった
 (l matsumura)25才といていたのに
 (l Chan)(onnazi mistake with hoasisan)
 (l ran)ano petppukara osakamade nanzikan kakarimasuka?(by ship)
 (l matsumura)へっへっへ
 (l hoashi)たまされました

6 コアラ「コリアトーク会議」開始！国際問題に応えるCOARAメンバー

こうした韓国からの熱心にアクセスにこたえるため、コアラでは1990年の6月から新しく電子会議室を設置することになり、会議の議長団には毎晩チャットで相手をしていた面々かあたることとなった。

宮瀬雅士さんはアノア全般に興味があり、韓国にも訪問したことのある高校の歴史の先生、伊藤富雄さんはパソコンや韓国にはほとんど縁なかったのにたまたま大分に着任したときに行われていたワープロ通信のモニターに応募して熱心なコアラ会員になった単身赴任中の石油卸会社の管理職の方、それに歯科技工士を目指すいろんな分野に興味のある学生の帆足美佐子さんというかなり普通といえは普通、なかなか揃わないといえはそうともいえるメンバーであたることとなった。

コアラはデモンストレーション用のIDでは普通読み出すことは出来るか書くことは出来ないことになっているのたか、この会議でと海外からの遠来のアクセスを歓迎するために、特別にデモ用のIDでも書き込み可能なようにすることになった。

会議が始まるとお互いの自己紹介のエールの交換に始まり、韓国語の講座や、ハングル文字を日本製のパソコンで表示するためのフリーウェアの紹介へと話題は進んでいった。さらに8月の終戦記念日か近づくにつれて次第に過去に存在した両国の不幸な時代へと話題は移り、日本と韓国との歴史への考え方の隔たりまでも次第に見えてきつつある。

7 韓国パソコン通信シンポジウム1990

こうしたオンラインでの活発なコミュニケーションの実績を背景に第2回目に韓日パソコン通信シンポジウムが1990年の11月に昨年と同じソウルで開催され、コアラからもコリアトーク会議の議長団3名が参加した。その場では1年前に比してより具体的な議論が交換された。システム運営とその問題点について、ひとつには利用者の献身的な貢献がまたまた必要なこと、それにネットワークの相互接続をもっと行っていく必要があることかます確認された。韓日間の交流普及については、言語、通信料金、技術標準の差をとるのかについて一層の共同研究が必要であった、そのための一つの解決策として、互いの言語コーナーをつくることを進めていくことになった。韓国側には日本語でアクセスできる会議室を、そして日本側でも早急にハングル語の専用会議室を設けることになったのである。今後については、韓国のPC通信は確実に成長しているか、またホランティアの熱意に負うところが多い、しかし日本のパソコン通信もそういった過程を経て少しずつ発展してきた、お互いに情報交換を今後も進めていくことを確認して盛況のうちに終了した。総して若い人の参加が目立ち、女性も皆若くて目か輝いている、真剣に発言者の話を聴く態度は、おおいに見習う必要があるとの参加者の感想であった。

今年1991年の秋にはソウルで日本と韓国共催のネットワークシンポジウム1991をかなり大きな規模で開催する話もいま進められつつある。いくぶん日本から遅れてスタートした韓国のPC通信は熱心な参加者の手て歩みか次第に速くなりつつある、通信基盤の整備さえ整えば、すぐに日本の現状なと追いついてしまいたいへんな勢いである。

職場の国際交流 —結核予防会での体験—

昭和14年4月28日、わか国の結核の蔓延を憂えられた皇后陛下は内閣総理大臣に令旨を賜り、こ内帑金を下賜された。この令旨に基づき、内閣は閣議において、結核予防事業を遂行する中核機関として結核予防会を設立することを決定した。総裁には、皇后陛下の思し召しを体し秩父宮妃殿下を奉載し、昭和14年5月22日、財団法人結核予防会は設立された。

このように、皇后陛下の令旨により設立された結核予防会は、水道橋に設立した本部を中心に、わか国唯一の総合的研究機関としての結核研究所の設置をはじめ、病院、診療所を付設し、広範囲な広報活動を開始、以来今日まで、各都道府県ごとに設置した支部と相呼応し、行政当局と密接な連絡のもとに、全国的な規模で結核予防事業を展開している。

この間、わか国の結核史上特筆すべき多くの業績をあげているのは周知のとおりであり特に近年は海外諸国に対しての国際医療協力について、結核研究所を中心としての活動が加わっており、その協力事業については国内は言うに及ばず、世界保健機関をはじめとして、諸外国からも高く評価されている。

この結核予防会に、国際研修業務もあり、東京都清瀬市にある結核研究所で行われている。国際研修業務とは、日本政府（外務省及び厚生省）の委託を受けて、東南アジア、中南米、アフリカ諸国の医師、細菌検査技師を招いて、定期コースの国際研修を実施している。結核対策コース、細菌検査コースは、それぞれ4ヶ月の長期コース、結核対策上級コースは4週間の短期コースである。

講義は、当結核予防会の職員、世界保健機関からの派遣講師が主として担当し、すべて英語により実施されている。結核対策コースは、全世界の中で英語により講義が行われる唯一の標準的な国際研修ということと、世界保健機関も共催で力を入れている。

かつては、東南アジア諸国が中心であったものか次第に範囲も広がり、中近東、南米、アフリカ、南太平洋あたりからも研修生が派遣されるようになった。

これらの国際研修は、昭和38年からコロナホ計画による医療援助の一環として行われ

ている。

この職場には、20代から60代までの職員が働いている。それぞれ、何等かの形で研修生と繋がりを持っている。つまり、職員のそれぞれは、初めてこの職場にきたときには、大変面食らったと言う事である。多くの外国人、それも非西欧人と接することはほとんど無かったからである。しかし、このようなことにも少しずつ慣れて、今までは殆ど抵抗が無くなったと言う事である。

それぞれのコースの研修生達は、研修期間中に研修旅行がある。この研修旅行には、この職場の職員が引率をするわけであるが、その間、研修生達と日本人スタッフは、それぞれの国の文化、歴史、経済等について話をしながらお互いの理解を深めていくのである。研修生達は、祖国に帰れば医療行政のトップとなり、医療はもちろんの事、祖国の発展に尽力することとなる。そのため、研修生達の多くからは、日本かなぜ戦後の荒廃からこのような素晴らしい経済発展が出来たのかと言う質問が出されることが常であった。そのため、日本人スタッフは、日本の文化、歴史、経済等を深く勉強しなければならなかったが、大変良い経験がてきたと思っている。

研修生達と接した職員は、当初外国人と言うと欧米人を思い浮かべていたが、今では、欧米人のみならず東南アジア諸国、中近東、アフリカ、南米等あらゆる国の人々を思い浮かべると言う。

さらに、研修生達が、言った言葉で職員の心に強烈に残っている言葉がある。

「日本人は、なんても食へたいものは食へられるし、欲しいものはなんても手に入って良いですね。」

家庭におけるパーソナル・リンケージ

1 我が家を取り巻く国際化その後

前回（2年前）の報告では、市民個人としての「縁」の変遷と伝播の様式を定義し、筆者自身及び周囲の人々の国際的なパーソナル・リンケージの事例を示しながら、その事例の中での「縁」の変遷と伝播の状況を分析した。今回はそれらの事例のうち特に我が家の妻と娘が関わっている国際化事例をフォローして、その後の状況を簡潔に報告したい。

(1) 自身の国際化その後

欧州3か月旅行、ノンカポール、韓国、米国西海岸への半公半私往来などは、結局現在に継続するパーソナル・リンケージを形成することはできなかった。最初のヒノチハイクはともかくとして、残りはいずれも公的な仕事の裏でのパーソナルな国際交流だっただけに、きっかけらしきものはヒノネス、リンケージともパーソナル・リンケージともつかぬ中途半端なものであり、さらに我が家庭でのそういう国際的交流への取り組み意識の未熟さから、家庭へスズて展開、活性化することができなかった為と今では総括している。か今の我が家の意識は違う。はっきり言って筆者自身の国際的パーソナル・リンケージは皆無に等しいか、後に述べる妻と娘のそれに圧倒されているのか現状である。社縁のみに生きてきた夫の姿か思い浮かべていたたけるだろう。

(2) 妻と娘の国際化その後

娘はまた小学校を卒業しようとしている時期であるので、さまざまな縁も本人の母すなわち妻とセツトになっていることが多い。彼らは我が家の国際派パーソナル・リンケージ連合軍である。主に娘の「カルチャー縁」から出発した我が家を取り巻く国際化のその後をスケッチしてみる。

H家のその後

H家は多国籍企業S社のニューヨーク（NY）に勤務する夫とその妻子の3人家族。ひとり娘の果月はサンジョコ生まれ（従って成人する時アメリカ国籍と日本国籍を選択できる）、4歳で帰国し、我が家の娘と出会う。出会いは「ス

イミンクスクール」。それぞれの親同士も親しくなって5年間家族交流。

3年前再びNYに戻ったH家との交流は盛んである。と言っても、お互いに妻同士、娘同士の情報交換が頻繁であって、企業戦士の夫同士はそれとところではない。それぞれ妻から情報の還元を受け事態を知るのみである。毎年夏休みにはH家か帰国し、果月は1か月程度日本の小学校に体験入学してきた。3年目になる今年は、ついに我が家の娘が単身ニューヨークを訪れることになっている。これは娘同士が話を決め、互いの親が追認する形になってしまった。湾岸戦争のニュースに小学校の娘がかかりついたのも、そして戦争の行く末からアラフ問題はなぜ存在するかをしつこく聞いてきたのも、自分かNYに行きたいはかりのことであり、親はそういう情熱に驚いたものである。

NYの地元の小学校の友達のことは写真と手紙で娘によく紹介してくれているし、こちらのこともNYの友達に紹介してくれているので、娘は潜在的友達である彼らが待っていてくれるのを楽しみにしている。ひとりて海外に出かける悲壮感などかけらもない。英語を本格的に習っていないのに英会話の練習を始めるし、筆者のワープロでボソボソと英単語らしきものを打って果月に手紙を送っている。無邪気なものである。心配しているのは親だけである。

・O家のその後

O家は、税理士事務所を経営する夫と妻子4人家族で、娘が2人。我が家の娘とは「ハレエスクール」での出会いでもう7年、お互いライバル意識もあり切磋琢磨している。一家全員キリスト教の洗礼を受けており、妻は教会のオルガン奏者として毎日曜日奉仕活動をしている。この教団は日米交流が盛んで、夏休みは子供たちをお互いにホームステイさせている。O家の娘も毎年夏休みアメリカに滞在して交流してくる。逆にO家にもアメリカの子供達がホームステイしていて、我が家の娘もたまに招待されて行って子供同士の「無邪気な国際交流」をしてくる。気負いもなければ、難しいことも考えていない。要するに、友達は友達だ、というところかて聞いたアレの感覚のようである。それかたまたまアメリカ人であるというたけなのだろう。だから、そのうちにうちでもアメリカの友達を招待しようよと屈託がない。妻はヒビっているけれど。

・Y家のその後

Y家は、多国籍企業のI社のNYに勤務する夫とち妻子3人家族。やはりY家の娘麻友美と我が家の娘はハレエスクールでの出会い。3年余り前、Y家はNYに転勤のため引っ越したか、麻友美はニューヨークでハレエを続けていると娘への手紙に書いている。ところか、来年小学校を卒業する前に妻子だけ日本に帰ってくると聞きいた。理由は娘麻友美の教育問題である。中学からは日本で教育を受けさせたい、それかすへせての理由で夫はNY単身赴任と相い成るのである。教育の問題は次節で触れる。

・T家のその後

T家は、音楽プロタクションを経営する夫とクラブ歌手の妻そして娘佳世の3人家族。やはり娘のハレエ仲間である。ハレエスクールは親を巻き込んでしまう習い事であるため、母親同士はいろいろな意味で親しくなる。T家は夫婦ともアメリカ生活が長く、今も仕事で日米間をしばしば往来している。アメリカで修行したため友人も多数いることもあり、佳世が小学校を卒業するのを機に来年ハワイに永住権を得て移り住む予定である。ハワイを家族の活動ステーションに据えて日米間を動くのたそうた。東京に住んでいる必然性がなくなったし、実に住みづらい所であるためと聞いた。我が家の娘は来年はハワイに行きたいと言いたすのではないか。T家と付き合っていると我が家の価値観も変わってしまいそうである。たまに、我が家もハワイに住んでやっていけないかなあ、と夢想（今のところは）してしまう。

2 家庭におけるパーソナル・リンケージの活性化と深化

(1) 多様化する日本の家族の絆

世の中、国際化がこれだけ言われていても、日本の家族に関しては相当伝統の重みを引きずっているのか、それか文化なのか、欧米諸国とはかなり異なった状況にある（欧米と同様の状態になるのか国際化ではないか）。例えば、離婚率、再婚率、同棲率、未婚の母率等々日本とアメリカとでは大きくかけ離れている。ただ、日本でも近年離婚、再婚、未婚の母かしばしば身の回りにも目につくようにはなってきたし、初婚年齢かとんとん高くなり30過ぎても結婚しない女性が急速に増えており、それらに対する「クライ、ウノロメタイ意識」もほとんど消えつ

つあるように思われる。特に大都市においてそういう傾向が顕著と考えられる。

ところで、家庭は家族という共同体の活動の場、家族ひとりひとは共同体の構成員、従ってなにかしかの「縁」のある人達が寄り集まって家族という共同体を構成している、というような社会契約的理念に基づいた家族論から見ると、日本の家庭すいぶん多様化してきているように思われる。戦後の高度成長期に社会トレントとなった核家族家庭、大都市圏の若者に多い夫婦本位の家庭（顕著な例がDINKS）、子供本位の家庭、父親が会社ヘノタリの疑似母子家庭、高齢化社会の到来、高地価のため近年復権しつつある三世代同居型家庭。など、日本人の価値観の多様化と相まってさまざまな家族のあり方が社会的に容認されている。

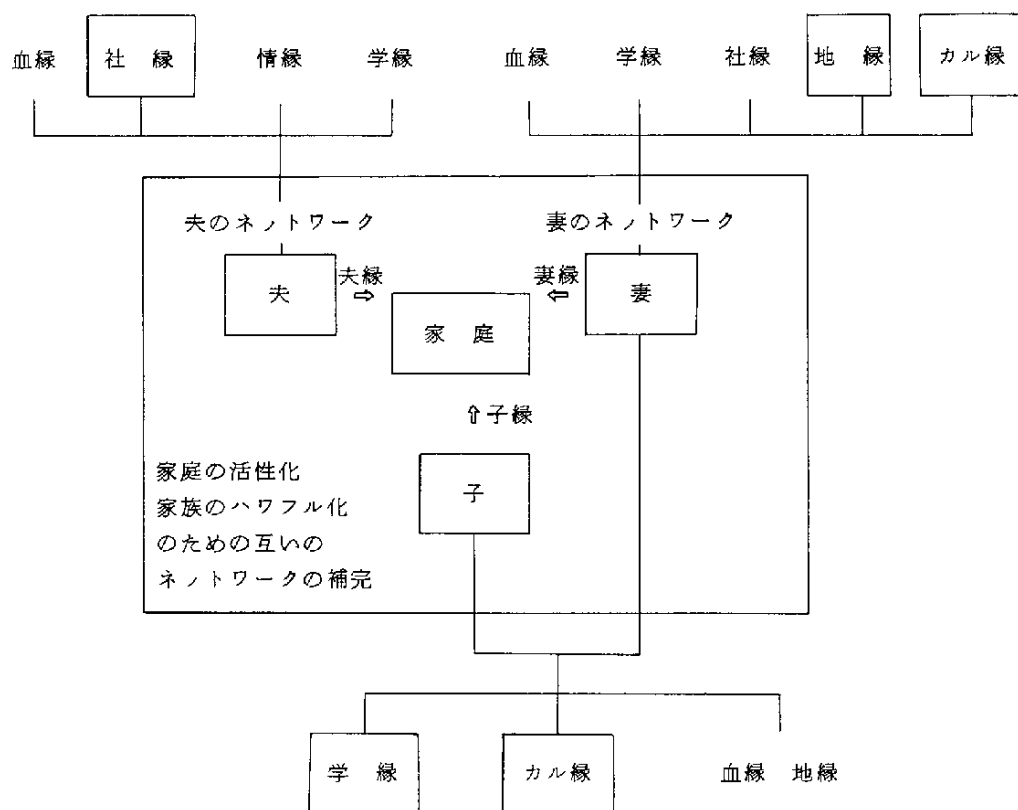
(2) 家庭の中の「縁」の見直し

「縁」については、前回レポートで触れたこととか、共同体としてのコミュニティにおけるお互いのつながり＝ネットワークのことを「縁」と呼びたい。人間の成長に伴って言えば、子供の頃の「血縁」、「地縁」、学校に行くようになっての「学縁」、社会人になってからの「社縁」、結婚して再生産される「血縁」、家族で定住することによる新たな「地縁」、趣味、習い事を通じた「カル縁」、そして「情縁」。情縁は、自らかある目的を持って情報発信して交流するネットワークの集合体と定義した。

昨今の日本の平均的なサラリーマン家庭では、夫は社会人間であるほと「社縁」だけが目立つ。ウィークターは付き合いで午前さま、土日は付き合いでゴルフた、社員旅行たとなると、外部との情報を家庭内のメンバーに還元する余地はまったくない（極端な例とか）。

一方妻はといえは、子供の学校での親同士のコミュニケーション、さまざまなカルチャースクールでの友達とのコミュニケーション、パート勤務していればそこのコミュニケーションと多彩な「縁」を作り、受け取ってくる情報は夫を圧倒する。うまく手を打たないと、夫婦間の情報格差が家庭の精神的崩壊を促す一因ともなりかねない。子供も、中学生くらいになると友達から相当情報を仕入れてくる。これまでは夫だけか家庭内での情報疎外を受ける。家族のメンバーが取り込んだ情報を個人のテータバンクに閉し込めず、家族全員の情報へと還元することか大切で、とりわけ夫は「社縁」以外からのネットワーク情報を積極的に受

け入れるよう努力すべきではないか。それか家庭の活性化、家族のパワフル化につながる縁の組み合わせにもなる。それぞれの「縁」の過不足を補完しあい、従来の義理人情型ではない新しいネットワークを形成できる家庭か今後期待される。



(3) 国際化家族のプロフィールと課題

このように多様化する家族の中で国際化の進んだ家族とはどんな特徴があるのだろうか、私達の身の回りにある典型は先の事例に挙げたタイプの家族である。

すなわち、ホーターレス型企業に勤務する夫、外国経験の豊富な妻、こく自然に海外文化を、外国人を経験してきた子供たちで構成される家族である。日本で

も経済のホーダーレス化は10年前から始まっており、たとえば多国籍企業の発展は著しいものがある。昨今の女性は海外経験豊富な人達が多いので、これからますますこの「国際化家族予備軍」は急増するとみてよい。国際化とはもちろん海外生活を経験することだけでなく、お互いのスタンスである文化、価値観を交流し、理解しあうことまで含んでいる。

ところで、これらの国際化先行家族の抱える課題として、最大のものは子女の教育である。それ以外の例えば、海外に定住した場合の地域活動、教会活動その他のボランティア活動等は、企業としての考えかたも「郷に入れば郷に入れ」で積極的になっているので、さほど摩擦はないそうである。ただ、どうしても日本人たけて群れてしまうクセはなおらないそうで、筆者は教育のせいだと考えている。30代、40代の親はまた無理なのだろう。個性尊重型・自己責任型の社会と教育が浸透した結果でない「個の確立」は無理である。従ってしはらくは海外でも日本人同士群れ集まってしまう習性はかわらないだろう。

子女の教育の問題は次のようなことに集約できる。

- ・海外滞在日本人家族の子女の教育問題

子供が中学になる頃には、親として「日本語人」（日本語文化で価値観を形成する人）として育てるか、「英語人」（英語文化で価値観を形成する人）として育てるか、決心しなければならぬ。

- ・夫の海外滞在がいつまで続くかという見通しが明確にならない。

- ・帰国子女の教育制度、編入制度

(4) パーソナル・リンケージの活性化による課題の解決

先の事例の中でも、Y家は中学から日本で教育を受けさせたい家族であったし、T家は逆にアメリカ人として教育を受けさせよう、アメリカにスタンスを置こうと決心した事例である。

一方H家は今迷っている。もまなく中学に入学するひとり娘はアメリカで延べ8年間、日本で5年間生活し、今後夫が日本に戻る見通しかたっていないことから、「日本人」と「アメリカ人」の選択に迷っている。この2年間の夏休み、我が家にスティして娘の通う小学校に「体験入学」したり、今年は帰国子女へのマン・ノーマン日本語熟を見つけてあげてそこに2週間通うなど、基本方針は今のところ

る「日本人」である。しかし、小学校高学年3年間をNYの現地に通っているうちに相当アメリカナイズされている。娘に来る手紙はますます和英混合文となり、日本語が怪しくなりつつある。気分は完全にアメリカである。自分の考えかたをストレートに積極的に表現できる、自己主張も激しい。筆者の娘とは個の自立度合いがまるで違う。筆者など、ハイスクールまでこのままだったら仮に親が帰国することになっても彼女はアメリカに留まることになるだろう、と見ているし、そうするようアトハイスしている。

我が家も娘同士のパーソナル・リノケーン、妻同士のパーソナル・リノケーンをもっと活性化させるべく、とんとん積極的に情報発信、アトハイス、共同行動に出ようとしている。娘をアメリカにやり、自分てネットワークを拡げさせ、次に会うまでは通信手段で交流し、日本にも呼び、ついでに親もそのリノケーンに巻き込まれてしまおうという考えである。筆者自身も助けられることを探してとんとん提供していくつもりである。国際的なパーソナル・リノケーンを阻害するものはもうほとんどなくなりつつあるのではないか。言葉の壁も子供達の「無邪気な交流」をまねすればよいし、コミュニケーション手段も一段と安くなった国際電話と国際宅配便が促進剤になってくれる。

——禁無断転載——

平成 3 年 3 月発行

財団法人 日本情報処理開発協会

東京都港区芝公園 3 - 5 - 8

機 械 振 興 会 館 内

TEL (3434)8211 (代表)

印刷所 株式会社 三 川 社

東京都港区芝大門 1 - 1 - 21

TEL (3433)1481 (代表)

